

仙台市文化財調査報告書第173集

下ノ内浦遺跡

—第4次発掘調査報告書—

1993年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第173集

下ノ内浦遺跡

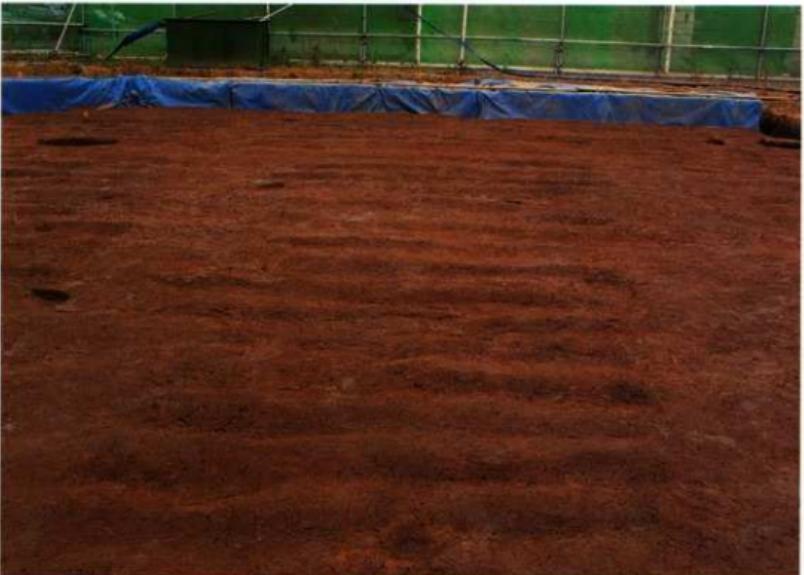
—第4次発掘調査報告書—

1993年3月

仙台市教育委員会



6 c 層蟲跡 (I 区南東より)



6 c 層蟲跡 (I 区南より)



6c層帯跡断面 (I区西壁C-1グリッド)



6c層帯跡断面 (I区西壁B-1グリッド)

序 文

日頃、仙台市の文化財保護行政に対しまして多大のご協力をいただき、担当する仙台市教育委員会にとりましては、誠に感謝にたえません。

富沢地区および荒川の流域は、区画整理の完了や地下鉄の開業により、急速に開発、市街化が進んでおり、仙台市南部の副都心として生まれ変わろうとしております。こうした動きのなかで、開発に伴う発掘調査が頻繁に行われ、さまざまな先人文化が解明されてきております。その反面、遺跡の保存に関する諸々の問題が露呈していることも事実であり、文化財保護の課題となっていることも否めないところであります。

さて、この度発掘調査いたしました下ノ内浦遺跡は、その周辺も含めてこれまでにも縄文時代以来の先人の生活の痕跡が、重層的に残されてきた地域であります。今回の調査におきましても、縄文時代から近世にいたる生活の痕跡が発見され、荒川流域における人間の営みの歴史を解明するための一助となる成果が得られました。こうした文化遺産を後世に継承し活用していくことは、新時代を迎えるとしている仙台市の「まちづくり」に欠かせない大切なことです。今後とも市民の皆様のご支援とご協力をお願い申し上げまして、刊行のご挨拶といたします。

最後になりましたが、調査と整理に参加された皆様と、本書の作成にあたりご助言、ご指導くださいました各位に心から感謝いたします。

平成 5 年 3 月

仙台市教育委員会

教育長 東海林 恒英

例　　言

1. 本書は、共同住宅建設に伴う下ノ内浦遺跡第4次発掘調査報告書であり、すでに公表された広報紙等に優先するものである。
2. 本書の執筆・編集は文化財第二係 佐藤甲二が行ったが、第Ⅳ章の分析・執筆については、花粉分析を守田益宗氏、プラント・オバール分析を古環境研究所に依頼した。
3. 石器の材質の鑑定は、東北大学 蟹沢聰史氏にお願いした。

凡　　例

1. 本書中の十色については「新版標準土色帳」(小山・竹原:1973)を使用した。
2. 本書中の北(N)は、全て真北である。
3. 本書中の座標値は、平面直角座標系Xにおける座標値である。
4. 本書の第1図の地形図は、建設省国土地理院発行5万分の1「仙台」を使用した。
5. 遺構名の略語として、SD:溝跡 SK:土坑を使用した。
6. 報告書刊行にあたって調査時の溝跡番号を以下のように変更した。
• SD 2 → SD 5側 • SD 3 → SD 2 • SD 4 → SD 3 • SD 5 → SD 4
7. 出土遺物の登録に際しては、種別によって、以下の記号を使用した。
A. 縄文土器 B. 弥生土器 C. 土師器 D. 赤焼土器 E. 須恵器 F. 瓦
I. 陶器 J. 磁器 K. 石器 N. 金属製品 P. 土製品
8. 遺物観察表における()内数値は、図上復元値である。
9. 本文中使用の「灰白色火山灰」(庄子・山田:1980)の下年代は、現在、10世紀前半頃と考えられている(白鳥:1980)。
10. 明らかに弥生時代に属する出土遺物に関しては、第Ⅱ章4. 8層で一括して取り扱った。

本文目次

第Ⅰ章 下ノ内浦遺跡第5次調査のあらまし	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査要項	1
3. 下ノ内浦遺跡について	2
4. 調査方法	5
5. 基本層序	6
6. 調査概要	6
第Ⅱ章 検出遺構と出土遺物	10
1. 6a層上面	10
(1) 1号土坑-SK1	10
(3) 3号土坑-SK3	12
(5) 2号溝跡-SD2	12
(7) 小溝状遺構群	14
2. 6c層上面	16
6c層壙跡	16
3. 7a層上面	26
(1) 1号住居跡-S11	26
(2) 5号溝跡-SD5	32
4. 8層	34
(1) 遺物出土状況	34
(2) 出土遺物	37
(3) 8層の性格	62
第Ⅲ章 その他の出土遺物	63
1. 基本層1~7層	63
(1) 基本層1~4層	63
(3) 基本層6層	64
(4) 基本層7層	65
2. 基本層12~15層	66
(1) 基本層12層	66
(3) 基本層14層	67
(4) 基本層15層	67
第Ⅳ章 分析	70
1. 下ノ内浦遺跡の花粉分析	70
2. 仙台市、下ノ内浦遺跡（第4次）におけるプラント・オパール分析	73
第Ⅴ章 まとめ	81

挿図目次

第1図	周辺の遺跡	3	第24図	第I類土器	38
第2図	下ノ内浦遺跡全体図	4	第25図	第II類土器1	39
第3図	調査区配置図	5	第26図	第II類土器2	43
第4図	基本層序	6	第27図	第II類土器3	44
第5図	調査区北壁セクション図	8	第28図	第II類土器4	45
第6図	調査区南壁セクション図	9	第29図	第II類土器5	46
第7図	6a層上面検出遺物全休図	11	第30図	第II類土器6	50
第8図	S K I ~ 3平・断面図	13	第31図	第II類土器7	51
第9図	S D I ~ 3・小溝状造構断面図	15	第32図	第III類土器1	53
第10図	6c層鳥跡平面図	17・18	第33図	第III類土器2	54
第11図	6c層鳥跡7a層上面耕作痕平面図 (畠を合成)	19	第34図	第III類土器3	56
第12図	6c層鳥跡断面図1	20	第35図	土製品	58
第13図	6c層鳥跡断面図2	21	第36図	石器1	59
第14図	S D 4平・断面図	23	第37図	石器2	60
第15図	6c層鳥跡山土遺物	25	第38図	石器3	61
第16図	7a層上面検出遺構全休図	26	第39図	基本層5層出土遺物	63
第17図	S I I 平面図、断面図1	28	第40図	基本層6層出土遺物	64
第18図	S I I 断面図2	29	第41図	基本層7層出土遺物	65
第19図	S I I 出土遺物1	30	第42図	基本層12~15層出土遺物1	67
第20図	S I I 出土遺物2	31	第43図	基本層12~15層出土遺物2	68
第21図	S D 5断面図	32	第44図	イネのプラント・オバールの検出状況	77
第22図	S D 5出土遺物	33	第45図	おもな植物の推定生産量と変遷1	78
第23図	8層遺物出土分布図	35	第46図	おもな植物の推定生産量と変遷2	79

表目次

表1	遺跡地名表	2
表2	下ノ内浦遺跡発掘調査年度別成果一覧表	4
表3	基本層序土層記録表	7
表4	6c層鳥跡数計測表	22
表5	遺構内出土遺物数量表	33
表6	8層出土第II・III群土器のグリッド間接合資料(2.5m以上)	36
表7	接合後の群別上層数と出土層位	37
表8	第II群土器口縁部類別資料数と出土層位	41
表9	口縁部外面上半文様と口縁部類別資料との関係	42

表10 弁生時代に属する石器の器種と石材点数	58
表11 出土遺物総数量表	69
表12 花粉分析試料採取地点と試料番号	71
表13 下ノ内袖遺跡花粉分析結果	72
表14 プラント・オパール分析結果	75
表15 各層におけるイネのプラント・オパール密度と播種の可能性	76

写真図版目次

図版1 基本層序	84	図版21 7 a 層上面検出遺構5(Ⅱ区)	104
図版2 下層調査区基本層序	85	図版22 下層調査区	105
図版3 6 a 層上面検出遺構1(Ⅰ区)	86	図版23 S 1 1 出土遺物	106
図版4 6 a 層上面検出遺構2(Ⅰ区)	87	図版24 遺構内出土遺物	107
図版5 6 a 層上面検出遺構3(Ⅱ区)	88	図版25 縄文時代出土遺物1 (土器・土製品・石器)	108
図版6 6 a 層上面検出遺構4(Ⅱ区)	89	図版26 縄文時代出土遺物2(石器)	109
図版7 6 a 層上面検出遺構5(Ⅱ区)	90	図版27 弁生時代出土遺物1(土器)	110
図版8 6 c 層晶跡1(1区)	91	図版28 弁生時代出土遺物2(土器)	111
図版9 6 c 層晶跡2(1区)	92	図版29 弁生時代出土遺物3(土器)	112
図版10 6 c 層晶跡3(1区)	93	図版30 弁生時代出土遺物4(土器)	113
図版11 6 c 層晶跡4(Ⅱ区)	94	図版31 弁生時代出土遺物5(土器)	114
図版12 6 c 層晶跡5(Ⅱ区)	95	図版32 弁生時代出土遺物6(土器)	115
図版13 6 c 層晶跡6(Ⅱ区)	96	図版33 弁生時代出土遺物7(土器)	116
図版14 6 c 層晶跡7(1区)	97	図版34 弁生時代出土遺物8(土器・土製品)	117
図版15 6 c 層晶跡8	98	図版35 弁生時代出土遺物9(石器)	118
図版16 6 c 層晶跡断面	99	図版36 弁生時代出土遺物10(石器)	119
図版17 7 a 層上面検出遺構1(Ⅰ区)	100	図版37 基本層1～7層出土遺物	120
図版18 7 a 層上面検出遺構2(Ⅱ区)	101	図版38 プラント・オパール顕微鏡写真1	121
図版19 7 a 層上面検出遺構3(Ⅱ区)	102	図版39 プラント・オパール顕微鏡写真2	122
図版20 7 a 層上面検出遺構4(Ⅱ区)	103		

第Ⅰ章 下ノ内浦遺跡第4次調査のあらまし

1. 調査に至る経過

長町南アベニュービル建設予定地は、仙台市太白区長町四丁目32-1, 11番地に所在し、下ノ内浦遺跡の範囲内に位置する。マンション建設計画では、地下構造物があり、遺跡の破壊が予測される部分が、約642m²に及ぶ。このため、申請者の銅谷設備株式会社と仙台市教育委員会は協議し、工事に先駆け発掘調査を実施することとした。

2. 調査要項

遺跡名：下ノ内浦遺跡（仙台市遺跡登録番号C-300）

所在地：仙台市太白区長町四丁目32-1, 11番地

調査目的：共同住宅建設に伴う事前調査

調査面積：548m² (I区303m²・II区245m²)

調査期間：平成3年度 平成3年8月28日～12月21日、平成4年3月4日～3月26日

平成4年度 平成4年4月15日～7月7日

整理期間：平成4年8月1日～平成5年3月26日

調査主体：仙台市教育委員会

調査担当：仙台市教育委員会文化財課調査第二係

調査担当職員：平成3年度 佐藤甲二 工藤信一郎 平成4年度 佐藤甲二 渡部弘美

整理担当職員：佐藤甲二 渡部弘美 斎野裕彦 佐藤淳

調査参加者：高橋美香 渡辺洋子 佐竹さく子 青山諒子 大槻明美 山田やす子 永野泰治
佐々木洋介 宮崎都 渡辺イチ子 岩井レイ子 渡部麗子 阿部洋子 菅井君子
佐竹カツヨ 水野信子 板橋スエノ 早川裕子 松野順子 板橋栄子 金山幾代
横山美智子 菅原弘 磐中真知子 H野きみ子 須賀栄子 針生昭三 太田兼也
菅井美枝子 小野辰雄 千葉正昭 齋藤百合子 砂金正男 千葉千枝 大友鶴雄
水戸智 永沢幸枝 山田沢子 赤井沢千代子 工藤ゑなよ 赤井サダ子 富田是
小林テル 鈴木かつ子 蓬沼英子 蓬沼秀子 植野美登子

整理参加者：高橋美香 渡辺洋子 佐竹さく子 青山諒子 大槻明美 山田やす子 金山幾代
森みほ子 菅谷裕子 西条裕子 小山つるよ 泉美恵子 伊藤房江 大山由紀子

調査協力：銅谷設備株式会社 森建設株式会社

3. 下ノ内浦遺跡について

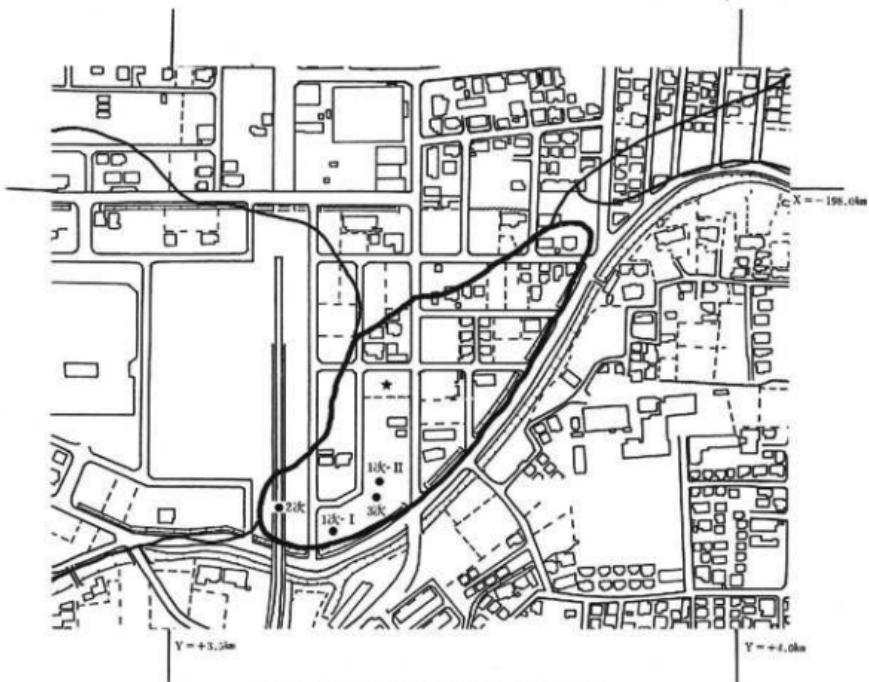
下ノ内浦遺跡は仙台市西部の仙台市太白区長町南に所在する。遺跡は、名取川の支流荒川左岸の自然堤防上を中心に位置する。遺跡北側は、富沢遺跡の広がる低平で湿潤な後背湿地と接している。遺跡の総面積は、約30,000m²で、現標高は10~12mである。現在まで3次に渡る調査が実施され、縄文時代早期（日計式期）より近世までの各時代の遺構が検出されている。遺構の性格も狩猟城、墓域、居住城、生産城にかかわる種々なものが検出されている（表2）。

表1 遺跡地名表

遺跡名	古地名	外氏名	地名	立場	年代
1. 佐賀内分寺跡	自然堤防	奈良・平安・近畿	41. 沼澤古墳	自然堤防	古墳（後）
2. 富沢跡（尼寺跡）	自然堤防	奈良・平安・小字	42. 山田道跡	自然堤防・後背湿地	平安～中世
3. 古墳群（古墳）	古墳（後）		43. 富沢古水道跡	自然堤防	奈良・平安
4. 仙台市西河原跡	神農寺跡	奈良・平安	44. 周山古ノ丁道跡	自然堤防	奈良・平安
5. 内川遺跡	自然堤防・波音御前	古墳（後）	45. 元伏里古跡	自然堤防	奈良・平安
6. 番見所古跡	自然堤防	古墳（後）	46. 伏里古跡	自然堤防	古墳・平安
7. 各務城跡	自然堤防	古墳・中世・近畿	47. 新江道跡	自然堤防	奈良・平安
8. 外野城跡	自然堤防	中世	48. 北屋敷遺跡	自然堤防	奈良・平安
9. 神農寺跡	自然堤防	平安～平成	49. 伊勢屋古跡	自然堤防	奈良・平安
10. 今井遺跡	自然堤防	古墳（後）～近畿	50. 大野田古墳群	自然堤防	古墳（中・後）
11. 田代遺跡	自然堤防	古村	51. 工の堀跡	自然堤防	古墳
12. 泉源跡	河原町	古墳（中）	52. 佐原理古墳	自然堤防	古墳（後）
13. 佐野山城穴跡	丘陵	古墳（後）・奈良	53. 番見所古跡	自然堤防	古墳（後）
14. 大字寺山城穴跡	丘陵	古墳（後）	54. 伊勢屋古跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
15. 佐野山城穴跡	丘陵	古墳（後）	55. 下ノ内浦遺跡	自然堤防・後背湿地	奈良・平安
16. 西原遺跡	河原底丘	古墳	56. 下ノ内浦跡	自然堤防	繩文・弥生・古墳・平安
17. 佐野古跡	自然堤防	古墳（中）	57. 六反山遺跡	自然堤防	繩文～近畿
18. 佐野城跡	丘陵	古墳（後）・奈良	58. 五戸山遺跡	自然堤防	古墳
19. 佐野寺遺跡	自然堤防	西文・奈良・中世・古墳	59. 佐野塙跡	自然堤防	西文
20. 郡山遺跡	自然堤防	古墳・中世・平安	60. 墓ノ内浦跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
21. 北首城跡	自然堤防	宝物・丘	61. 斎藤理跡（大森跡）	自然堤防	奈良・平安
22. 久ノ上ノ跡跡	自然堤防・後背湿地	古墳・奈良・平安	62. 佐治山古坟群跡	自然堤防・後背湿地	繩文・奈良・平安
23. 細谷堅木遺跡	丘陵	古墳・奈良・平安	63. 六本松古跡	自然堤防・後背湿地	奈良・平安
24. 稲荷塚	後背湿地	古墳（後）	64. 墓ノ内浦跡	自然堤防・後背湿地	奈良・平安
25. 通町ノ丁道跡	河原底丘	繩文・弥生・奈良・平安	65. 上野遺跡	河原底丘	繩文（中）・近畿・平安
26. 二室古墳	後背湿地	古墳	66. 山川多里古跡	河原底丘	繩文・奈良・平安・江戸
27. 仲町印跡遺跡	河原底丘	奈良・平安	67. 船越原遺跡	河原底丘	繩文・奈良・平安
28. 仲町古墳	河原底丘	古墳	68. 清土原古跡	河原底丘	繩文・平安
29. 壬ノ山遺跡	丘陵	繩文（早・後）・弥生・平安	69. 稲谷跡	丘陵	古墳・奈良・平安
30. 佐竹古跡	丘陵	繩文～平安	70. 山田ノノ山遺跡	自然堤防	IIM（第1・繩文～中・後・近・江戸・平安・江戸）
31. 土手門塙穴跡	丘陵	古墳・奈良	71. 小寺子	丘陵	江戸
32. 三井山遺跡	丘陵	古墳・奈良	72. 北側遺跡	河原底丘	古石塚・繩文（平・近・中）・古墳・江戸
33. 萩原古跡	丘陵	古墳・奈良・平安	73. 四輪半藏跡	丘陵	繩文・平安・中世
34. 上ノ室古跡	丘陵	繩文（前・中）・平安	74. 青空山遺跡	丘陵	古石塚
35. 金山遺跡	丘陵	古墳（中）	75. 松木道跡	自然堤防	平安・中世・近畿
36. 土地原古跡	河原底丘	古墳	76. 開陽道跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
37. 蔵原古跡	河原底丘	古墳（中）	77. 七瀬跡	自然堤防	奈良・吉備・平安・平安
38. 古内ノ崎古跡	後背湿地	古墳（後）	78. 東久保遺跡	自然堤防	奈良～平安
39. 宮代遺跡	後背湿地	野石塙・近畿	79. 旗町原遺跡	自然堤防・後背湿地	弥生・奈良・平安・中世
40. 佐渡遺跡	自然堤防・後背湿地	繩文・古墳・平安・近畿	80. 大澤山古墳	河原底丘	古墳



第1図 周辺の遺跡



第2図 下ノ内浦遺跡全体図(★4次調査区)

表2 下ノ内浦遺跡発掘調査年度別成果一覧表

下ノ内浦遺跡調査年度		遺構年代	検出遺構	調査時出土遺物
第1次 (1983年)	I区	平安時代以前	河川跡	土師器・須恵器・中世陶器・青磁等
	II区	平安時代以降	十炕・ビット	
第2次 (1983~1984年)	平安時代	住居跡・廻路・獨立柱建物跡	绳文土器・弥生土器・土師器(縫合式・国分寺下層式・表杉ノ入式等)・須恵器	
	不明	廻路・獨立柱建物跡・十炕	赤燒土器・石器・土製品等	
第3次 (1987年)	縄文時代早期	廻路・穴	縄文土器(日計式・大木5b式・南墳式)	
	縄文時代後期	配石墓	・弥生土器(十三塚式・天王山式)・土師器(国分寺下層式・表杉ノ入式)・須恵器・土器高・石器・石製品・炭化米等	
	弥生時代後期	土塁跡・土器棺墓・圓窓・ビット		
	秦漢時代	住居跡		
	平安時代以前	小窓跡・梁欄跡		
	平安時代	廻路跡・獨立柱建物跡・柱列・清跡・水田跡・小窓状遺構跡		
	縄文時代早期	廻路・穴	縄文土器(日計式等早期・南墳式等後期	
	縄文時代早期以降~後期以前	河川跡	・晚周)・弥生土器(筒形器式?)・天王山式)・土師器(古墳時代・国分寺下層式・表杉ノ入式)・中世陶器・土器・石器等	
	弥生時代~奈良時代	廻路		
	奈良時代	住居跡		
	平安時代・中世末	河川跡		
	平安時代後半以降	火葬施設		
	近世	建物跡		

注) 第1次調査: 仙台市文化財調査報告第59集『下ノ内浦遺跡』1983

第2次調査: 仙台市文化財調査報告第69集『仙台市高遠鉄道関係遺跡調査報告書』1984

仙台市文化財調査報告書第82集『仙台市高遠鉄道関係遺跡調査報告書』1985

仙台市文化財調査報告書第89集『仙台市高遠鉄道関係遺跡調査報告書V』1986

第3次調査: 仙台市文化財調査報告書第15集『下ノ内浦遺跡』1988

なお、下ノ内浦遺跡の歴史的環境及び地形と地質に関しては、下ノ内浦遺跡第3次調査報告書（渡部：1988）、富沢遺跡第15次調査報告書（斎野・豊島：1987）、富沢遺跡第30次調査報告書（太田：1991）に詳しい記載があるので、これを参照されたい。

4. 調査方法

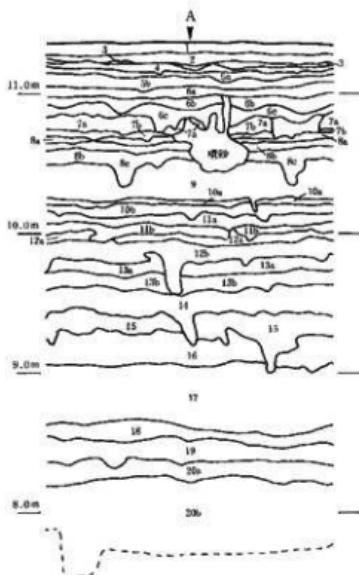
調査は、耕土置き場の関係上、西側のⅠ区と東側のⅡ区に分け、Ⅰ区の調査終了後、Ⅱ区の調査を開始した。両調査区を合わせた設定面積は、約 30.5×15.5 mの548m²（Ⅰ区303m²：Ⅱ区245m²）である。調査は、盛土及び直下の1層（旧水田耕作土）下部までを重機で除去し、以下は人力により行った。調査区内にはⅠ・Ⅱ区とも10層観察及び排水用の側溝を設けている。調査は9層上面までは、調査区全面の精査を実施し、9層以下は、約 10×10 mの試掘区を設けて掘り下げた（最下層面では約 2.0×1.5 m）。遺構の測量は、任意に設定した基点（S O・E O）による 5×5 mグリッド（南北A～D、東西1～8）を基準として実施した。なお、グリッド南北軸は、ほぼ真北方向である（N - 5°55' - W）。また、グリッド基準杭（杭A・B）の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭A：X = -198174.268m、Y = +3714.202m 杭B：X = -198164.272m、Y = +3714.185m）。



第3図 調査区配置図

5. 基本層序

今回の調査では、盛上下に大別20層、細別では32層が確認された。5 b・6 a・9層の各層は部分的には2層に分層できる箇所もあったが、1層として取り扱った。各層の土質は、6 c層のシルトを除けば、8層までがシルト質粘土か粘土、9層から11層までは砂質シルトか粘土、12層から18層までは粘土、19層以下になると砂質成分が多くなり、最下層の20 b層では砂礫となる。以上の各層の内、8 b・8 c層は粘性が強く、13 a・13 b層は堅敏である。また、最下層の20層の細分層a・bは指交関係をとる。グライ化は、12 b層以下から認められ、13 a・13 b・17・20 a・20 b層の各層は顕著である。5 b層中からは灰白色火山灰ブロックが検出されている。現在のものを除く明確な水田土壤は認められなかったが、5 b層以上の各層及び7 b層は、水田土壤の可能性がある。遺物出土層は1～8 c・12 a・12 b・13 b・14・15層の各層である。各層の傾きとしては、1～5 b層までは、全体的に南西方向の緩やかな上り傾斜を示すが、6 a層～8 b層の間では、調査区北壁E20ライン付近と調査区南壁E30ライン付近を結んだ方向で、地形的変換点が認められ、これより西側では上層とは異なり北西方向の緩やかな上り傾斜となる。10層以下では、調査区が狭く明確な傾向性はつかめないが、16層まではほぼ水平であるが、17層以下になると、ややきつい北方向への下り傾斜となる。なお、過去の地震に伴うと思われる噴砂が検出されている。噴砂は、調査区を東西方向に蛇行・枝分かれしながら走行している。断面観察では、9層中から噴出し、4層上面まで達している。



第4図 基本層序

6. 調査概要

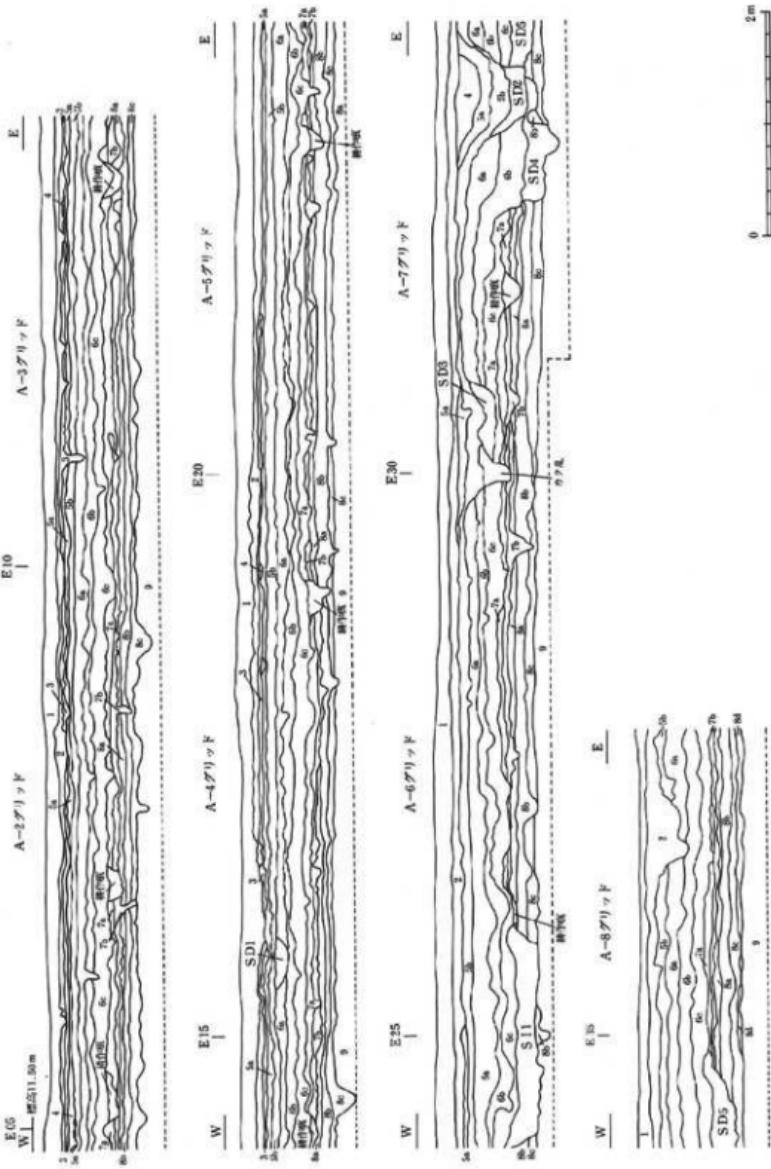
調査は平成3年8月28日から翌年の7月7日までの、1・2月の休止期間を除いた約8ヶ月間実施した。まず調査は、西側のI区より始めた。

表3 基本層序土層記註

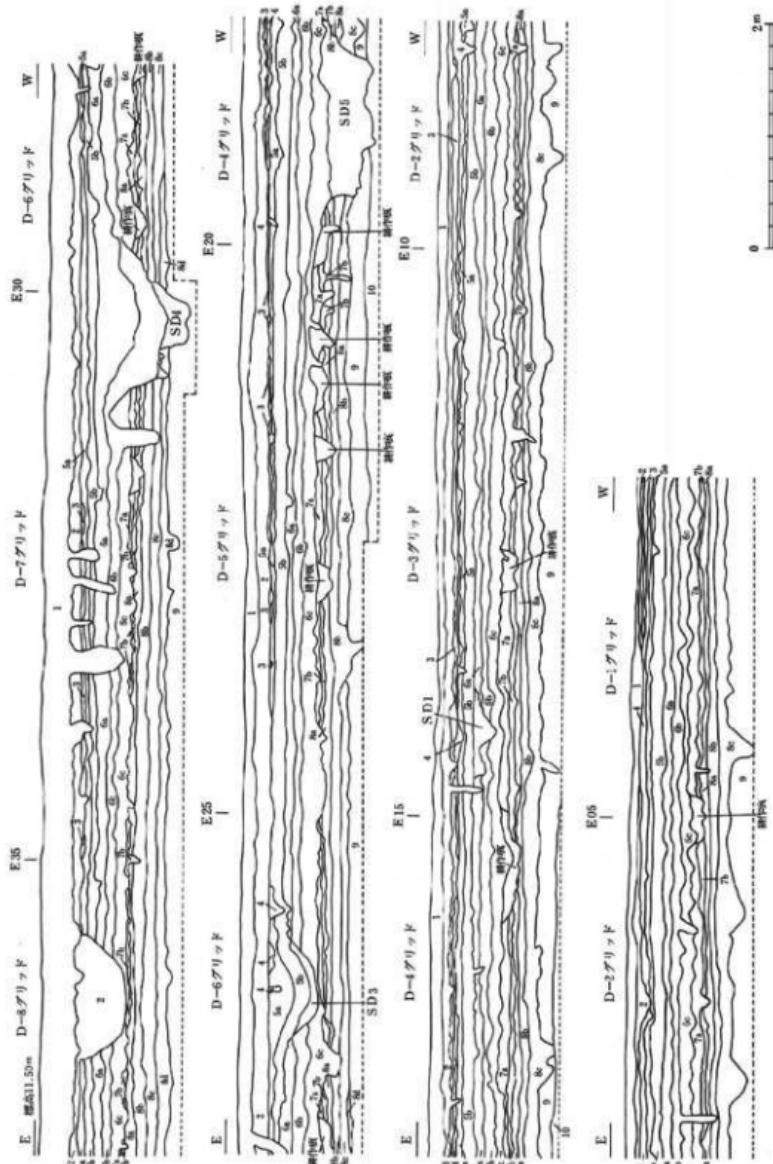
層序	色	土質	厚さ[m]	堆積形態	堆積化性	固有物	備考
1	褐色	10YR 4/1 シルト質粘土	3~36	並行流痕	路跡		上層に部分地盤
2	灰褐色	10YR 4/2 粘土	2~4	粗粒多量	シングルな状態・粗粒		下側地盤
3	黃褐色	2.5Y 4/1 黏土	1~6	風化多量	シングルな表面少量・塊体		下層地盤・部分的な分布
4	褐色	10Y R 2/2 黏土	2~12	複合多量	シングルな状態少量		下層地盤
5a	灰黃褐色	10Y R 4/2 シルト質粘土	1~15	洪積少量	シングルな状態多量・塊体		下層地盤
5b	灰褐色・黃褐色	10Y R 5/1 シルト質粘土	2~10	複合多量	シングルな状態少量・風化色人山成ノヘ・ト・開拓・上部に部分的分布・赤褐色・下層地盤		
6a	灰褐色	10Y R 3/2 シルト質粘土	2~26		シングルな状態多量・土壌化・軽じか・無土壌		
6b	褐色	10Y R 2/2 黏土	2~35		ダライ化上層		
6c	褐色	10Y R 3/4 シルト	2~29		SD 5付近では砂粒・無土壌		下層地盤
7a	灰褐色・黃褐色	10Y R 4/3 黏土・シルト	2~25				
7b	黃褐色	10Y R 2/2 黏土	1~24		61cm次の8cm層ノック少量		下層地盤
8a	褐色	10Y R 2/2 黏土	1~11		無土壌		
8b	褐色	10Y R 2/2 黏土	2~39		無土壌		粗粒が多い
8c	山褐色	10Y R 2/2 シルト質粘土	1~33		無土壌・下層に位置する場合には細粒		粗粒が多い
9	灰褐色・黃褐色	10Y R 4/3 重質シルト	4~26	風化底泥	シングル状態多量・細粒		SD 4付近のもの分布
10a	褐色	10Y R 2/1 黏土	1~6	暫状多量			
10b	褐色	10Y R 2/1 黏土	2~22	暫状底泥			
11a	褐色	10Y R 1/1 重質シルト	3~14	風化底泥(粘性が近い)	細粒		
11b	灰褐色	10Y R 4/2 重質シルト	3~18	暫状底泥(粘性が近い)	細粒		
12a	褐色	10Y R 2/1 黏土	2~1	暫状底泥			
12b	褐色	2.5Y 3/1 黏土	6~29	暫状底泥	風化物少量		ダライ化
13a	オーブン褐色	10Y 3/1 黏土	2~13	暫状底泥			ダライ化強調・堅膜
13b	灰色	10Y 5/1 黏土	2~22	暫状底泥			ダライ化強調・堅膜
14	灰色	7.5Y 4/1 黏土	2~38				下層を含む。ダライ化
15	黑	2.5G Y 2/1 黏土	5~42				
16	灰色	7.5Y 4/1 黏土	9~35				ダライ化
17	暗褐色	10G Y 4/1 黏土	27~50		植物遺体		ダライ化強調
18	黒	2.5G Y 2/1 黏土	6~29		植物遺体少量		
19	褐色・灰褐色	5G Y 4/1 重質粘土	4~34		植物遺体少量・粗粒少量		ダライ化
20a	褐色	10G Y 5/1 重質シルト	2~24		植物遺体少量		ダライ化強調
20b	褐色	10G Y 4/1 沈澱土	4~36		粗粒・61cm次の風化土		a・b層は地盤電極・ダライ化弱

I区の調査では、6a層上面で土坑3基（SK 1・2・3）と溝跡1条（SD 1）が、6c層上面で島跡、7a層上面で6c層島跡に伴う耕作痕と溝跡1条（SD 5）が検出された。8層では、遺構は検出されなかったが、細分層であるa・b・cの各層より弥生時代後期の遺物が多量に出土した。9層面までの調査を実施した後、下層の遺構・遺物の有無を確認するためB・C-2・3グリッドに下層調査区を設けた。その結果、15層までの数層で縄文時代後期の遺物が僅かに出土したのみで、遺構は検出されなかった。なお、16層以下は無遺物層となる。

II区の調査は、I区終了後の5月11日より開始した。遺構検出面は、I区と同様で、6a層上面で新たに溝跡2条（SD 2・3）と小溝状遺構群が、6c層上面で島跡の続きと新たに溝跡1条（SD 4）が、7a層上面では6c層島跡耕作痕とSD 5の続き、そして新たに住居跡1棟（S I 1）が検出された。また、8層の細分層からは、I区と同様に弥生時代後期の遺物が多量に出土したが、各細分層の上面及び9層上面からは遺構は検出されなかった。I区の下層調査区の状況より、9層上面の精査後は下層の調査は実施せず、全ての調査を完了した。



第5図 調査区北壁セクション



第6回 調査区前壁セクション

第Ⅱ章 検出遺構と出土遺物

1. 6 a 層上面

I区では土坑3基(SK1~3)と溝跡1条(SD1)が、II区では、溝跡2条(SD2・3)と小溝状遺構群が検出された(第7図)。重複関係はSD2と小溝状遺構群で認められた。また、A-6グリッドを中心に浅い搅乱が多数認められた。これは5b層段階のもので、5b層が水田土壤であった場合は、水田耕作に伴う耕作痕と考えられる。

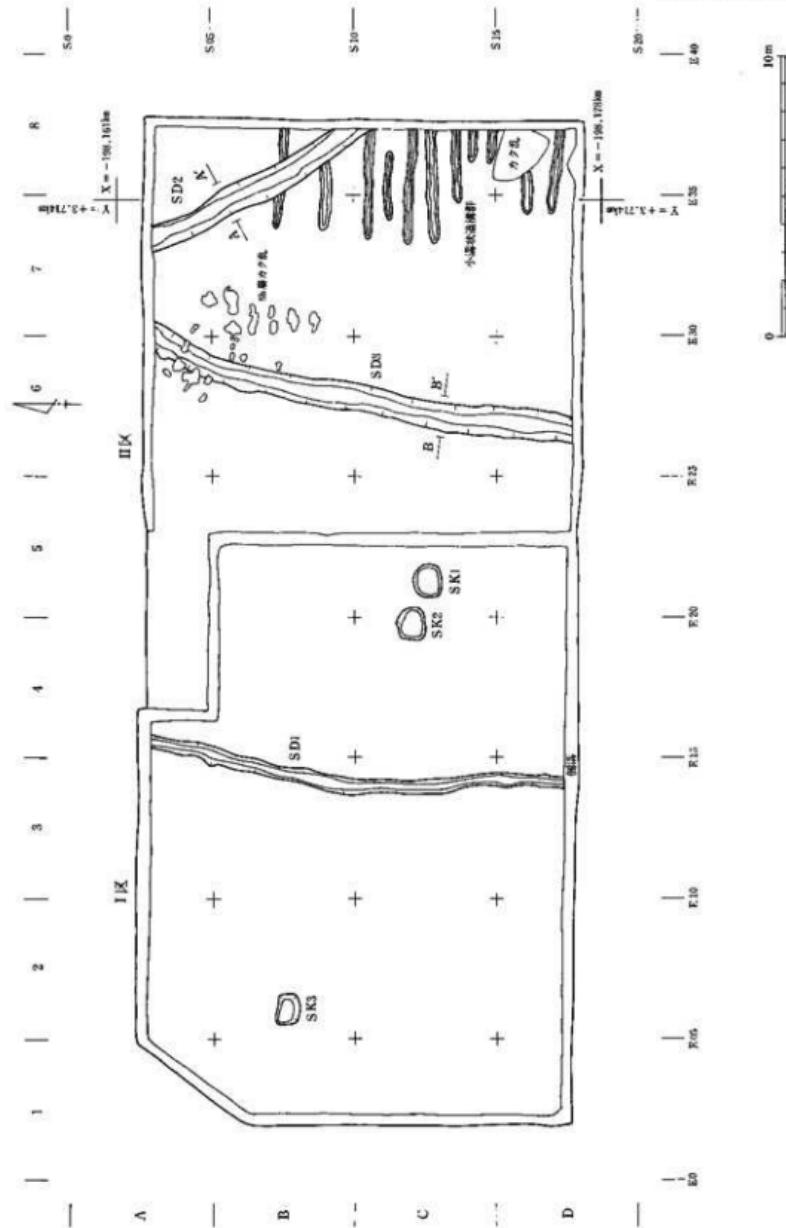
これら検出遺構の内、小溝状遺構群を除く他の遺構は、堆積土及びその上半に直上層の基本層5b層あるいは基本層5b層類似層が存在することより同時存在の可能性がある。なお、各遺構からの出土遺物は皆無または乏しく、出土遺物より所属年代を推定することは困難である。しかし、直上層(5b層)中に灰白色火山灰のが含まれること、そして直上層と6a層中の出土遺物(P.64・65)の年代より平安時代(灰白色火山灰降下前)と考えられる。

(1) 1号土坑-SK1-(第8図1、図版3-1)

調査区中央の南側C-5グリッドに位置する。上端・下端平面形とも不整橢円形で、長軸方向を東西にとる。上端規模約120×95cm、下端規模約95×70cmで、深さは約20cmを測る。壁面は強く立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は単層で、基本層5b層に色調・土質が酷似する。なお、堆積土は、SK2・3の堆積土①層と同一のものと考えられ、層中に炭化物粒を含む。自然堆積の可能性が強い。出土遺物はなく、土坑の性格も不明である。

(2) 2号土坑-SK2-(第8図1、図版3-2)

SK1の約40cm北西側に位置する。上端・下端平面形とも不整橢円形で、長軸方向を東西にとる。上端規模約120×100cm、下端規模約100×75cmで、深さは約25cmを測る。壁面はやや強く立ち上がり、断面は舟底状を呈する。堆積土は3層から成る。堆積土①層は、基本層5b層類似層で、SK1堆積土とSK3堆積土①層と同一のものと考えられる。最下層の堆積土③は、焼土と炭化物ブロックから成る層である。堆積土②層は堆積土①・③の中間的な色調・土質のものである。底面及び北壁から西壁の一部に焼面が認められ、堆積土③層の状況を加味すると、底面上で火を焚いたものと考えられる。堆積土①・②層は、その層相より自然堆積の可能性が強い。出土遺物はなく、土坑の性格も不明である。



第7圖 6 a層上面出土遺物全體圖

(3) 3号土坑-SK3-(第8図2、図版4-1)

調査区の北西側のB-2グリッドに位置する。上端・下端平面形とも不整橢円形で、長軸方向を東西にとる。上端規模約110×80cm、下端規模約85×45cmで、深さは約35cmを測る。壁面はやや強く立ち上がり、断面は舟底状を呈する。堆積土は3層から成り、その層相・成因はSK3と全く同一である。焼面は、SD2より広く、底面及び壁の下半全面に認められた。出土遺物はない。土坑の性格は不明である。

(4) 1号溝跡-SD1-(第9図1、図版4-2)

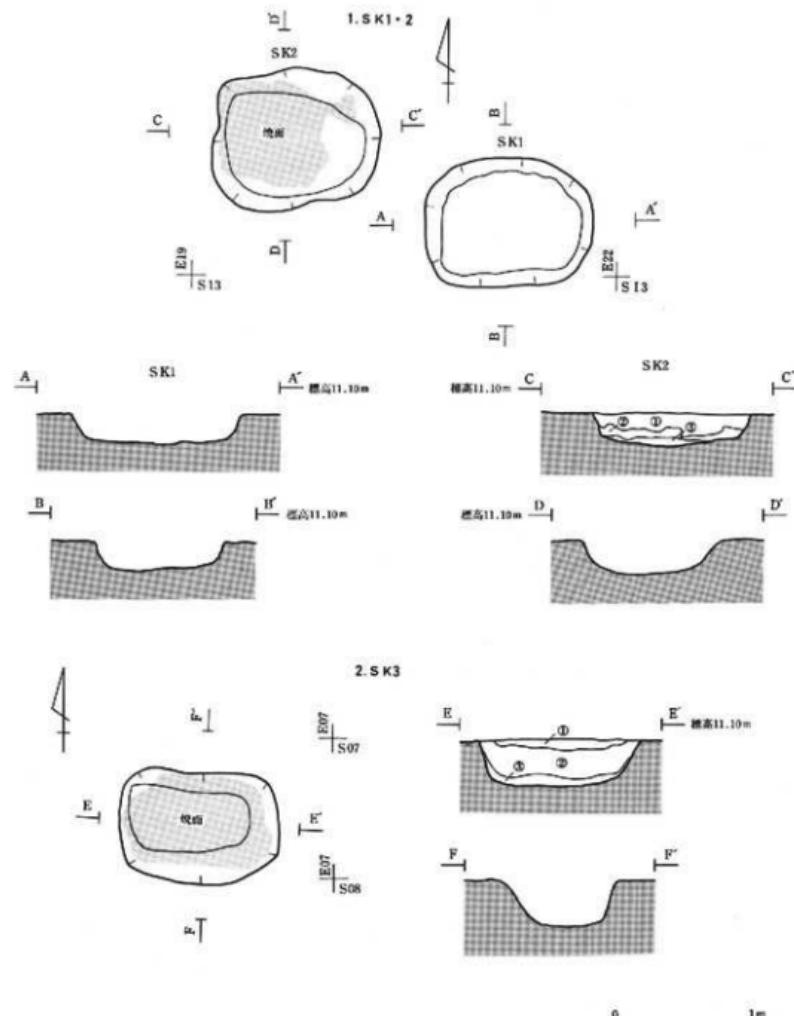
A-D-3グリッドを中心に位置する。若干東側に傾いたN-6°-E方向にやや弯曲しながら走行する。上端幅50cm前後、深さ約10~20cm、断面形「U」字状の小規模な溝跡で、部分的に底面・壁面に凹凸がみられる。底面レベルは南端が北端より10cm程低い。堆積土は単層で、基本層5b層に色調・土質が似する。なお、堆積土は、SK1堆積土、SK2・3堆積土①層と同一のものと考えられる。層中に炭化物粒を含む。自然堆積の可能性が強い。出土遺物はなく、溝跡の性格も不明である。

(5) 2号溝跡-SD2-(第9図2、図版5・6)

〈遺構状況〉調査区の北東側のA-B-7・8グリッドに位置する。N-30°-W方向にやや蛇行しながら走行する。小溝状遺構群と重複関係が認められた。上端幅約80~110cm、深さ約50~60cmである。壁は下半が急角度であるに対し上半がやや緩やかとなる。底面は小さな凹凸があるものはほぼ平坦である。底面レベルは南東端が北西端より5cm程低い。堆積土は3層から成るが、これらは下半に認められるのみで、上半は、基本層5b・5a・4層が落ち込んでいる。堆積土②層は、粗砂層で、他の2層も粗砂を含む。堆積土②・③層は部分的にしか堆積していない。これら堆積土に砂が混在することより当溝跡は、水を流す何らかの機能を有していたものと推測され(流下方向は南西)、これら堆積土は、溝跡機能時の堆積物と考えられる。〈出土遺物〉赤生土器片7点、赤焼土器1点、剥片2点(接合資料)が出土した。赤焼土器は壊の口縁部資料で、堆積土②層より出土したが、細片のため図化不能であった。

(6) 3号溝跡-SD3-(第9図3、図版5・7)

〈遺構状況〉A-D-6グリッドを中心に位置する。SD1とはほぼ同一方向のN-13°-E方向をとり、やや弯曲しながら走行する。A-6グリッドでは、5b層の搅乱により、上部の一部を切られている。上端幅約80~110cm、深さ約30~35cmで、断面形は「U」字状を呈する。底面は余り凹凸が認められない。底面レベルは南端が北端より5cm程低い。堆積土は単層で、



第8図 SK1～3平・断面図

施設名	事業者	色	調	土質	調入物	備考
SK1	(1) にじい・黄褐色	10YR5/3	シルト質粘土	炭化物粒・粘土粒・上層にミンダン粘性多量。下層にグレイ粘土ブロック。基本厚5.5壁脚柱。		
	(2) にじい・黄褐色	10YR5/3	シルト質粘土	炭化物粒・粘土粒・上層にミンダン粘性多量。基本厚5.5壁脚柱。		
SK2	(1) 棕褐色	10R2/2	シルト質粘土	粘土・炭化物ブロック多量。		
	(2) 水灰色	10R1.7/1	粘土	粘土・炭化物ブロック多量。		
SK3	(1) にじい・黄褐色	10YR5/3	シルト質粘土	炭化物粒・無上物・上層にミンダン粘性多量。基本厚5.5壁脚柱。		
	(2) 棕褐色	10R2/2	シルト質粘土	粘土・炭化物ブロック少量。		
	(3) 水灰色	10R1.7/1	-	粘土・炭化物ブロック少量。		

下層ブロックの量を除けばSD 2堆積土①に酷似する。また、SD 2同様、堆積土は下半に認められるのみで、上半は、基本層5 b・5 a・4層が落ち込んでいる。出土遺物はない。

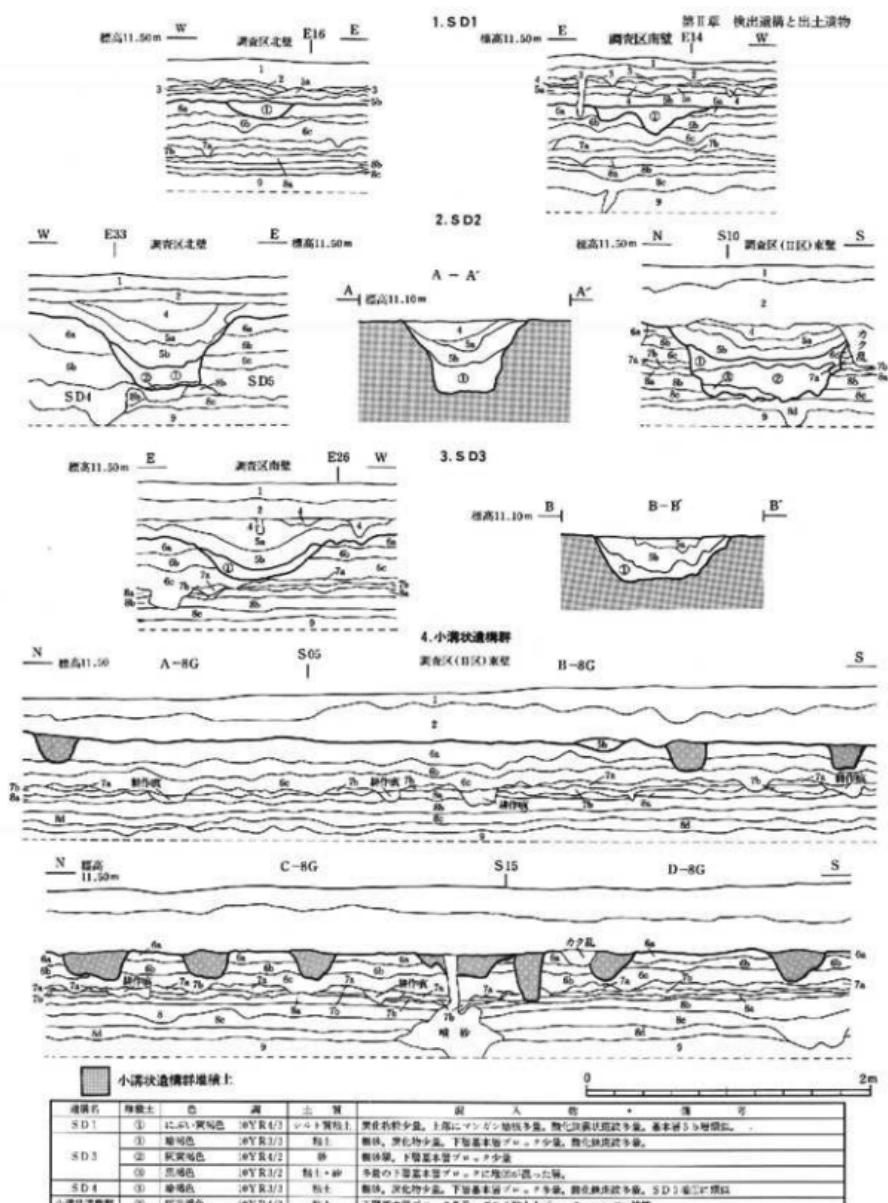
SD 3は、溝幅、堆積土及び堆積状況で、SD 2と類似点が見られることより、SD 2と同時存在した同一性格の溝跡と考えられる。この場合、SD 3の流路方向は南で、しかも底面標高がSD 2より30cm程高く、その方向性よりSD 2より分岐した溝跡の公算が高い。

(7) 小溝状遺構群 (第9図4、図版11-2)

調査区の東側のB～D-7・8グリッドに位置する。6 c層上面で11条検出されたが、これらは調査区東壁の観察により6 a層上面から掘り込まれていることが確認された。また、壁面観察では、さらにA・B-8グリッドに各1条存在することが認められた。SD 2と重複関係が認められたが、6 a層上面では、平面的検出が困難で、そのため新旧関係が掴めなかった。各小溝ともほぼ東西方向の直線的なもので、東側の調査区外へ延びて行く。検出長が最長のもので約4mである。いずれの小溝も幅・深さとも安定していないが、6 a層上面における溝幅は約20～50cm(平均30cm)、深さは約15～35cm(平均20cm)である。いずれの底面も凹凸が顕著である。各溝間の距離は検出面では、溝中央ライン間が約160cmのものとその半分の約80cmのものが認められたが、B-8グリッド東壁検出のものを加味すれば、約80cm間隔であったと考えられる。ただし、A-8グリッド東壁検出のものまでは、約4.5mの間隔があり、小溝状遺構群が途切れで存在していたことが推察される。堆積土は、いずれも単層で、下層ブロックを多量に含む。出土遺物はない。

規則正しく並び、群をなしていたことが想定される小溝状遺構群の性格であるが、間隔、群の形成は異なるものの遺構規模(深さ、幅)、配列、堆積土状況より6 c層溝跡耕作土直下層上面検出の溝跡群に類似する。この溝跡群は島に伴う耕作痕(天地返し等の跡)と考えており、この小溝状遺構群も同様なものと考えられる。従って、基本層5 b層と6 a層との間には本来、島の耕作土が存在していた可能性がある。

SD 2との新旧関係であるが、小溝状遺構群が島に伴う耕作痕で、すでに耕作土が削平された状態である可能性から察すると、SD 2の堆積土上半に直接基本層5 b層が存在することよりSD 2以前とも考えられる。



第9図 SD 1 ~ 3・小溝状遺構群断面図

2. 6 c 層上面

6 c 層上面では、島の歯とこれに付随する溝跡 1 条 (S D 4) が検出された (第10図)。また、島耕作土を除去した 7 a 層上面では、この島に伴う耕作痕が検出された。6 c 層上面の凸部分を島の歯としたのは、これらの断面形、幅、間隔、方向性 (東西方向) に加え方向性の微妙な変化、途切れ、規模の変化によって幾つかの単位が認められたことによる。なお、花粉分析、プラント・オバール分析を試みたが、島と検証されるデータは得られなかった。

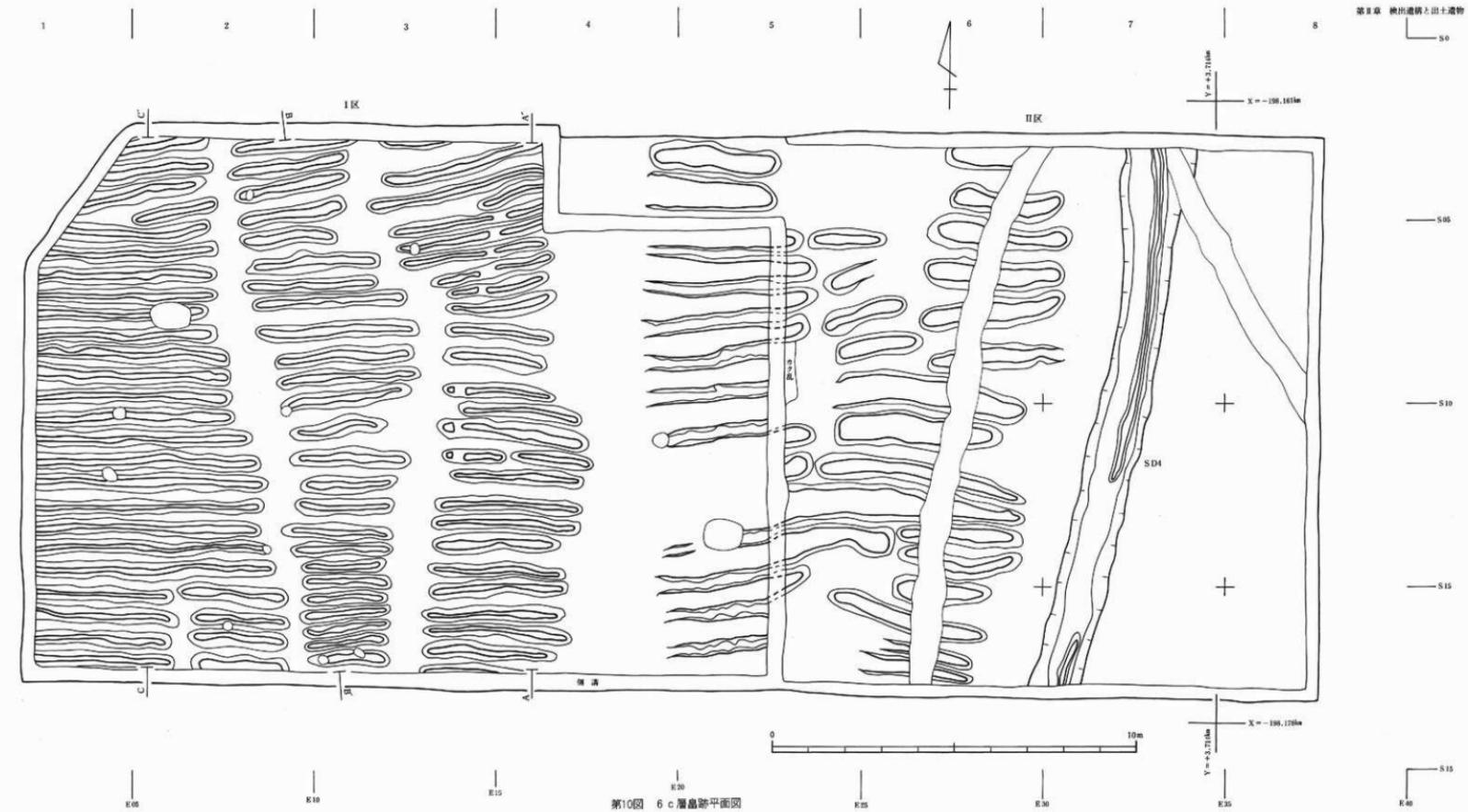
6 c 層島跡 (第10~15図、図版 8~16・24)

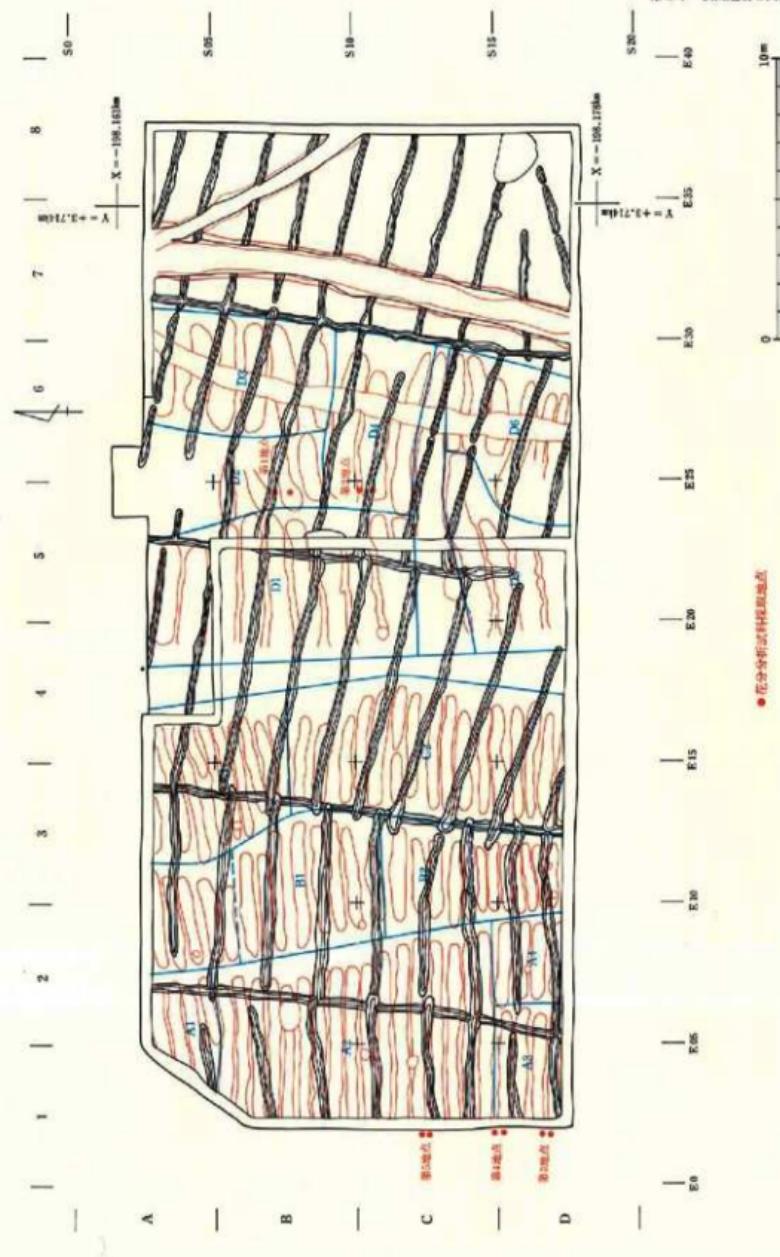
〈島の範囲〉 耕作土は調査区全面に広がるが、歯が検出されたのは S D 4 の西側で、東側には認められなかった。グリッド 4 ラインの中央以東は歯の依存状況が悪く、このため S D 4 から東で歯が検出されなかつた可能性もあるが、調査区東壁の状況から判断すると歯立されていなかつたのではないかと考えられる。A - 5 • 6 グリッドでは、歯が検出されない部分があったが、この部分には、耕作土直下に住居跡 (S I 1) があり、このために耕作土が陥没するような状況となつており、歯を検出できなかつた。本来は、この部分にも歯があつたものと考えられる。

〈耕作土〉 耕作土 - 6 c 層 - の土質はシルトである。直下層の 7 a 層を除く、上層・下層の基本層の土質は、粘土分を主としており、耕作土の土質はこれらと全く異なる。非耕作域がなく、耕作土の母材層の全容は不明であるが、耕作土の色調が、直下層の基本層 7 a 層が黒ずんだ色調に似ていること、また、土質も 7 a 層にちかいこと、さらに、7 a 層上面検出遺構上の耕作土が、これらの堆積土と耕作土が混じった色調・土質となつていることを考慮すれば、直下層 7 a 層が、主な母材層であったと推定される。耕作土の厚さは 2~26cm で、平均 15cm である。耕作土の下面は、起伏が顕著である。

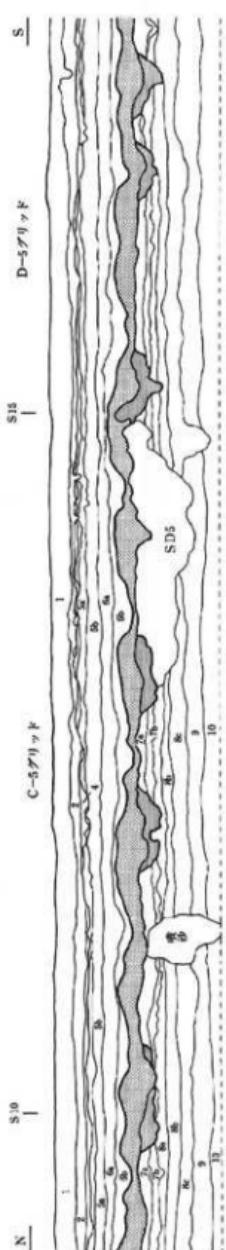
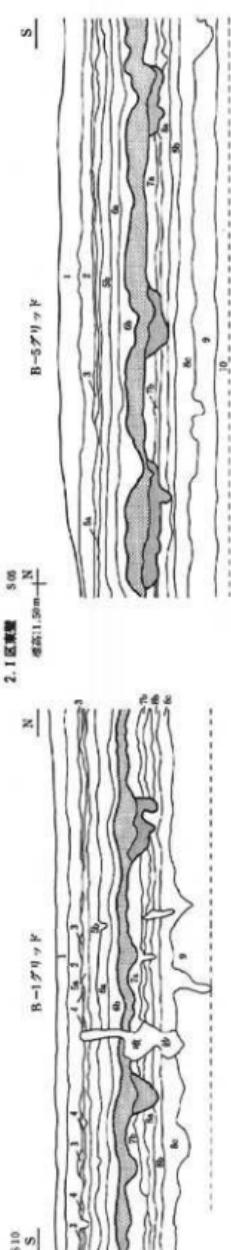
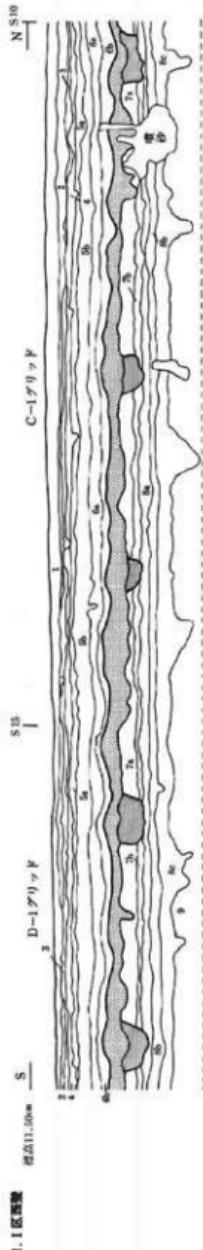
〈歯単位と配列〉 歯方向は東西方向を基調としている。歯の方向性の微妙な変化、途切れ、間隔の差、規模の変化によって第11図のように幾つかの単位に分けられる。まず、歯幅によりグリッド 4 ラインを境にしてその東西で、単位 A ~ C と単位 D の 2 つの大きな単位に別れる (単位間の途切れる間隔 1 m 前後)。さらに西側は南北方向の途切れにより単位 A • B • C の 3 つの小単位に分かれる (途切れる間隔: A • B 単位間 0.3~1.3m, B • C 単位間 0.5~1.4m)。

- 単位 A : 方向性・南北方向の途切れによって、さらに単位 A 1 ~ A 4 の 4 つの小単位に分かれる (途切れる間隔: 3 • 4 単位間 0.2~0.5m)。
- 単位 B : 方向性により、さらに単位 B 1 • 2 の 2 つの小単位に分かれる。両単位とも歯の平均間隔・歯幅・歯全長において小単位のまとまりが認められ、さらに幾つかの単位

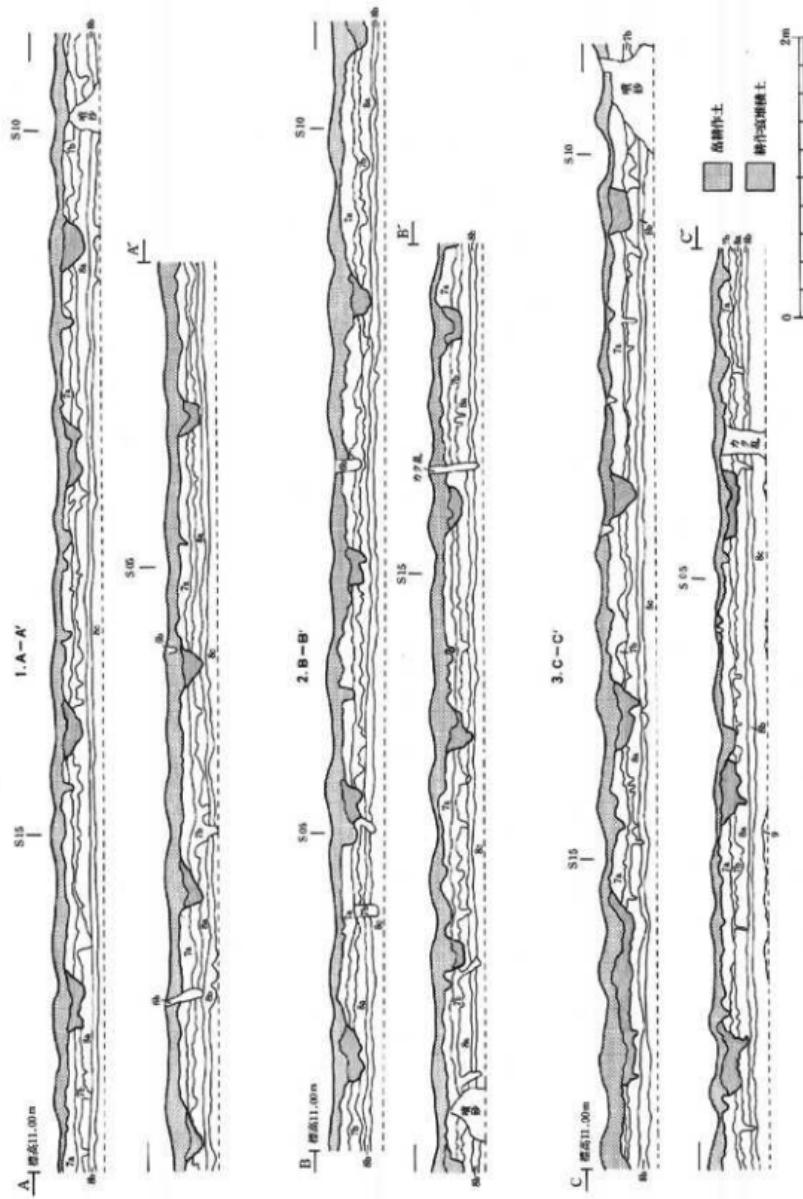




第11図 6c層南部7a層上面耕作痕平面図(数を合成)



第12図 6c層島跡断面図



第3図 6c層島断面図2

表4 献計測表

計測項目	方 向	平均間隔 cm	幅(平均) cm	長 度 m	平均幅間隔 cm
A 1	N - 79° ~ 84° - E	15	約40~50(45)	2.4~4.0以上	53
A 2	N 90° - E	15	約23~55(45)	4.5以上~7.0以上	53
A 3	N - 90° - E	15	約30~50(45)	4.3以上	53
A 4	N - 94° - E	20	約30~55(45)	2.7~3.0	55
B 1	N - 78° ~ 86° - E	15~20~30	約35~60(45)	2.6~4.5	53~58
B 2	N - 85° ~ 90° - E	10~20	約25~55(40~45)	2.3~3.3	45~55
C 1	N - 74° ~ 89° - E	15	約30~50(45)	2.8~5.0以上	53
C 2	N - 89° ~ 98° - E	15~30	約30~55(45)	2.9~4.0	53~60
D 1	N - 84° ~ 95° - E	20	約60~100(75)	3.6~5.0以上	85
D 2	N - 76° ~ 90° - E	40	約40~75(60)	2.1~2.4	80
D 3	N - 81° ~ 95° - E	30	約40~95(75)	3.1~4.0	90
D 4	N - 93°~103° - E	20	約40~95(80)	4.6~5.9	90
D 5	N - 80° ~ 85° - E	20	約40~95(75)	5.0以上~6.4以上	85
D 6	N - 93°~105° - E	20	約30~75(60)	2.7~4.5	80

※平均歓間間隔は、歓間の中央ライン間の距離

に分けられる可能性もある。

- ・ 単位C : 方向性により、さらに単位C 1・2の2つの小単位に分かれる。
- ・ 単位D : 南北方向の途切れとC-5・6グリッドの中央に東西に長く延びる歓によって、単位D 1~6の6つの小単位に分かれる（途切れる間隔：1・2単位間0.1~0.5m、2・3単位間0.2~1.3m、5・6単位間0.1~1.1m）。

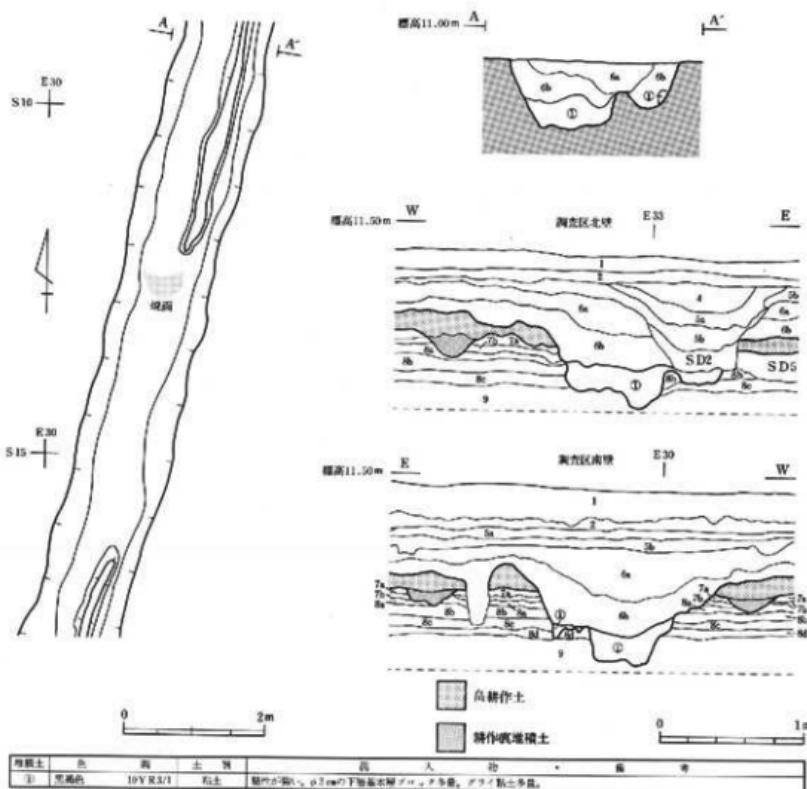
〈歓の形状と規模〉歓の断面形は薄鉢状を呈する。歓間からの高さは、単位A~Cが2~9cm（平均5cm前後）、単位Dが4~14cm（平均10cm前後）で、単位Dのはうが歓の幅・高さとも規模が大きい。各単位の歓全長・幅・間隔は表4の通りである。全長の内、単位B 1は4m前後のものと3m前後のものに大きく分かれ、単位B 2でも2.5m前後のものと3m前後のものに2分される。

〈4号溝跡-SD 4-〉調査区東側のグリッド7ラインに位置する。歓方向と直交方向のN-10°-E方向にはほぼ直線的に走行する。耕作土下の耕作痕との重複関係では、当溝跡が耕作痕を切っている。上端幅1.5m前後、深さ約50~75cmで、壁はやや強く立ち上がる。底面東壁沿いには、上端幅約10~30cmの小溝が入れられ、その西側底面上には小溝とほぼ同規模の盛り上がり部分が作られている。盛り上がり部分は上端幅約10~20cm、下端幅約15~35cm、小溝底面からの高さ10cm前後、底面からの高さ30cm前後を測る。C-7グリッド付近の4.2mの間は小溝は認められず、従って盛り上がり部分も存在しない。底面レベルは南北端での差は認められず、ほぼ同一レベルである。堆積土は半層で、小溝を含めた、盛り上がり部分のやや上部以下に認められるのみで、上半は基本層6b・6a層が落ち込んでいる。堆積土は下層グロックとグライト化した粘土を多量に含む粘性の強い粘土で、人为的に埋め戻した可能性が強い。盛り上がり部分が途切れる部分の北端で、堆積土上面に焼面が認められた。焼面は浅い崖状になって

おり、北半の検出を失敗したが、直径60cmの円形を呈するものと考えられる（第14図）。

当溝跡の性格であるが、

- ①この溝跡を境に東側の畠は畝立されていなかったと考えられること
 - ②溝跡底面の一方の脇に小溝と盛り上がり部分が併走し、盛り上がり部分の上まで人為的に埋め戻された可能性が強いこと
 - ③小溝と盛り上がり部分は途切れる部分が認められ、その部分で火を炊いた痕跡があること
- 以上の①～③より、小溝部分に柵状の施設を巡らし、畠を東西に分けていた区画溝の性格が強く、小溝と盛り上がり部分の途切れる部分は両方の畠を結ぶ通路であった可能性がある。また、耕作痕との重複関係より、畠の土壤が作られた後の、いずれかの時期に取り付けられたものである。

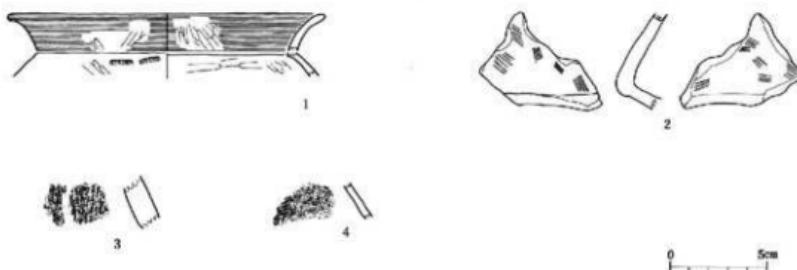


第14図 SD 4 平・断面図

〈島上面の標高と傾斜〉島上面の標高は、10.70~11.00mの間である。上面の傾斜は一律方向でなく調査区北限E20ラインと調査区南限E30ラインを結んだ線付近で傾斜方向が変化する。この変換点より西側では、南東方向に緩やかに下り傾斜を示していたものが、これを境に東側では、北東方向の緩やかな下り傾斜に転ずる。

〈耕作痕〉島耕作土を取り除いた7a層上面で検出された。耕作痕は、平行に走る多数の細い溝状のもので、調査区全面に認められた。重複関係では、SD4に切られ、7a層上面検出のSII1・SD5を切っている。耕作痕は、南北方向(N-7°-E)のものとこれにはほぼ直交する東西方向(N-75°-105°-W)のものからなる。南北方向と東西方向との新旧関係は、平面的にも断面的にも明確に確認できず、短期間における切り合い関係と考えられる。南北方向、東西方向ともほぼ同一間隔で平行するが、間隔幅(中心線間隔)は大きく異なる。間隔幅は、南北方向のものが広く7~9mで平均8m、東西方向のものが狭く1~2mで平均1.8mである。なお、東西方向のものは南北方向間を長さの単位としており、このため連續性を欠く。検出された4条の南北方向のものにより、東西方向のものは5つの群が認められる。東西方向のものは、それぞれの群ごとに方向性・位置が若干異なる場合があり、さらに、Ⅱ区東端の群のように群の中でも方向性が変化する場合があるが、各群ともその中における間隔幅はほぼ同一である。両方向の耕作痕とも上端・下端の出入りが著しく、底面の凹凸が顕著である。また、耕作痕の幅・深さ・堆積土も両方向ともほぼ同じで、差異は認められない。7a層の上面が島の耕作による起伏が顕著であったため、耕作痕の検出は7a層上部を下げた段階でないと検出できなかった。このため平面図掲載の耕作痕の幅は、実際のものより狭い。本来の幅は25~65cmで平均40cm、深さは10~25cmで平均20cmである。堆積土は島耕作土と同一の土質であるが、色調がやや明るい。堆積土中には、7a層以下の基本層ブロックが多量に含まれる。断面観察では、堆積土の上面が島耕作土の下面(7a層上面)より弧状に下がる傾向が認められた。これは耕作痕の堆積土にしまりがなく、そのため島耕作土の土圧により堆積土上部がへこんだ結果と考えられる。

耕作痕の性格であるが、これを畠間の痕跡とする考え方もあるが、当調査区ではこの耕作痕に伴う畠跡は上層の6c層上面で検出され、畠間の方向性・間隔幅が全く異なる(第11図)。それでは、前段階の畠間とする考え方もあるが、平均間隔幅が1.8mの狭い東西方向のものを差しとしても(広すぎる感はあるが)、広い南北方向のものは解釈が就かない。以上を基に、耕作痕の堆積土中に多量の下層ブロックを含み、その上面がへこむという堆積土状況を考慮すると、島耕作に伴う天地返しの痕跡が最も有力な見解と考えられる。その際の南北方向のものの位置付けであるが、間隔幅が広い南北方向のものによって間隔幅が狭い東西方向のものが区切られているということは、まず、南北方向のものが入れられ、その後にこの間を東西方向のものを



第15図 6c層畠跡出土遺物

埋めて行ったことを示唆するものである。従って、南北方向のものは、天地返しを行う際の仕事量の単位、すなわち区画単位である公算が強い。

〈出土遺物〉耕作土及び耕作痕堆積土中より392点、S D 4堆積土中より10点の合計402点の遺物が出土した。出土遺物は弥生土器・土師器・須恵器・剥片石器で、これらの内、最も出土量が多かったのが弥生土器である(表5)。土器類は全て細片を主とする破片資料である。この内、明確に土師器と判別されるものは41点である。その内、製作・調整が判るものは20点で、全てロクロ不使用のものである。これらは全て古墳時代に属するものと考えられ、その中には、塩釜式期(第15図1・2)のものも含まれる。

〈所属年代〉出土遺物のほとんどは、畠の耕作によって下層より巻き上げられたものと考えられ、当畠跡の所属年代を示すような時期決定資料は得られなかった。しかしながら、耕作土中にロクロ使用の土師器が認められなかったこと、そして、7a層上面検出構造及び6a層検出構造の所属年代を加味すれば、古墳時代後期以降、奈良時代以前の年代が想定される。

3. 7 a 層上面

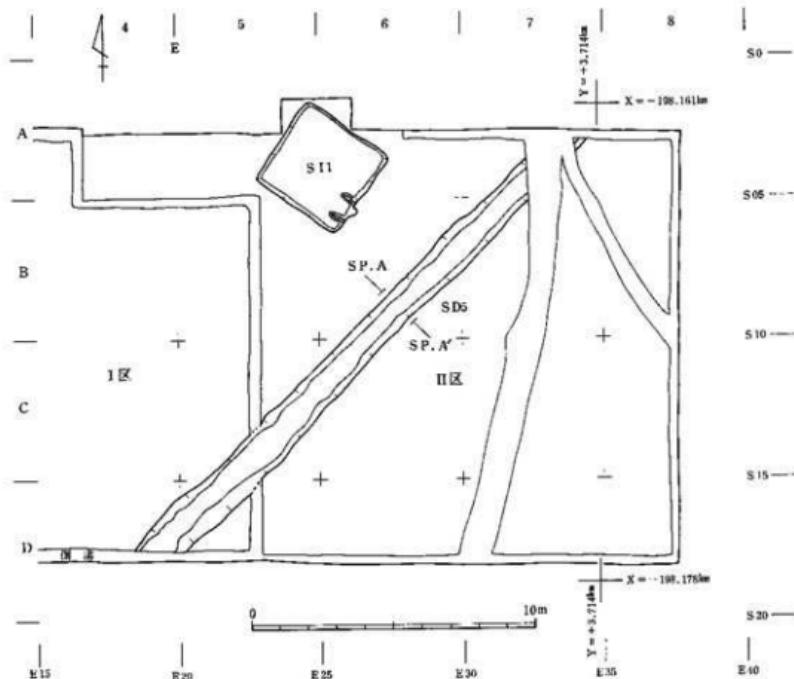
7 a 層上面では、住居跡 1 棟 (S I 1) と溝跡 1 条 (SD 5) が検出された (第16図)。両者には重複関係はないが、いずれも 6 c 層島跡耕作痕に切られている。

(1) 1号住居跡—S I 1— (第17~20図、図版17~20・23・24)

〈検出状況〉 II 区北西側の A - 5・6 グリッドを中心として検出された。一部調査区の北側に延びるため、この部分について調査区の拡張を行った。

〈平面形〉 北西—南東方向 (以下、東西方向) 約3.5m、北東—南西方向 (以下、南北方向) 約3.3mのほぼ正方形のもので、南東壁側にカマドが据えられている。主軸方位は S-54°-E である。

〈壁〉 壁は、急な角度で立ち上がっている。床面からの壁残存高は、良好な部分で20cm、平均で15cmである。



第16図 7 a 層上面検出遺構全体図

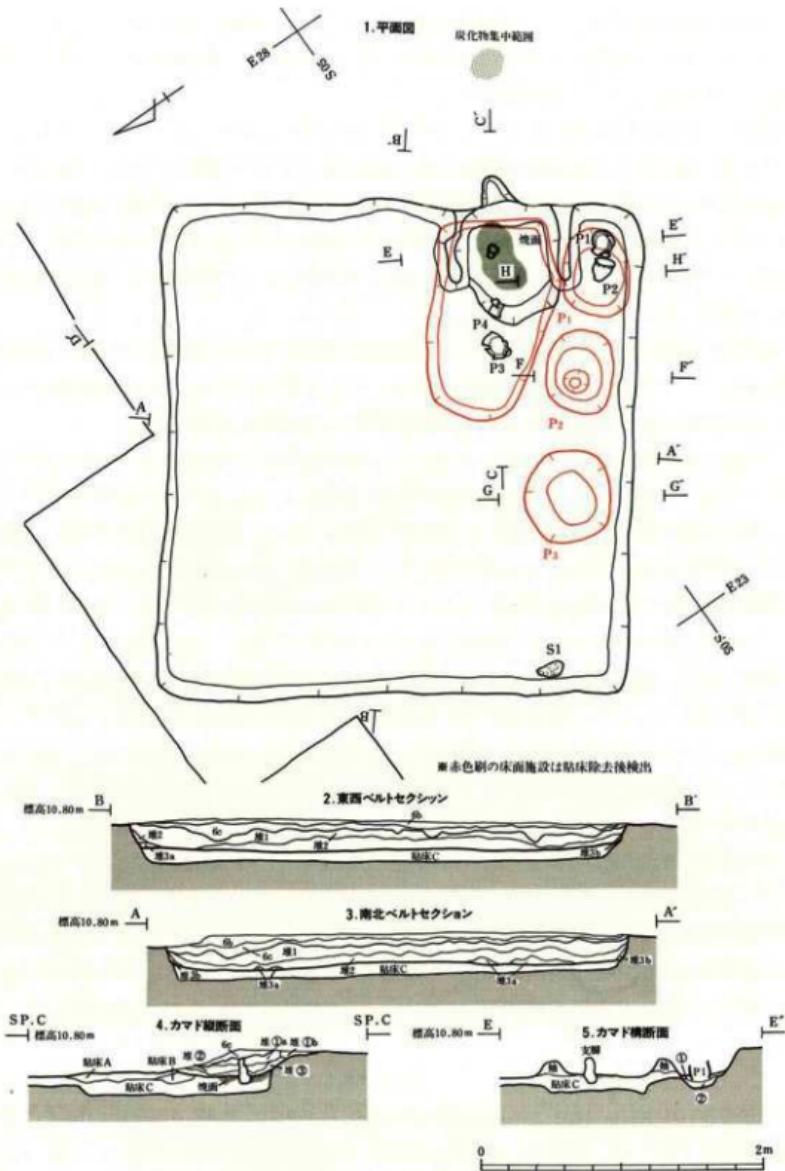
〈床面〉床面の締まり具合は、貼床Aの分布範囲であるカマド前面では堅く締まっていたが、それ以外の部分では顯著ではない。床面に傾斜は認められないが、全体的に平坦ではなく、壁間に比べ中央部分が2~3cm程盛り上がっている。

〈貼床〉貼床は床全面に施されている。貼床の厚さは、平均10cm程であるが、カマドの周辺ではその掘り方が深く、15cm前後の厚さとなる。貼床はA・B・Cの3層から成る。貼床Cは、全面に認められるもので、粘性の強い粘土層である。貼床B・Aはカマドの前面の貼床C上にのみ認められるもので、貼床Bは焼土・炭化物の層、貼床Aはその上を覆う砂粒を多量に含む砂質シルト層である。貼床Cは最初の段階の貼床、貼床Bはカマド内灰排出土、貼床Aは貼床貼り替え土と考えられる。

〈堆積土〉堆積土は大別3層から成る。いずれも粘土層で、この内、堆積土1・2層は全面に認められ、レンズ状堆積を示す。堆積土3層はa・bの2層に分層され、3a層は床面上に、3b層は壁際に部分的に分布する。これら各堆積層は、自然堆積と考えられる。

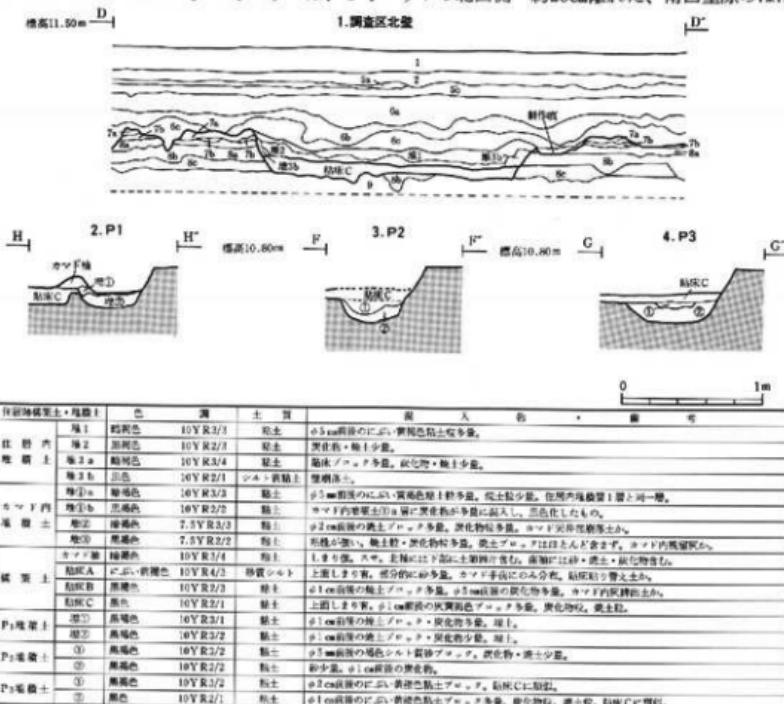
〈カマド〉南東壁側で検出されたが、上部はなく、両袖と煙道の一部が検出されたのみである。カマドは壁中央部に位置しておらず、南西壁側寄りに設置している。焚き口から燃焼部にかけては、幅約60cm、奥行き約75cm、深さ3cm程の浅い窪みが作られ、燃焼部中央北寄りには、支脚用の自然礫が直立している。この支脚を中心として燃焼部には強い焼け面が認められた。支脚は貼床C施工時に埋め込まれている。また、カマド直下の貼床部分の掘り方は、他の部分に比べ5cm程深く掘り混まれている。両袖は、粘土にスサを混ぜ構築している。北袖には、その際、土器師(P4、第20図1)の破片の一部を補強材として下部に使用している。南袖には、補強材は認められなかったが、北袖に比べ砂、炭化物、焼土の混入が認められ色調もやや黒ずむ。煙道は、カマドの中央より北寄りの支脚と同一ライン上に位置するが、20cm程の長さしか残存しない。この延長上(壁から約1m)の6c層下面で、直径約20cmのほぼ円形の範囲で、焼土と炭化物のブロックが検出されており、この部分に煙出しが位置していた可能性がある。カマド内堆積土は大別3層から成り、この内、堆積土②層はカマド天井部崩落土、堆積土③層はカマド内残留灰と考えられる。なお、カマド南袖は、住居使用期間内に南側に移動したことが確認されている。カマドの南側に位置する貯蔵穴と考えられる1号ピットは、後述するように住居使用最終段階では埋め戻されている。この上にカマド南袖は第18図2のように一部跨ぐ状態で構築しており、当初からこの場所になかったことが観察できる。更に、前述したように、支脚、煙道ともカマド中央ラインよりも北側に位置し、両袖の構築土混入物が異なる。これらは、カマド南袖が南側に再構築されたことを傍証するものと言えよう。

〈床面施設〉柱穴は住居跡内外からも検出されなかった。また、周溝も認められなかった。床面施設としては1・2・3号ピット(P_1 ・ P_2 ・ P_3)が検出されている。1号ピットは、カマ



第17図 SI 1 平面図、断面図 1

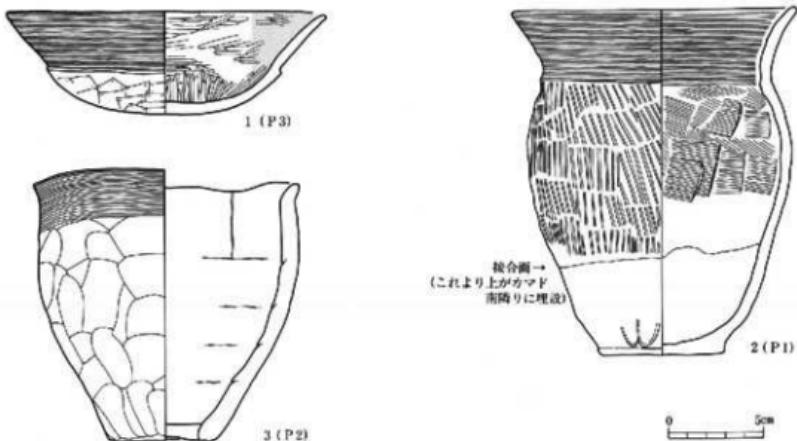
ドの南側の南東側コーナーで検出された。ただし、住居使用最終段階では埋め戻されている。上端規模約60×50cm、下端規模約40×35cmの円形に近い橢円形で、深さは約15cmである。埋め土は2層から成り、埋土①には多量の焼土ブロック・炭化物を含む。位置関係より貯蔵穴と考えられる。埋め戻されたその直上の床面で、土師器の体部下半を欠失する甕（P1、第19図2）と完形の甕（P2、第19図3）が出土している。両土師器とも口縁部を上に向け寄り添う斜位の状態で出土した。この内、甕は下端部を意図的に埋土①層内に埋め込んでいた。両土師器とも本来は直立し据えられていたものと思われ、甕は何らかを貯蔵する施設として使用されていたものと考られる。2号ビットは、1号ビットの約20cm北西側に隣接し、位置する。明確にプランが確認できず、貼床を外した段階で検出したが、床面からの掘り込みの可能性もある。上端・下端の平面形・規模及び深さは、1号ビットとはほぼ同様である。底面北寄りには、直径15cm、深さ3cm程の円形の浅い窪が認められた。堆積土は、2層から成り、いずれも堆積土中に砂の混入が認められる。3号ビットは、2号ビットの北西側へ約25cm離れた、南北壁際のはば



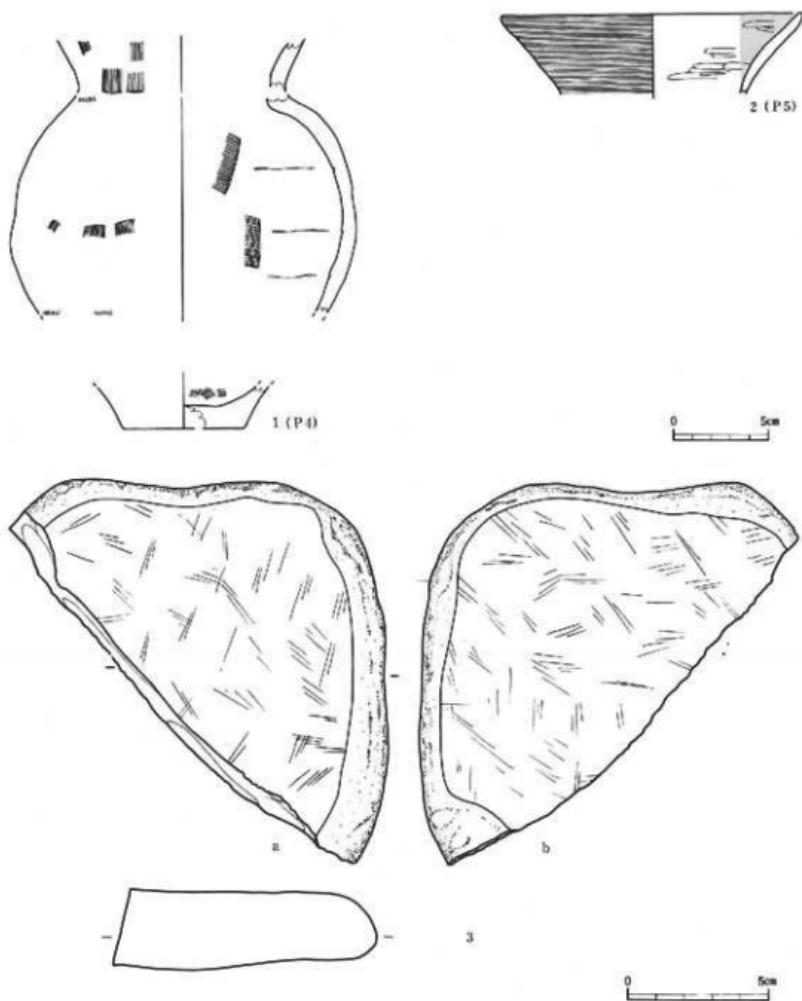
第18図 S 1 断面図 2

中央に位置する。貼床を外した段階で検出された。上端は直径約65cmのほぼ円形、下端は約40×30cmの椭円形で、深さは約15cmである。堆積土は2層に分離したが、いずれも貼床Cに類似しており、貼床施工時に埋め戻された可能性がある。

〈出土遺物〉住居跡内からは、469点の出土遺物があった。その多くは弥生時代の遺物で、明確に当住居跡に伴う資料としては、P 1～5の土師器とS 1の礫石器のみである(第19・20図)。5点の土師器は、全てロクロ不使用のものである。この内、P 1～3は、完形あるいはそれに近い遺存状態のもので、P 4・5は破片資料である。P 1(第19図2)は壺で、カマドの南隣に埋設されていた。体部下半の中程から底部は既に欠失していたが、3号ピット堆積土①・②層、この付近の貼床C層及び住居跡堆積土1層からこの欠失部位が出土し、接合した。破損面はほぼ直線的で粘土帶の接合面と考えられる。人為的か自然の破損かは明確でないが、欠損部位の多くを出土した3号ピットでは投棄したような状態で出土している。P 1は、外面の口縁部と体部の境に弱い段を持つ器形で、体部の調整は、外面は粗雑な太いハケ目、内面はヘラナデが施されている。P 2(第19図3)は壺で、P 1に寄り添い出土している。やや口縁部が開く釣り鐘状の器形のもので、底部部分は作られておらず、径3.5cmの円形の穴のままになっている。内外面の成形・調整は雑である。二次加熱を受け内外面とも赤色化し、表面が脆くなっている。P 3(第19図1)は壺で、カマド焚き口手前の床面上で、正面で潰れた状況で出土している。口縁部と体部の境に段を持ち、口縁部内面がやや外反し、底部が丸底の器形を呈する。調整は体部外面がヘラケズリ、内面はヘラミガキの後、黒色処理が施されている。P 5(第20図2)は壺の口縁部破片で、1号ピット埋土②層から出土した。住居跡周辺の基本層6a層



第19図 S I 1 出土遺物1



遺物番号	発見番号	出土場所	種別	性質	形状	遺存度	法 長 cm	外 形	内 面	特徴・備考	回収番号							
19-1	C-19	東室	土器部	杯	口-浅	約4.5	口径4.8、底高3.5	口:ヨコアズ 底:一底:ハラズ	ヘタ(ガモ→黒色地埋)	P 3	23-1							
19-2	C-17	東室(複数)	土器部	盤	口-浅	約4.5	口径4.9、底高 6.5	口:ヨコアズ 底:ヨコアズ	口:ヨコアズ 底:ハラズ	P 1	23-3							
19-3	C-18	東室	土器部	盤	口-浅	約4.5	口径4.6、底高 5.5	口:ヨコアズ 底:ヨコアズ	—	P 2	23-2							
20-1	C-16	キマノ施設部上	土器部	盤	口-浅	約4.5	口径4.6、底高 6.3	口:ヨコアズ 底:ハラズ	ロ:ハケメ 底:ハケメ+ハラズ	P 4	23-4							
20-2	C-15	P 1 墓	土器部	杯	口-深	約4.0	口径 15.8	ヨコナゲ	ヘタ(ガモ→黒色地埋)	P 5	23-5							
回収番号	発見番号	出土場所	名	布	最大径	cm	最大幅	cm	厚	3 cm	重	kg	石	材	特 徴	・	備 考	回収番号
20-3	C-27	廻所C	砾石?	—	17.2	—	9.8	—	3.4	—	666	—	安山岩	—	斜面2面。傾斜方向不明。	—	—	24-1

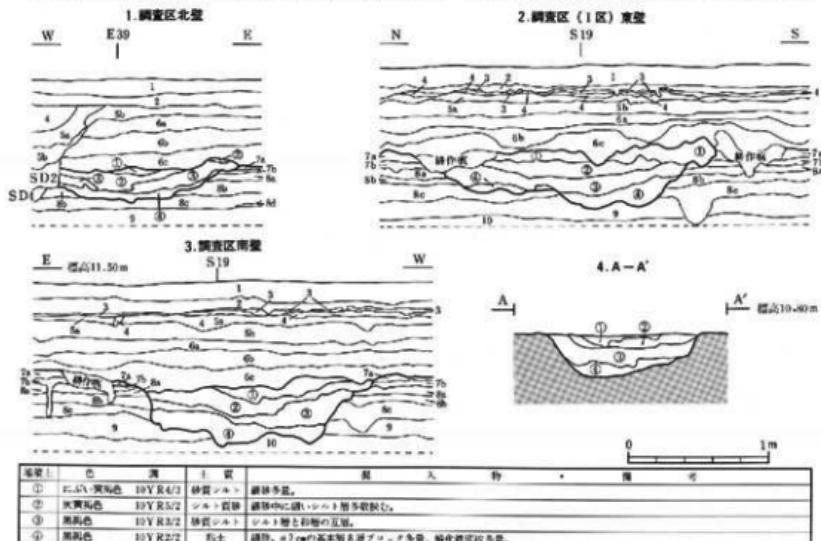
第20図 S I 1 出土遺物 2

・6b層出土の各1点と接合している。P1に比べやや口縁部が長いが、ほぼ同様な器形・調整と思われる。P4(第20図1)は甕の破片資料で、体部資料の多くはカマド北袖の補強材として使用されていた。体部資料はこの他に、3号ピット堆積土①層、貼床C層、床面上、住居跡堆積土2層、直上の基本層6c層出土のものと接合関係が認められる。体部資料と接合はしなかったが、同一個体と考えられる口縁部資料と底部資料が、住居跡周辺の基本層6層中より出土している。P4は、最大径を体部中央に持ち体部上半が縦れ、口縁部がやや強く外反する器形と推定される。外面調整はハケメが部分的に認められる。カマドの補強材に使用したためか、強い二次加熱痕が認められる。S1(第20図3)は偏平な砾石器で、住居跡北西コーナー付近で、b面を上に向け貼床に大半を埋め込むような状態で出土した。三角形状の偏平な砾で、切断面を除く側面は自然面を残す。表裏面であるa・b面はともに磨かれており、不定方向の細かい擦痕が認められる。固定の砥石として使用された可能性もある。

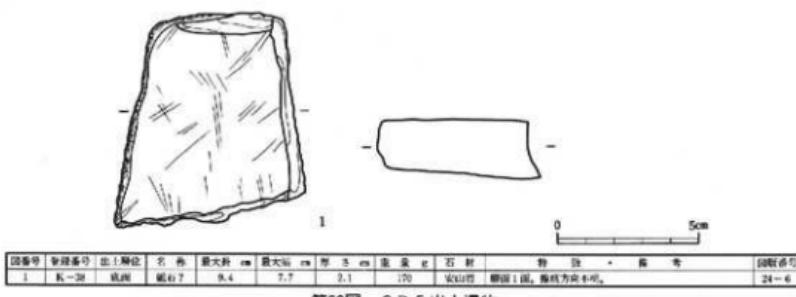
〈所属年代〉当住居跡に伴う土師器P1～5の特徴より、その所属年代は、古墳時代後期栗田式期と考えられる。

(2) 5号溝跡 - SD5 - (第21・22図、図版21・24)

〈遺構状況〉調査区の東半の1号住居跡の東側に位置する。1号住居跡主軸方向とほぼ直行方向のN-47°-E方向に直線的に走行する。1号住居跡南東壁からの直線距離は、約3mである。北東端をSD2・4に切られる。上端幅約1.1～1.5m、深さ約25～50cmで、南北側ほど規



第21図 SD5断面図



第22図 SD 5出土遺物

模が増す。断面形は「U」字状で、S12ライン以南では底面の凹凸が顕著である。底面レベルは南西端が北東端より約20cm低い。堆積土は4層から成る。底面上の堆積土④層を除く、堆積土の大部分を占める堆積土①～③層は、砂を主成分とし、短時間における自然堆積状況を示す。

当溝跡は、その配置・方向性より1号住居跡を意識して造られた節があり、その場合は、居住域と何らかを画するための溝跡であった可能性がある。

〈出土遺物〉弥生時代の遺物を中心として21点の出土遺物があった(表5)。これらの大半は堆積土④層中からで、全て破片資料である。土師器は、堆積土④層より1点のみ出土したが、細片のため図化不能であった。小型の甌の口縁部資料で、ロクロ不使用のものである。摩滅しており調整は明瞭でないが、内外面ともヨコナデと思われる。なお、底面からは砾石の可能性がある砾石器が1点(第22図1)出土したのみである。

〈所属年代〉出土遺物が乏しく、当溝跡の所属年代を示すような時期決定資料は得られなかつたが、1号住居跡と同じ検出層位であったこと、配置・方向性にこの住居跡との関連性が指摘されることより1号住居跡と同時期と考えられる。

表5 溝跡内出土遺物数量表

直 構 名	出 土 層 位	形 性 類	堆積土層		上	中	下	底	特 徴	回 収 番 号
			出 土 順	出 土 記						
SD 2	堆積土	堆積土	①	1						1
	堆積土	堆積土	②	3						1
	堆積土	堆積土	③	2						1
S 1 住居跡	堆積土	堆積土	277	61	21			20		3
	SD 4 住居跡	堆積土	10							8
	堆積土内	堆積土	1	30	12	16		1		4
		堆積土	2	34	12	12				5
		堆積土	3	5						
S 1 1	堆積土内	堆積土	1							
	堆積土内	堆積土	2	5						
		堆積土	3	6						
		堆積土	4	6						
P 1	堆積土	堆積土	1							
	堆積土	堆積土	2	6						
		堆積土	3	7						
		堆積土	4	6						
P 2	堆積土	堆積土	1							
	堆積土	堆積土	2	6						
		堆積土	3	7						
		堆積土	4	6						
P 3	堆積土	堆積土	1							
	堆積土	堆積土	2	6						
		堆積土	3	7						
		堆積土	4	6						
S D 3	堆積土	堆積土	1							
	堆積土	堆積土	2							
		堆積土	3	11						
		堆積土	4							

4. 8層

8層中からは土器片を中心とする弥生時代の遺物が多量に出土した。ただし、細分層層理面・層中及び9層上面で遺構は全く検出されなかった。

9層上面では直径30cm前後の不正円形の落ち込みが多数検出されたが、配置・深さ・断面形に規則性・規格性は認められず、堆積土は直上層の8c層か8d層であった。以上のような検出状況よりこれら落ち込みは、人為的な遺構とは考え難く、9層上面が起伏を呈していたためにそのへこみ部分に直上層の8層が厚く堆積したものと理解される。

なお、上層検出の遺構・基本層からも弥生時代の遺物が出土しているが、これらの大半は8層から巻き上げられたものと考えられる。それら資料は、時代の異なる出土遺構・出土基本層では敢て掲載せず、8層出土遺物の分類の際の補強資料として（2）出土遺物で一括して取り扱った。

8層は黒褐色粘土であるが、若干の色調の変化や砂粒の含有量の差等より、a・b・c・dの4層に細分される。a～c層は調査区全面に認められたが、d層はⅡ区の北東側にのみ分布する部分的な層である。各層の平均層厚は、a層約8cm、b層約10cm、c層約15cm、d層約8cmで、c層が最も厚い。各層の傾斜はほぼ同様で、全体的には北西側に高くなる傾きを示すが、細かくみると、調査区北壁E20ラインと調査区南壁E30ラインを結んだ線付近で傾斜方向が変化する。この変換点より西側では、南東方向への緩やかな下り傾斜を示していたものが、これを境に東側では、北東方向の緩やかな下り傾斜に転ずる。

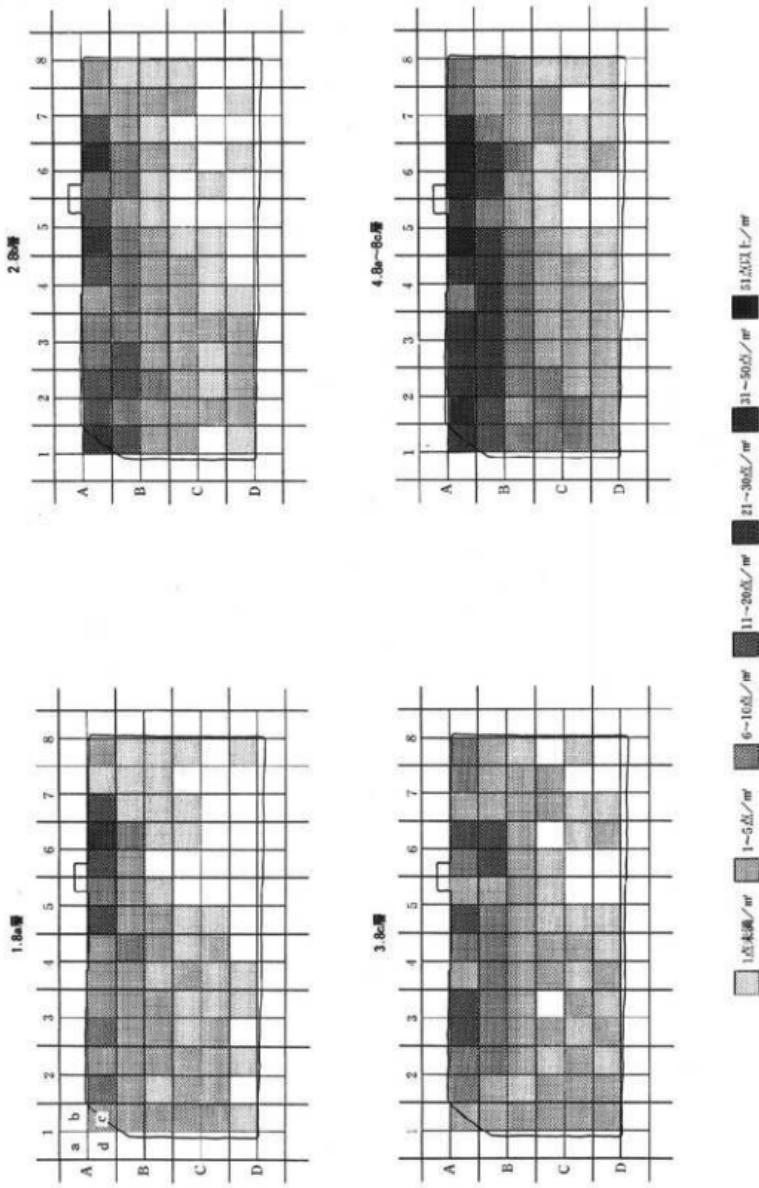
(1) 遺物出土状況

i. 出土量と遺存状況

8層全体の遺物出土量は5,435点であるが、d層からの遺物出土は皆無であった。d層を除く各層の出土量は、b層2,402点、c層1,660点、a層1,373点の順で、b層が最も多く全体の44%を占める。出土遺物は、土器・土製品・石器で、この内、土器は出土量の96%と大部分を占める。土器は全て細片を主とする破片資料で、しかも内外面とも摩滅しているものが多く遺存状態が悪い。

ii. 分布状況

第23図は各グリッドを4等分した小グリッド(a・b・c・d)に分け、それらの1畝当たりの出土量を算出し、8層細分層と8層全体の調査区に於ける遺物出土量の分布状況を示したものである。なお、小グリッドの調査面積が1/4未満のもの(Aグリッドの北側、Dグリッド



第23図 8層遺物出土分布図

表6 8層出土第II・III群土器のグリッド間接合資料(2.5m以上)

試験番号	層別	接合グリッド			最初距離	発掘番号	層別	接合グリッド			最初距離	層別
		グリッド	距離	相隔離				グリッド	距離	相隔離		
B-182	上	A-2(d)	b	B-2(d)	c	2.5m	B-201	上	A-2(d)	c	D-3(a)	a
B-184	上	A-6(c)	a	B-1(d)	a	2.5m	B-911	上	A-2(d)	a	C-1	a
B-213	下	B-3(c)	b	B-4(d)	c	2.5m	B-142	上	A-7(d)	b	B-5(a)	b
B-304	下	A-6(c)	b	B-6(d)	b	2.5m	B-190	下	B-7(b)	a	B-3(d)	b
B-308	下	B-10(c)	c	C-1(d)	b+c	2.5m	B-205	下	B-2(b)	b	D-3(a)	b
B-356	下	B-5(c)	c	A-6(d)	b	2.5m	B-140	下	A-5(d)	c	B-5(b)	a
B-352	下	B-4(c)	b	C-3(d)	b	2.5m	B-58	下	A-6(d)	b	D-7(a)	c
B-119	下	A-4(c)	b	B-1(d)	b	3.0m	B-206	下	A-3(d)	c	C-5(d)	a+b
B-123	下	A-2(c)	c	A-1(d)	c	3.0m	B-209	下	B-1(d)	b	B-4(d)	c
B-364	下	A-2(d)	c	C-3(d)	b	3.0m	B-95	下	A-8(d)	c	B-3(d)	b
B-187	下	B-5(c)	a	B-9(d)	c	3.0m	B-100	下	A-2(d)	b	B-7(d)	c

の南側、1グリッドの西側、8グリッドの東側)はこれらから除外した。

細分層各層の遺物出土量の分布状況(第23図1~3)を見ると、多少の違いはあるものの分布の傾向性については大差が認められない。この傾向性は8層全体の出土量(第23図4)で見ると以下の①~③のようにより顧観に看取できる。

- ①調査区北側に行くに従い遺物が集中し、反対に南側になると遺物が希薄となる。Bグリッドの北半(a+b)と南半(c+d)付近で出土量が大きく変化しており、南半になると、北半の1/2以下と激減する。
- ②調査区北側での出土量は、A-5(d)~A-6(c)グリッド付近が最も多く、次いでA-2(d)グリッド付近に多い。
- ③調査区東西方向の全体的な出土量をみると、調査区北側の遺物集中地点が東側にあるのにもかかわらず、西側に多い状況が認められる。

以上のように、出土遺物は、調査区の北西側に密で、地形が下がる南東側に行くに従い希薄になっており、地形の傾斜と遺物出土量とが相関関係にあることが判る。

Ⅲ. 接合関係

8層各細別層で主たる出土遺物は第II群上器と第III群上器で、これらの内、接合・同一個体資料は93資料認められた。

この内、接合資料は40資料で、さらに、細分層間での接合資料は28点である。内訳は、8c層と8b層が13点、8c層と8b層と8a層が4点、8c層と8a層が4点、8b層と8a層が7点で、比較的8c層出土のものが、上層のものと接合する場合が多い。

表6は接合資料の内、グリッド間の接合状況を示したものである。なお、遠距離間の接合を抽出するために同一小グリッド内間及び隣接小グリッド間のものは除外した。これに適合する2.5m以上離れる接合資料は22点であった。この内、半数以上の15点が5m以上離れ、中には20m以上離れる接合資料も2点あり、同一個体がかなり広い範囲に分散していることが判る。

(2) 出土遺物

i. 土器 (第24~34図、図版27~34)

8層出土土器の接合・同一個体分別後の資料数は4,907点で、これらは、以下の第Ⅰ群土器から第Ⅲ群土器に分類される（表7）。

第Ⅰ群土器 (第24図、図版27)

赤生時代中期後葉の十二塚式に比定される土器群である。8層の各細分層から出土しているが、合計20点と僅かな出土量である。8層以外からも出土しているが、これも4点と少ない。

全て小破片資料で、全体の器形・文様が判るものはない。図示した11資料はいずれも壺か甕の一部と考えられる、体部上半から口縁部にかけての資料である。

半截竹管状・櫛齒状施文具による同時施文の平行沈線文のもので、平行沈線文には二本一描のもの（1~8）、三本一描のもの（9）、四本一描のもの（10~11）が認められる。二本一描のものには平行沈線間が広いもの（1・2）と狭いもの（7・8）とその中間的なもの（3~6）がみられる。この中間的な4点の平行沈線は、他の資料が細くやや深目の鋭いタッチのものであるのに対して、僅かに太めで浅い鈍いタッチのものである。

これらの文様はいずれも体部上半以上に施されている。文様には、山形文あるいは菱形文との組み合わせ（1・2・7・8）、連弧文（5・6・9~11）があり、それらを重層することを特徴としている。4はこれらと異なり、口縁部に、半单位ずらした鋸齒文を2段巡らしている。また、7は当群の特徴的な文様のものであるが、文様帯と体部地文との境に太い1本沈線による鋸齒文を巡らしている。

第Ⅰ群土器の中では、3~6のような沈線が多少異なるもの、さらに、4のように第Ⅱ群土器の文様にちかいもの、7のように第Ⅰ群土器と第Ⅱ群土器の文様の特徴を兼ね備えるものを含めたが、これらについては今後再考の余地があり、当群から切り離せる可能性もある。

第Ⅱ群土器 (第25~31図、図版27~34)

弥生時代後期の天王山式に比定される土器群である。8層の各細分層から粗密なく出土しており、合計354点を数える。8層以外からは114点出土している。

表7 接合後の群別土器数と出土層位

層位	第Ⅰ群	第Ⅱ群			第Ⅲ群			合計				
		上	中	下	上	中	下	上	中	下		
8a	3	32	40	0	4	51	7	115	27	6	1,149	1,233
8b	10	69	81	1	2	133	17	1,928	63	8	2,915	3,141
8c	7	70	49	1	0	120	14	1,299	32	1	1,266	1,493
その他	4	20	59	1	4	114	16	1,794	31	6	1,241	1,359
計	24	236	229	3	10	468	54	5,546	173	1	5,774	6,266

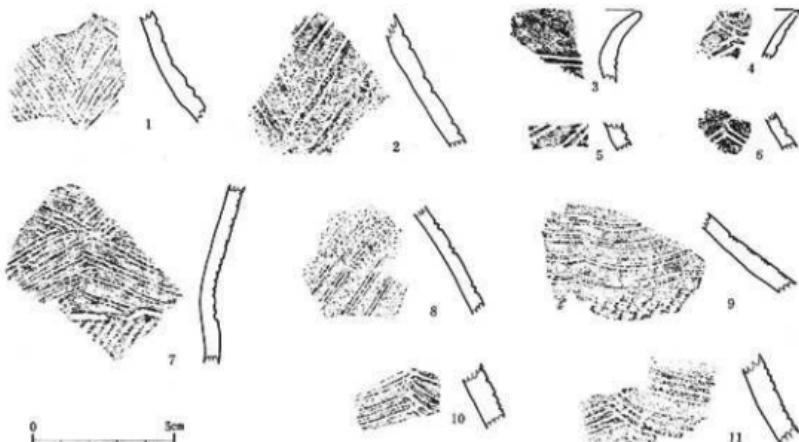
全て破片資料で、全体の器形・文様が判るものはない。僅かに第25図1～3に示した3点のみが口縁部から体部上半まで復元出来た資料であった。このような資料的な制約により、第Ⅱ群土器は口縁部資料・体部資料・底部資料・部位別不明資料の4つの部位別資料に分け、部位ごとにその特徴を取り扱った。なお、各部位資料の数量に関しては、口縁部～体部資料のものは口縁部資料数、体部～底部資料のものは底部資料数に含めた。

口縁部資料（第25～29図）

口縁部が肥厚するもので、8層からは176点、それ以外からは50点出土している。明確に器種がわかるものとしては僅か3例で、第25図2が壺、第25図1・3が甕である。これ以外のものもその多くは壺や甕の口縁部と考えられる。

口縁部資料は下半文様の有無・加飾方法、形態により以下のA～Dに分類される。

A類：口縁部の下部に装飾を加えるもので、この部位が分離されるもの。これらはさらに加飾方法の違いにより以下の1～3に細分される。



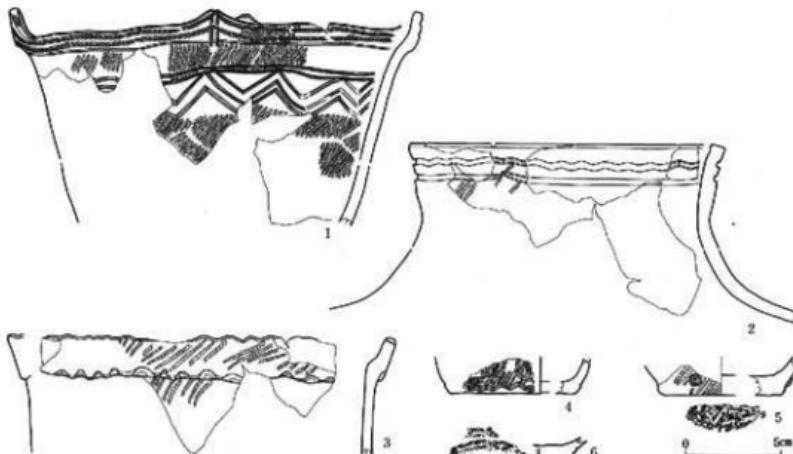
回収番号	発見場所番号	出土地層	測定	基盤	基盤	文様			記号	分類	回収番号
						外	内	内			
1	B-2	B-2	5.5	甕	甕	二本一横波継文(山形文+豪印文)			無	I	27-1
2	B-2	B-2	5.5	甕	甕	二本一横波継文(山形文)			高茎下号	I	27-2
3	B-154	A-2	5.5	甕	口縁	口縁:毛利	二本一横波継文		調査不明	I	27-3
4	B-547	A-2	5.5	甕?	口縫	二本一横波継文(周波文)			武豊不明	I	27-4
5	B-523	H-2	7.5	——	瓶上半	二本一横波継文(周波文)			調査不明	I	27-5
6	B-563	S1.1	5.5	甕C	瓶上半	二本一横波継文(周波文)			武豊不明	I	27-6
7	B-1	C-2	5.5	甕	瓶上半	横波上及波文	一本一横波継文(山形文+豪印文)		調査不明	I	27-7
8	B-6	B-2	5.5	甕?	瓶上半	二本一横波継文(山形文)			調査不明	I	27-8
9	B-7	A-2	5.5	甕	瓶上半	横波上及波文	一本一横波継文(豪印文)		ナゾ?	I	27-9
10	B-5	A-2	5.5	甕	瓶上半	四本一横波継文(周波文)			調査不明	I	27-10
11	B-1	C-4	5.5	甕	瓶上半	西本一横波継文(周波文)			調査不明	I	27-11

第25図 第Ⅱ群土器

A 1類：口縁部末端に新たに粘土を貼付し、押圧圧痕ないし刺突を加えるもの（第26図、第27図1～8）。

口縁部末端に貼付された粘土には、押圧圧痕ないし刺突が、上方・下方に加えられるもの（第26図9・16・17、第27図5）、上方のみに加えられるもの（第26図3）、下方のみに加えられるもの（第26図1・2・4・6～8・10～15・18・19、第27図1～4・6～8）の3者が認められる。上・下方の両者のものは、上方に刺突、下方に押圧圧痕が交互に加えられ交互刺突類似文となる。上方のみのものは刺突が、下方のみのものは一般的に押圧圧痕が加えられるが、希に、刺突のものも認められる（第27図1）。これらによって、上方・下方のみのものは波状文が作り出されている。これらの3者の内、下方のみのものが最も多く、次いで両方のものが、上方のみのものは極めて少ない。口縁部末端の粘土は、普通一条巡らすが、希に二条のもの（第27図1）も認められる。上方の刺突は1つ単位のものが主であるが、2つ単位のもの（第26図17）もある。

口縁部末端から上には、下から上に縦に押し引いたスリット状の刺突文（以下、スリット文。第26図1～3）、沈線文（第26図4～9）、斜行縞文のみ（第26図10～19）が施文される。



図版号	発掘番号	出土地名	層位	面積	部 分	文 横 + 調 線		説 明	分類	回収番号
						外 周	内 面			
1	B-306	A-5	8 c	裏	口一筋	口唇：施付L文縞文（口：横付L文縞文・L文縞文兼体縞文 外縞文：無・口：横付L文縞文・L文縞文（縞文+横縞文） 口輪：不明 口：横付L文縞文・L文縞文（縞文+横縞文） 底：無 文：不明	施文（調査不明）	口唇：（21.8cm） 外縞文（3.8cm）	E.C.1	27-13
2	B-131	A-3	8 b	裏	口一筋上半	口唇：無 口：横付L文縞文・L文縞文（縞文+横縞文） 底：無 文：不明	施文（調査不明）	口唇：（15.4cm）	E.C.2	27-12
3	B-110	B-3	8 b	裏	口縁	口唇：無 口：横付L文縞文（口付） 横付L文縞文 底：無 L文縞文	施文（調査不明）	口唇：（20.4cm） 小袋狀口縫	E.C.2	27-14
4	B-803	B-6	8 c	不規	口下部～底	口唇：横付L文縞文（沈縞文+横縞文） 横付L文縞文 底：無 L文縞文	ナシ	底径：（6.6cm）	III	24-1
5	B-804	B-4	8 b	不規	口下部～底	口唇：施付L文縞文・縫縫・無 口：無 文：本縞文	調査不明	底径：（6.1cm）	II	24-2
6	B-816	S-11	不規	不規	口下部～底	口唇：横縞文（横縞文） 底：縫文	武物不明	地文有無不明	III	—

第25図 第II群土器1

ものと、無文のものも（第27図1～8）がある。そのほか口唇部に斜行繩文（第26図17・18）を施文するもの、中央に沈線を入れ、外面口端部から押圧状の刺みを加えて、A2類の口縁部下端装飾と同様の文様（下方のみの刺突。以下、波状文。第26図3）が施文されるもの、内面に斜行繩文（第26図4・5・13・14・19）が施文されるものがある。

A2類：口縁部下部に沈線を引き下端を分離し、押圧痕ないし刺突を加えるもの（第27図9～22、第27図1～4）。

口縁部下部の分離部分には、押圧痕ないし刺突が上方・下方に加えられるもの（第27図10・12・15・16・21～23）、上方のみに加えられるもの（第27図13）、下方のみに加えられるもの（第27図9・11・14・17～20、第28図1～4）の3者が認められる。上・下方の両者のものは、上方に刺突、下方に刺突または押圧痕が交互に加えられ交互刺突文・交互刺突類似文となる。上方のみのものは刺突が、下方のみのものは刺突または押圧痕が加えられ、波状文が作り出されている。なお、A1類に比べると下方には刺突が加えられる場合が多く、その間隔も狭いものが多い。これらの3者の内、両方のもの、下方のみのものがほぼ等量で、上方のみのものは極めて少ない。

口縁部下部より上には、スリット文（第27図9～11）、沈線文（第27図12～20）、斜行繩文のみ（第27図21～23）が施文されるものと、無文のものも（第28図1～4）がある。そのほか口唇部に刻目（第27図10・11）、沈線文（第27図14）、斜行繩文（第27図22・23）が、内面には斜行繩文（第27図9・22）が施文されるものがある。この内、口唇部に刻目が加えられるものは、上半文様がスリット文のもので、刻目とスリット文は交互に入れられている。

A3類：口縁部下部と末端に沈線を引き分離し、交互の刺突を加えるもの（第28図5～8）。

A2類の口縁部下部の分離部分の末端に沈線を加えたものである。この類には、刺突を上方、下方に交互に加える交互刺突文しか認められない。

口縁部下部より上には、スリット文（第28図5・6）、沈線文（第28図7・8）のいづれかの文様が施文されている。

B類：口縁部の下部に装飾を加えるもので、この部位が分離されないもの。これらはさらに加飾方法の違いにより以下の1・2に細分される。

B1類：下部と末端に交互の刺突あるいは押圧痕を加えるもの（第28図13～18）。

下部には刺突が加えられるが、末端には刺突（14・16・18）か押圧痕（13・15・17）を加える2者がある。下部の刺突には2つ単位のもの（16・18）も認められる。

下部より上の文様には、スリット文（13～15）のほか、下部を含めた全体に斜行繩文だけを施文するものがある。そのほか口唇部には、刺突文を加えるもの（15）がある。

B2類：末端のみに押圧痕を加えるもの（第25図3、第28図19～28）。

表8 第Ⅱ群土器口縁部類別資料数と出土層位

層位	A 群						B 群						C 群						計	
	A1	A2	A3	B1	B2	B3	C1	C2	C3	D1	E1	F1	G1	H1	I1	J1	K1	L1	計	
b-a	15	9	1	1	1	27	3	1	0	4	1	2	3	5	3	2	3	37		
b-b	22	10	0	2	6	40	3	6	6	11	7	5	12	6	6	6	6	60		
b-c	25	9	3	1	3	41	1	6	2	9	9	9	18	2	2	2	2	20		
*層合計	62	26	4	4	10	106	7	23	2	24	17	16	33	11	11	11	11	176		
その他	20	12	0	2	4	28	1	3	0	4	4	1	5	3	3	3	3	50		
合計	82	48	4	6	11	146	8	18	2	28	21	17	39	14	14	14	14	226		

末端より上は、斜行縞文のみのもの（第25図3、第28図20～22）か、無文のもの（第28図23～25）が多いが、スリット文が施文されるもの（第28図19）もある。そのほか口唇部には斜行縞文を施文するものがある。

C類：下部に装飾を加えないもの。これらは末端の段の有無により以下の1・2に細分される。

C1類：A・B類と同様に明瞭な段を持つもの（第25図1、第29図1～10）。

この類の中には口縁部直下に沈線状の押正（第29図3・8）や頸部地文上端の綾絡文（第29図2）が巡り、より強い段をもつものもある。

口縁部上は、斜行縞文のみのもの（第28図2・4）か、無文のもの（3・5～10）が主であるが、縞文原体側面圧痕文（第25図1）、刺突文（第28図1）のものもある。そのほか口唇部に斜行縞文（第28図2・4）、波状文（第28図3）を、内面には斜行縞文を施文するものがある。

C2類：明瞭な段を持たないもの（第25図2、第29図11～19）。

口縁部は肥厚するが、末端に明瞭な段を持たず頸部に移行するものである。ただし、口縁部直下には、沈線文（第29図11・13）を巡らしたり、頸部地文上端の綾絡文（第29図16）によって、口縁部を明確に分離するものもある。口縁部上は、斜行縞文のみのもの（第29図11～16）か、無文のもの（第29図17・18）が主であるが、沈線文のもの（第25図2）もある。そのほか口唇部に斜行縞文（第29図11・12）、波状文（第29図13）を、内面には斜行縞文を施文するものがある。

以上のA・B・C類のうち、8層中からの出土量が最も多いのがA類で、反対に少ないのがB類である。これらの細別類の場合では、A類は1類が多く3類が少ない。B類は2類が多く、C類はほぼ同数である。これらの傾向性は8層以外の出土量を加えても同様である（表8）。

各類の器形には、受口状のものあるいは直線的かやや外反するものの両者が認められる。数量的な制限もあるが、A類・B類がほぼ等量か受口状のものがやや優位であるのに対して、C類は直線的かやや外反するものが多い。また、口縁部には、突起が付くものや小波状口縁のものが認められる。突起は、A3類・C2類には認められなかったが、この類にも突起が付く可能性はある。突起は、A類に多くC類に少ないが、器形が受口状で、下部を除く口縁部文様が、斜行縞文のみ以外の文様のものに多く付けられる傾向性がある。突起には、その頂部や両脇に

表9 口縁部外面上半文様と口縁部類別資料との関係

類別	上半文様	①スリット文 (出土品数)		②沈線文 (出土品数)		③刺突文 (出土品数)		④横文原体側面 圧痕文 (出土品数)		⑤斜行繩文 (出土品数)		⑥無文 (出土品数)		⑦繩文原体 (出土品数)		⑧～⑨の合計 (件数)		⑩～⑪の合計 (件数)	
		1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2
A	1 順	3	0	0	11	0	19	12	19	22%	78%	0	0	0	0	22%	78%	0	0
A	2 順	6	0	0	15	0	8	5	6	50%	50%	0	0	0	0	50%	50%	0	0
A	3 順	2	0	2	0	0	0	0	2	100%	0	0	0	0	100%	0	0	0	0
A	横文 備	13	0	21	0	30	21	26	36%	64%	0	0	0	0	23%	77%	0	0	
B	1 順	3	0	0	0	2	0	0	3	33%	67%	0	0	0	0	33%	67%	0	0
B	2 順	3	0	0	0	6	3	6	6	50%	50%	0	0	0	0	50%	50%	0	0
B	横文 備	5	0	0	0	5	3	9	9	50%	50%	0	0	0	0	50%	50%	0	0
C	1 順	0	1	0	1	2	1	10	6	10%	90%	0	0	0	0	10%	90%	0	0
C	2 順	0	0	1	0	10	5	6	6	6%	94%	0	0	0	0	6%	94%	0	0
C	横文 備	0	1	1	1	12	15	6	6	50%	50%	0	0	0	0	50%	50%	0	0

押庄圧旗や刻みを入れるものが多い（第25図1、第26図3・15・19、第28図4）。また、突起頂部直下の外面に刺突を加えるもの（第27図18）もある。小波状口縁のものはA 1類（第27図2）・B 2類（第25図3）・C 2類（第29図17）に認められたが、特定類の主体的な器形とはならない。

口縁部下部文様を除く口縁部外面の文様には、スリット文、刺突文、沈線文、繩文原体側面圧痕文、斜行繩文がある。スリット文・刺突文は無文上に、沈線文は、無文あるいは斜行繩文上に、繩文原体側面圧痕文は斜行繩文上に施文されている。これら文様を類別資料でみると（表9）、スリット文はA 1～3・B 1・2類に、沈線文はA 1～3・C 2類に、刺突文・繩文原体側面圧痕文はC 1類のみに、斜行繩文のみ・無文のものはA 3類を除く全ての類にみられ、類による文様の違いが認められる。また、斜行繩文のみか無文のものとそれ以外の文様との比較では、A 3・A 2類を除き各類ともそれ以外の文様の方が少ないが、これを各類全体の割合でみると、それ以外の文様のものは、A類が多く、B・C類になるに従い順次少なくなる。沈線文には、横位展開の直線文、鋸歯文などがあり、これらは平行する2条のものが多く、なかには、3条のもの（第27図19）も認められる。直線文には全体的な文様展開が判るものが多く、直線文としたなかには、突起部分で器形に沿わせ弧状になるもの（第27図12・18）、平行するものが連結するもの（第27図18・20）があり、これらは厳密には直線文とは区別されるべきものかも知れない。なお、沈線文中には、明確に磨消繩文と判断される資料はなかった。これら沈線文は、体部資料と同様に1づつ引く沈線であるが、中には、同時施文による平行沈線文の可能性のある資料（第26図5）も認められる。繩文原体側面圧痕文は、C 1類にのみにみられるものである。平行する2条のものを器形に沿って配する点は沈線文と類似する。

口唇部の文様には、波状文、沈線文、刺突文、刻目、斜行繩文が認められる。この内、波状文はA 1・C 1・C 2類の各類に僅かに認められる資料であるが、この文様の作出方法は、A 2類の下部文様と類似する。また、刻目は、A 2類のスリット文のものに特徴的に見いだせる文様である。斜行繩文は資料の遺存状態が悪く、A 1・A 2・B 2・C 1類にしか認められな



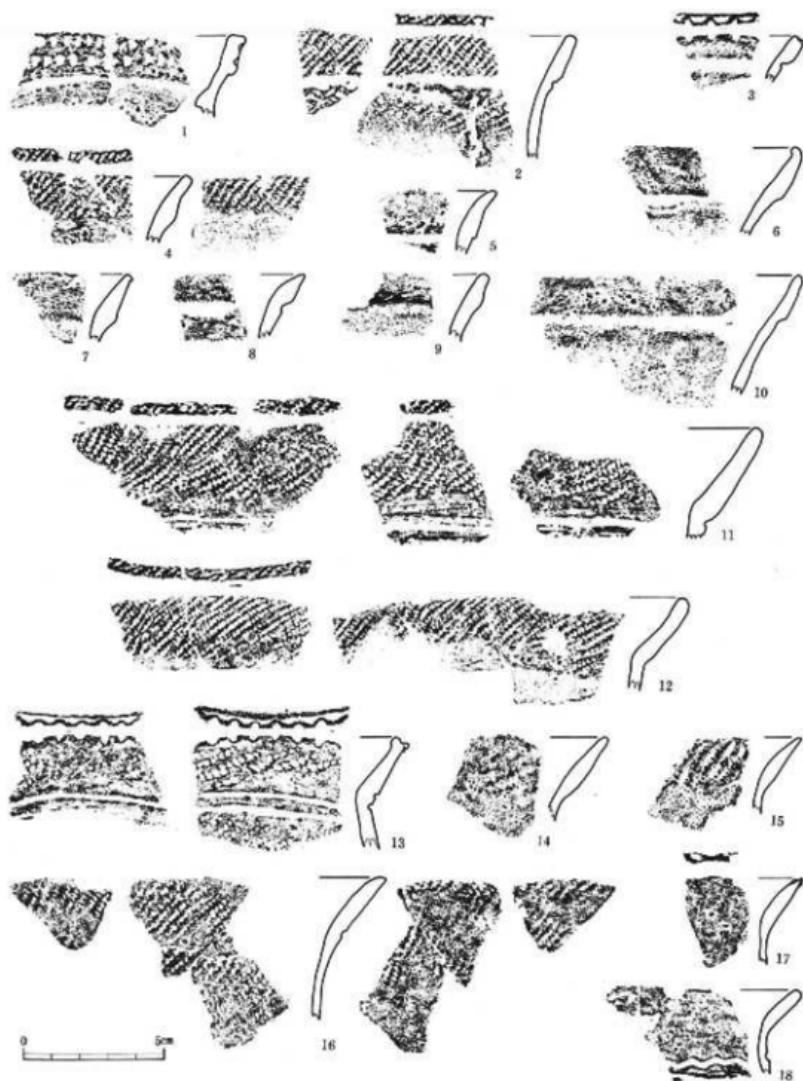
第26図 第II類土器2



第27図 第II類土器 3



第28図 第III類土器 4



第29図 第II類土壠 5

固有番号	施設名	面積	施設種別	施設区分	外観		内観		内構造内容	備考	分類	既存基準
					面積	面積	内構造	内構造				
26-1	B-101	A-5	R-C	1層	白壁透天(下階)	白壁透天(上階)	黒板	黒板	無	無文	Ⅲ-A	25-1
26-2	B-102	A-5	R-B	1層	黒板	成文化(下:透天)	黒板	黒板	無	無文	Ⅲ-A	25-2
26-3	B-103	B-3	R-C	1層	成文化	成文化(上:透天)	黒板	黒板	無	無文	Ⅲ-A	25-3
26-4	B-154	A-4	R-C	1層	黒板	成文化(下:透天)	成文化(透天)	黒板	無	無文	Ⅲ-A	25-4
26-5	B-155	A-2	R-B	1層	不規	透板柱(下:透天)	黒板	黒板	無	無文	Ⅲ-A	25-5
26-6	B-157	S-5	G-B	1層	不規	成文化(下:透天)	成文化(透天)	無	無	無文	Ⅲ-A	25-6
26-7	B-160	S-1	E-C	1層	黒板	成文化(下:透天)	成文化(透天)	黒板	黒板	無文	Ⅲ-A	25-7
26-8	B-129	C-1	B-B	1層	不規	透板柱(下:透天)	成文化(透天)	無	無	無文	Ⅲ-A	25-8
26-9	B-158	B-4	R-B	1層	成文化斜面牆	側板ナット	—	—	無	無文	Ⅲ-A	25-9
26-10	B-173	A-7	R-C	1層	黒板	成文化(下:透天)	透作L型黒板	無	無	無文	Ⅲ-A	25-10
26-11	B-194	A-6	R-B	1層	不規	成文化(下:透天)	黒板	無	無	無文	Ⅲ-A	25-11
26-12	B-175	A-6	R-B	1層	不規	成文化(下:透天)	透作L型黒板	無	無	無文	Ⅲ-A	25-12
26-15	B-175	A-8	R-B	1層	不規	成文化(下:透天)	透作L型黒板	無	無	無文	Ⅲ-A	25-13
26-16	B-176	A-8	R-B	1層	黒板	成文化(下:透天)	透作L型黒板	無	無	無文	Ⅲ-A	25-14
26-15	B-177	A-6	R-B	1層	不規	成文化(下:透天)	透作L型黒板	無	無	無文	Ⅲ-A	25-15
26-16	B-183	A-5	R-B	1層	不規	成文化斜面牆	(上:斜面、下:透天)	無	無	無文	Ⅲ-A	25-16
26-17	B-186	A-3	R-C	1層	L型黒板	(上:斜面、下:透天)	黒板	黒板	無	無文	Ⅲ-A	25-17
26-18	B-178	B-6	R-B	1層	黒板	成文化(下:透天)	透作L型黒板	無	無	黒板(透天)	Ⅲ-A	25-18
26-19	B-179	B-4	R-B	1層	不規	成文化(下:透天)	透作L型黒板	無	無	無文	Ⅲ-A	25-19
27-1	B-187	B-3	R-C	1層	黒板	成文化斜面牆	透作(斜面ナット)	黒板(斜面ナット)	無	無文	Ⅲ-A	29-1
27-2	B-190	B-7	R-B	1層	黒板	成文化(下:透天)	透作(斜面ナット)	黒板(斜面ナット)	無	無文	Ⅲ-A	29-2
27-3	B-188	B-7	R-B	1層	黒板	成文化(下:透天)	透作(斜面ナット)	黒板(斜面ナット)	無	無文	Ⅲ-A	29-3
27-4	B-189	A-3	R-B	1層	黒板	成文化(下:透天)	透作(斜面ナット)	黒板(斜面ナット)	無	無文	Ⅲ-A	29-4
27-5	B-186	B-2	R-B	1層	黒板	(上:斜面、下:透天)	無	—	無	無文	Ⅲ-A	29-5
27-6	B-191	A-5	R-B	1層	黒板	成文化(下:透天)	無	—	無	無文	Ⅲ-A	29-6
27-7	B-193	A-3	R-B	1層	不規	成文化(下:透天)	無	—	無	無文	Ⅲ-A	29-7
27-8	B-193	A-6	R-B	1層	黒板	成文化(下:透天)	無	—	無	無文(斜面ナット)	Ⅲ-A	29-8
27-9	B-194	B-2	R-B	1層	不規	成文化(下:透天)	無	—	無	無文	Ⅲ-A	29-9
27-10	B-195	B-4	R-B	1層	黒板	成文化斜面牆	黒板(斜面)	無	無	無文	Ⅲ-A	29-10
27-11	B-196	A-2	R-B	1層	黒板	成文化(下:透天)	黒板	黒板	—	内装剥離	Ⅲ-A	29-11
27-12	B-161	A-6	R-B	1層	不規	成文化前斜面牆	透作(斜面)	無	無	実跡	Ⅲ-A	29-12
27-13	B-162	A-1	R-B	1層	不規	成文化(上:斜面)	透作(斜面)	無	無	無文	Ⅲ-A	29-13
27-14	B-163	B-7	R-B	1層	黒板	成文化(下:透天)	透作(斜面)	無	無	無文	Ⅲ-A	29-14
27-15	B-165	A-5	R-B	1層	黒板	成文化前斜面牆	透作(斜面)	無	無	実跡	Ⅲ-A	29-15
27-16	B-169	S-1	E-C	1層	黒板	成文化(上:斜面)	透作(斜面)	無	無	実跡	Ⅲ-A	29-16
27-17	B-164	A-3	R-B	1層	不規	成文化(下:透天)	透作(斜面)	無	無	実跡	Ⅲ-A	29-17
27-18	B-169	B-2	R-B	1層	不規	成文化(下:透天)	透作(斜面)	無	無	実跡	Ⅲ-A	29-18
27-19	B-168	B-6	R-B	1層	黒板	成文化(下:透天)	透作(斜面)	無	無	実跡	Ⅲ-A	29-19
27-20	B-167	B-6	R-B	1層	黒板	成文化(下:透天)	透作(斜面)	無	無	実跡	Ⅲ-A	29-20
27-21	B-160	A-5	R-B	1層	黒板	成文化(下:透天)	透作(斜面)	無	無	実跡	Ⅲ-A	29-21
27-22	B-181	B-1	R-C	1層	L型黒板	(上:斜面、下:透天)	透作L型黒板(斜面)	透作L型黒板	—	内装剥離	Ⅲ-A	29-22
27-23	B-162	B-3	R-B	1層	黒板	成文化前斜面牆	透作L型黒板	透作L型黒板	—	無	Ⅲ-A	29-23
28-1	B-135	A-4	R-B	1層	黒板	成文化(下:透天)	無	無	無	無文	Ⅲ-A	30-1
28-2	B-197	A-6	R-C	1層	黒板	成文化(下:透天)	無	無	無	無文	Ⅲ-A	30-2
28-3	B-196	A-4	R-B	1層	黒板	成文化(下:透天)	無	無	無	無文	Ⅲ-A	30-3
28-4	B-194	A-5	R-B	1層	黒板	成文化(下:透天)	無	無	無	無文	Ⅲ-A	30-4
28-5	B-107	C-2	R-B	1層	不規	成文化前斜面	ニット	ニット	—	無	Ⅲ-A	30-5
28-6	B-105	A-6	R-B	1層	黒板	成文化前斜面	ニット	ニット	—	無	Ⅲ-A	30-6
28-7	B-170	A-6	R-C	1層	黒板	成文化前斜面	ニット	ニット	—	無	Ⅲ-A	30-7
28-8	B-171	B-4	R-B	1層	不規	成文化前斜面	ニット	ニット	—	無	Ⅲ-A	30-8
28-9	B-106	B-6	R-C	1層	不規	成文化前斜面	ニット	ニット	—	無	Ⅲ-A	30-9
28-10	B-110	B-6	R-B	1層	不規	成文化前斜面	ニット	ニット	—	実跡(同斜面)	Ⅲ-A	30-10
28-11	B-150	A-5	R-B	1層	—	成文化前斜面	—	—	—	—	Ⅲ-A	30-11
28-12	B-150	B-6	R-B	1層	—	成文化前斜面	—	—	—	—	Ⅲ-A	30-12
28-13	B-112	S-1	E-C	1層	不規	上:斜面、下:透天	ニット	ニット	—	無	Ⅲ-A	30-13
28-14	B-111	A-6	R-B	1層	不規	上:斜面、下:透天	ニット	ニット	—	無	Ⅲ-A	30-14
28-15	B-113	A-1	R-B	1層	不規	上:斜面、下:透天	ニット	ニット	—	無	Ⅲ-A	30-15
28-16	B-116	B-7	R-B	1層	不規	上:斜面、下:透天	透作L型黒板	透作L型黒板	—	無	Ⅲ-A	30-16

10番号	出土地点	山手地区	部位	外文		斜行縄文	横縄文	口縁部内面	備考	分類	出土地
				口	裏						
26-17	B-17	B-1	S-b	口縫	基文	ト・例文、下・例文	縫合し、縫合文	無文	無文(横行ナデ)	Ⅲ-C1	30-17
26-18	B-16	A-5	S-a	口縫	不明	上・例文、下・例文	4-例文(横行ナデ)	不明	Ⅲ-B1	30-18	
26-19	B-14	A-3	S-b	口縫	基文	例文	無文	無文(横行ナデ)	Ⅲ-B2	30-19	
26-20	B-13	A-5	S-c	口縫	無文	例文	無文	無文(横行ナデ)	Ⅲ-B2	30-20	
26-21	B-12	A-6	S-b	口縫	L-R縄文	神文	縫合し、縫合文	無文(横行ナデ)	Ⅲ-B2	30-21	
26-22	B-11	A-7	S-b	口縫	無文	神文	縫合し、縫合文	無文	Ⅲ-B2	30-22	
26-23	B-10	A-3	S-c	口縫	無文	神文	無文	無文(横行ナデ)	Ⅲ-B2	30-23	
26-24	B-9	A-4	S-c	口縫	無文	神文	無文	無文(横行ナデ)	Ⅲ-B2	30-24	
26-25	B-8	B-4	S-b	口縫	無文	神文	無文	無文	Ⅲ-B2	30-25	
26-26	B-7	B-3	S-c	口縫	不明	神文	無文	無文	Ⅲ-B2	30-26	
26-27	B-6	A-6	S-a	口縫	不明	神文	無文(横行ナデ)	不明	Ⅲ-B2	30-27	
26-28	B-5	A-8	S-c	口縫	無文	神文	無文	無文(横行ナデ)	Ⅲ-B2	30-28	
26-29	B-4	A-4	S-b	口縫	無文	神文	無文	無文	Ⅲ-C1	31-1	
29-1	B-39	A-3	S-c	口縫	L-R縄文	-	縫合し、縫合文	無文	東北付	Ⅲ-C1	31-2
29-3	B-38	A-5	S-b	口縫	無文	無文	無文	無文	Ⅲ-C1	31-3	
29-4	B-39	A-2	S-c	口縫	L-R縄文	-	縫合し、縫合文	無文	Ⅲ-C1	31-3	
29-5	B-34	B-7	S-b	口縫	無文	無文	無文	無文	Ⅲ-C1	31-9	
29-6	B-33	H-4	S-c	口縫	無文	無文	無文	無文(横行ナデ)	Ⅲ-C1	31-5	
29-7	B-33	B-3	S-c	口縫	無文	無文(横行ナデ)	無文	無文	Ⅲ-C1	31-8	
29-8	B-36	B-6	S-c	口縫	無文	無文(横行ナデ)	無文	無文	Ⅲ-C1	31-6	
29-9	B-35	A-7	S-b	口縫	無文	無文(横行ナデ)	無文(横行ナデ)	無文(横行ナデ)	Ⅲ-C1	31-7	
29-10	B-37	H-6	S-c	口縫	不明	無文	無文	無文(横行ナデ)	Ⅲ-C1	31-10	
29-11	B-35	C-1	S-b	口縫	L-R縄文	-	縫合ナデ・縫合L-R縄文	無文(横行ナデ)	Ⅲ-C1	31-11	
29-12	B-40	A-3	S-c	口縫	L-R縄文	-	縫合T・東北付	無文	無文(横行ナデ)	Ⅲ-C2	31-13
29-13	B-39	A-8	S-c	口縫	成文	-	縫合し、縫合文	縫合L-R縄文	無文(横行ナデ)	Ⅲ-C2	31-16
29-14	B-24	B-1	S-b	口縫	不明	-	縫合L-R縄文	無文(横行ナデ)	無文	Ⅲ-C2	31-12
29-15	B-42	B-6	S-c	口縫	不明	-	縫合L-R縄文	無文	無文	Ⅲ-C2	31-15
29-16	B-43	B-5	S-b	口縫	不明	-	縫合L-R縄文	無文	無文(横行ナデ)	Ⅲ-C2	31-14
29-17	B-45	A-3	S-c	口縫	無文	-	無文	無文	小斜口縫	Ⅲ-C2	31-17
29-18	B-44	H-8	S-c	口縫	無文	-	無文(横行ナデ)(ガモ)	無文(横行ナデ)(無文)	無文(横行ナデ)(ガモ)	Ⅲ-C2	31-18

かったが、外面文様が斜行縄文のみのものに比較的多いことより、他の類にも存在するものと考えられる。口縁部内面の文様は、斜行縄文のみで、A 1・A 2・C 1・C 2類に認められるが、数量的には多くない。

口縁部文様に施文される斜行縄文は摩滅のため不明な点もあるが、その多くは横位L Rである。なお、斜行縄文とした内には、不加条縄文が多少含まれている可能性もある。

内外面の調整は遺存状態が悪く、観察できる資料は少ないが、いずれの類別資料も丁寧な調整はしておらず、内面は粗い横方向のナデが一般的で、外面にも同様なナデが認められるものもある（第27図2）。

体部資料（第30・31図他）

頸部を含めた資料で、地文以外の文様をもつものである。8層からは170点、それ以外から59点出土している。第25図1の資料を除き、明確な器種のものは不明であるが、口縁部資料同様その多くは壺や甕と考えられる。施文部位は体部上半を中心とするが、頸部を持つ資料は体部上半から頸部下端と頸部上端に施文され、その間の頸部を無文化（第30図1・4・18他）するものが多い。また、体部文様の下は地文となる場合が多い。

文様には沈線文、刺突文、貼付文がある。刺突文は単独文様ではなく、沈線文と組み合わせて用いられている。これら文様の割合は、沈線文が圧倒的多数を占め、刺突文は3点、貼付文は1点のみの出土である。

これら頸部から体部資料の内外面の調整は、いずれも口縁部同様粗い。

沈線文（第25図1、第30図、第31図1～16他）

沈線を1本づつ描くもので、無文上に施文されるものと、地文上に施文されるものの両者がある。無文上のものには、あらかじめ文様帶部分に地文を入れず空けておき、後に文様を施文をする例（第25図1、第29図13）も認められる。また、地文上に施文されるものには、磨消繩文のものがある。沈線文には、直線文（第30図1～4他）、連弧文（第30図5～18他）、波状文（第30図19～21）、鋸歯文（第30図22～26、第31図1～8他）のように横位に展開するもの（以下、横位展開文様）の他、菱形文を重ねたようなもの（第31図9）、弧文を変形させたもの（第31図10・11・13）、渦文状のもの（第31図14・15）などがある。

横位展開文様には多条化するものが多く、直線文や鋸歯文には5条以上の例（第30図21、第31図6）も認められるが、2条のものが主である。また、鋸歯文中には、半单位ずらして多条化するもの（第31図6・7）もある。

直線文は、他の文様と組み合わせ、器形の変換点に施文される例が多く、文様区画文的な色彩もある。鋸歯文にも直線文を除く、他の文様との組み合わせが認められる（第25図4、第30図13）。また、連弧文や鋸歯文は体部文様帶の下端に施文されるものが多い。

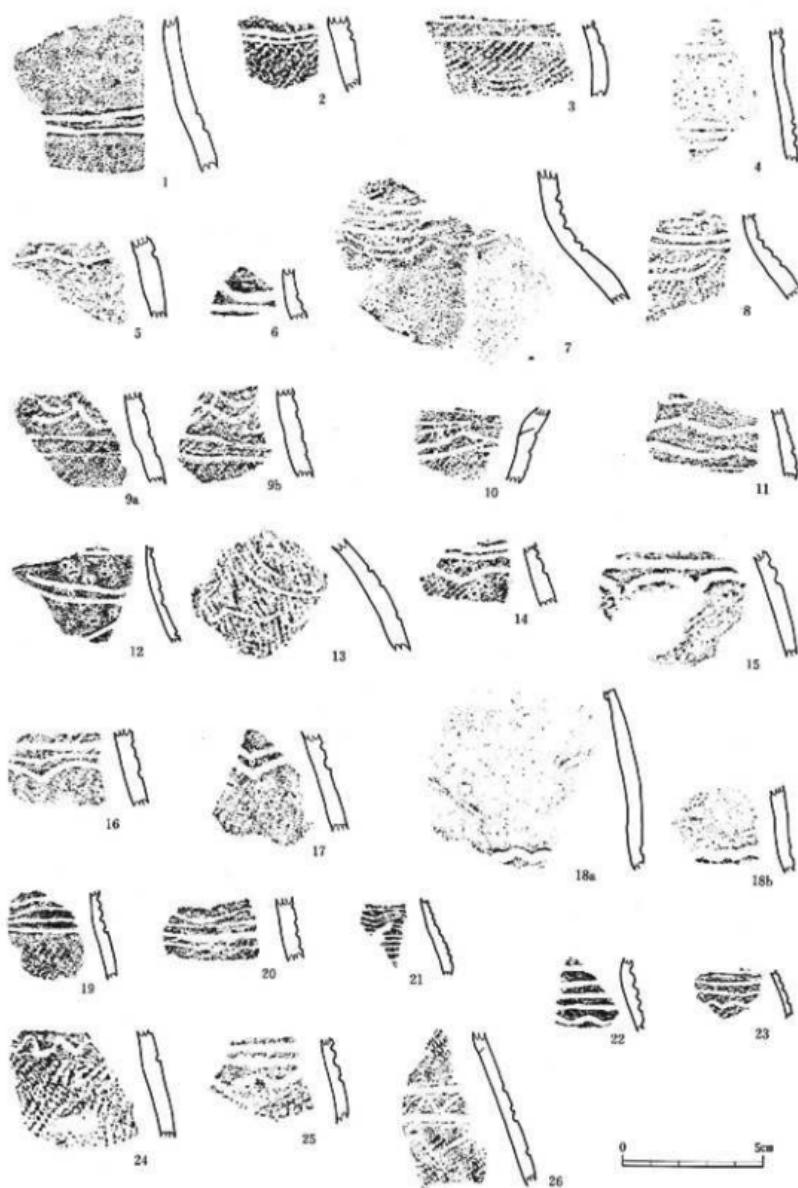
磨消繩文は資料が摩滅しているせいか、あるいは、雑な磨消しで細片のためか、明確に磨消繩文と判断されるものは、横位展開文様以外の文様に充填繩文手法のものが1例認められるのみである（第31図11）。ただし、横位展開文様にも繩文磨消手法らしきものも認められるので（第31図1・2・6）、磨消繩文の実数については不明である。

沈線の幅には広いもの（第30図18、第31図16）、狭いもの（第30図21、第31図4）、その中间的なものと各種ある。この内の狭いものは、3条以上の多条となるものに多い。また、沈線には、底面が凸状に盛り上がる特異なもの（第25図1、第30図9、第31図7）がある。

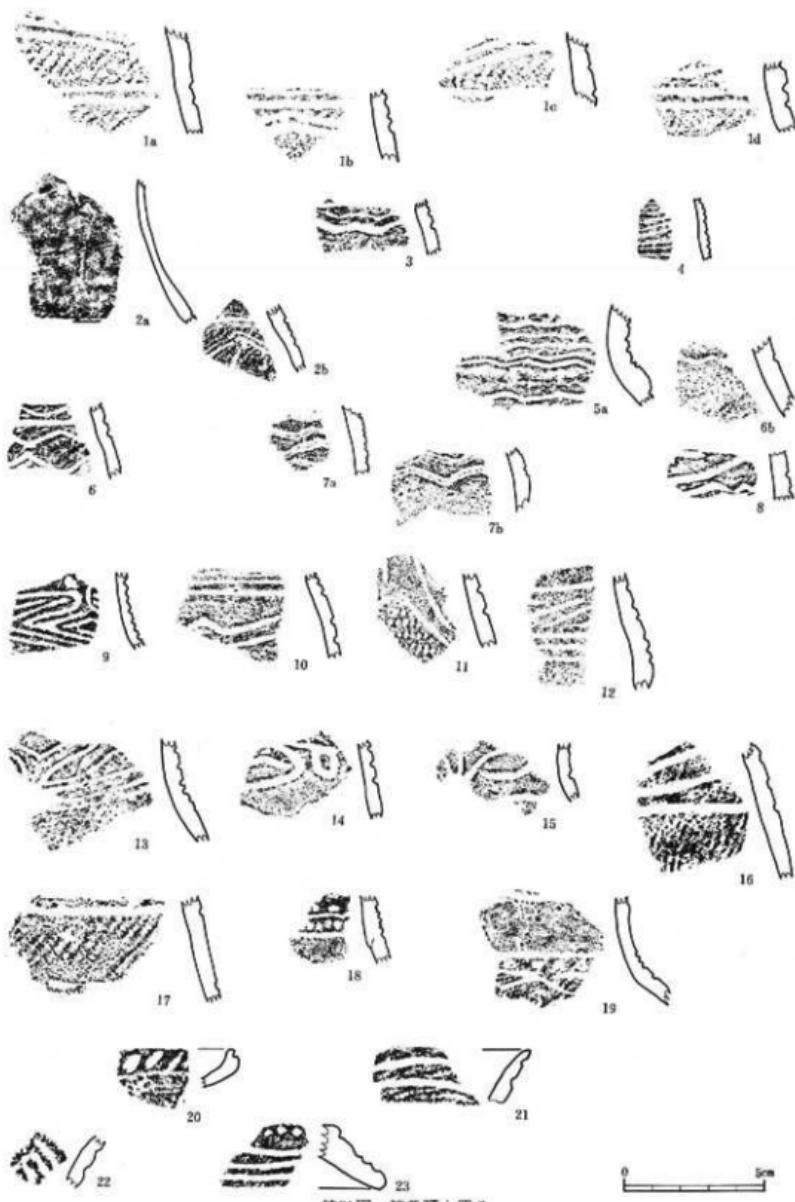
地文が明確なものは、全て斜行繩文で、横位LRのものが一般的であるが、斜位（横走・縦走）のものも僅かに認められる。なお、地文が不明確なものには、不加条繩文が含まれている可能性もある。

刺突文（第31図17～19）

刺突を横位に連続するもので、刺突には押引状のもの（17）と円形（18・19）のものがある。两者とも沈線文と組み合わせられ、地文（横位LR繩文）上に施文されている。円形のものは、直線文の間に加えられており、これが2段以上になるもの（18）も認められる。



第30図 第II類土器 6



第31図 第Ⅱ類土器7

番号	器物番号	出土場所	層位	部 位	文 件		内 容	考 参	分類	同組番号
					四	五				
20-1	B-569	H-2	8b	側一側上半	地: 横字+二枚鉢文(直鉢文) 体: 鉢文?	地輪不規			II	32-1
30-2	B-161	A-5	8c	側上半	横字+直鉢文+横鉢文(直鉢文)	調整不明			II	32-2
30-3	B-533	A-7	7b	側上半	横字+斜鉢文+直鉢文(直鉢文)	ナフ			II	32-3
30-4	B-565	A-5	8b	側	直鉢文(直鉢文)	調整不明			II	32-4
30-5	B-529	A-1	8b	側上半	直鉢文?+横鉢文(直鉢文?)	偏心ナフ			II	32-5
30-6	B-342	B-2	8b	側?	直鉢文(直鉢文+直鉢文?)	調整不明	地文有無不明		II	32-6
30-7	B-261	D-7	8c	側一側上半	地: 横字+L字鉢文+直鉢文(直鉢文) 体: 鉢文?	調整不明			II	32-7
30-8	B-365	S-11	層質	側一側上半	地: 横字+直鉢文(直鉢文)	ナフ			I	32-8
30-9	B-247	B-2	8b	側1-平?	横字+直長鉢文+直鉢文(直鉢文+直鉢文)	調整不明			I	32-9
30-10	B-549	H-2	8c	側下平?	横字+直鉢文+直鉢文(直鉢文+直鉢文)	偏心ナフ			I	32-10
30-11	B-526	S-11	8c	側?	直鉢文(直鉢文+直鉢文)	調整不明			I	32-11
30-12	B-553	A-7	8c	側?	直鉢文(直鉢文+直鉢文?)	偏心ナフ	地文有無不明		I	32-12
30-13	B-546	C-4	8c	側?	直鉢文(直鉢文+直鉢文?)	調整不明			I	32-13
30-14	B-548	B-6	8a	側上半	横字+直鉢文(直鉢文+直鉢文)	偏心ナフ			I	32-14
30-15	B-548	B-4	8a	側上半	横字+直鉢文(直鉢文+直鉢文)	偏心ナフ			I	32-15
30-16	B-527	A-2	8c	側上半?	直鉢文(直鉢文+直鉢文?)	調整不明			I	32-16
30-17	B-544	A-4	8b	側上半?	直鉢文(直鉢文+直鉢文?)	偏心ナフ			I	32-17
30-18	B-502	C-6	8c	側?	アフ?+直鉢文(直鉢文+直鉢文)	偏心ナフ	尚付ナフ		I	32-18
30-19	B-516	A-5	8c	側?	アフ?+直鉢文(直鉢文+直鉢文)	偏心ナフ			I	32-19
30-20	B-545	A-7	8b	側?	アフ?+直鉢文(直鉢文+直鉢文)	偏心ナフ	地文有無不明		I	32-20
30-21	B-522	B-6	8c	側?	直鉢文(直鉢文+直鉢文)	調整不明	地文有無不明		I	32-21
30-22	B-537	H-1	8c	側?	アフ?+直鉢文(直鉢文+直鉢文)	ナフ			I	32-22
30-23	B-268	A-5	8c	側上半	直鉢文+直鉢文(直鉢文+直鉢文)	調整不明			I	32-23
30-24	B-531	H-4	8c	側上半	横字+直鉢文(直鉢文+直鉢文)	ナフ			I	32-24
30-25	B-239	A-2	8b	側上半?	直鉢文(直鉢文+直鉢文)	調整不明			I	32-25
30-26	B-514	C-2	8c	側上半?	直鉢文(直鉢文+直鉢文)	偏心ナフ			I	32-26
31-1	B-509	U-2	8c	側上半?	直鉢文(直鉢文+直鉢文)	偏心ナフ	文書未記載		I	32-5
31-2	B-517	B-2	8b	側一側上半	横字+二枚鉢文(直鉢文)+直鉢文(直鉢文)	偏心+偏心ナフ	文書未記載ナフ?		I	33-4
31-3	B-537	A-6	7b	側半?	横字+直鉢文+直鉢文(直鉢文)	調整不明	外付: ナフ		I	33-5
31-4	B-510	A-3	8b	側?	直鉢文(直鉢文+直鉢文)	調整不明	地文有無不明		I	33-7
31-5	B-261	8c	側?	横字+直鉢文(直鉢文+直鉢文)	調整不明				I	33-8
31-6	B-358	C-2	8c	側上半?	横字+二枚鉢文(直鉢文+直鉢文)+直鉢文?	ナフ	文書未記載ナフ?		I	33-9
31-7	B-501	U-3	8b	側半?	直鉢文(直鉢文)	調整不明	地文有無不明		I	33-10
31-8	B-530	C-2	8c	側上半?	直鉢文(直鉢文)	ナフ			I	33-11
31-9	B-530	A-6	8b	側?	直鉢文(直鉢文)	調整不明	地文有無不明		I	33-12
31-10	B-512	A-6	8a	側上半	直鉢文(直鉢文+直鉢文)	調整不明	地文有無不明		I	33-13
31-11	B-536	A-7	8c	側上半?	直鉢文(直鉢文+直鉢文)	調整不明	文機脚内記載		I	33-14
31-12	B-535	A-6	8c	側上半?	直鉢文(直鉢文)	調整不明			I	33-15
31-13	B-528	A-5	8c	側一側上半	地: 直鉢文(直鉢文+直鉢文) 体: 橫字+L字鉢文(直鉢文)	調整不明			I	33-16
31-14	B-539	A-2	8c	側上半?	アフ?+直鉢文(直鉢文)	偏心ナフ			I	33-17
31-15	B-519	S-11	8c	側?	直鉢文(直鉢文)	偏心ナフ	地文有無不明		I	33-18
31-16	B-567	A-6	8c	側上半?	直鉢文+直鉢文(直鉢文)	調整不明			I	33-19
31-17	B-536	R-4	8c	側上半?	直鉢文+直鉢文(直鉢文)	調整不明			I	33-20
31-18	B-548	A-2	8b	側?	直鉢文(直鉢文)	調整不明	地文有無不明		I	33-21
31-19	B-522	S-11	8c	側一側上半?	地: 横字+二枚鉢文(直鉢文) 体: 橫字+L字鉢文(直鉢文)	ナフ			I	33-22
31-20	B-482	D-1	7b	直?	直鉢文	調整不明	當附記「」字缺		I	34-3
31-21	B-401	A-5	8a	直?	横字+直鉢文(直鉢文+直鉢文)	調整不明			I	34-4
31-22	B-404	A-5	7b	直?	横字+直鉢文(直鉢文+直鉢文)	調整不明			I	34-5
31-23	B-402	H-5	8a	直?	直鉢文(直鉢文+直鉢文)	調整不明	地文有無不明		I	34-6

貼付文 (第25図5)

体部下端の地文 (横位L R鉢文) 上にボタン状の粘土を貼り付けたもので、複数単位付けられたものと考えられる。上面中央には縦方向の刻みが1つ加えられている。

底部資料 (第25図4~6)

体部資料に地文以外の文様をもつものである。8層からは2点、それ以外からは1点出土し

ている。底部の器形は平底あるいはやや上部底状になるもので、体部末端の器形にはやや膨らむもの（5）がある。また、底部外面は無文（4・6）と木葉痕（5）のものが認められる。

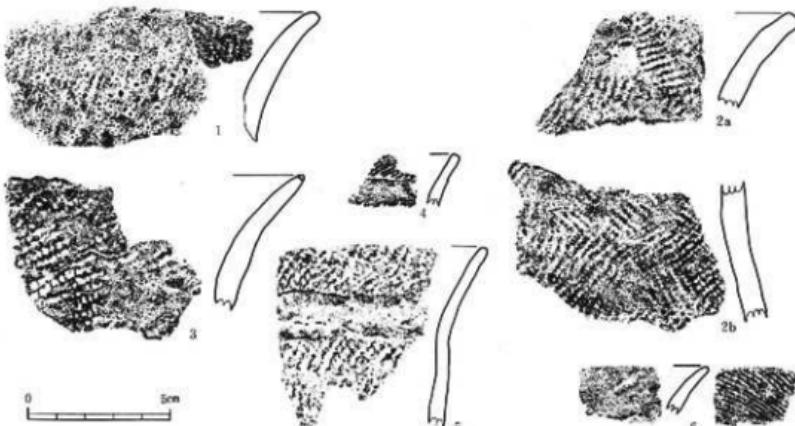
部位不明資料（第31図20～23）

明確に部位を特定出来ない資料で、地文以外の文様をもつものである。8層からは6点、それ以外からは10点出土している。これらは口縁部（20・22）、蓋の摘部（21）、脚部あるいは台部（23）の可能性もあるが、不明な点が多く当資料に含めた。文様には沈線文（21・23）、繩文原体側面圧痕文（22）、刺突文（20・23）がある。

第三群土器（第32～34図、図版34）

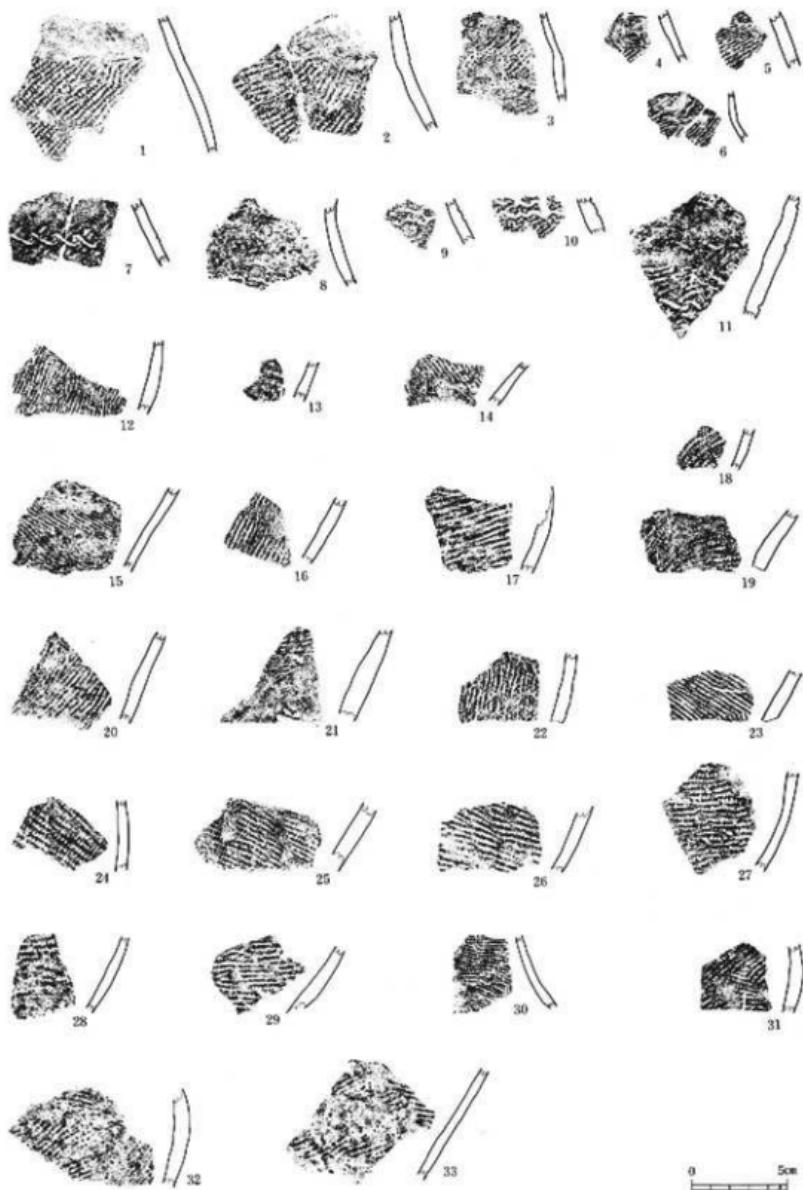
第Ⅰ・Ⅱ群以外の主として地文のみのもの、無文のみのものを第三群土器とした。所属形式決定要素に欠けるものであるが、第Ⅰ群土器と第Ⅱ群土器の出土量を比較した場合、これらの大部分は、第Ⅱ群土器と同時期のものと考えられる。8層の各細分層から粗密なく多量に出土しており、合計4,533点を数える。8層以外からは1241点出土している。

全て破片資料で、全体の器形が判るものはない。



団番号	目録番号	出土地名	層位	器種	式	文 带			病	分類	図版番号
						外	中	内			
1	B-150	A-6	R e	甕	口縁	口縁:4周	口沿:横波し足+1足?	内:無	刺突	直	34-7
2	B-148	A-2	R c	甕	口縁+身上手	口縁:4周	口沿:横波・筋波・縫合・横波し足	内:無	刺突	直	34-8
3	B-149	D-2	S c	甕	口縁	口縁:4周	口沿:横波し足	内:無	刺突	小波状切端	34-9
4	B-152	A-2	B b	甕?	口縁	口縁:4周	口沿:横波し足	内:無	刺突	直	34-11
5	B-153	S T 1	胎C	甕	口縁+身上手	口縁:4周	口沿:横波し足	内:無	刺突	直	34-10
6	B-204	B-2	S b	甕?	口縁	口縁:4周	口沿:無	内:無	刺突	直	31-12

第32図 第三群土器1



第33図 第Ⅲ類土器 2

0 5cm

回数	登録番号	出土地区	層位	計	文 種		調査		書 手	分類	記載番号
					所	面	内	面			
33-1	B-705	A-2	手	横一様上平	縦文(横置+手)	体	横位L.R繩文		横位ナゾ	地文地界部段	■
33-2	B-710	C-2	手	横一様上平	縦文(アサリ)	体	横位L.R繩文		横位ナゾ	地文地界部段	■
33-3	B-706	A-6	手	横一様上平	縦文	体	横位L.R繩文		ナゾ	地文境界部段	■
33-4	B-709	A-3	手	横一様上平	縦文(アサリ?)	体	横位L.R繩文		調査不明	地文境界部段	■
33-5	B-707	A-2	手	横一様上平	縦文	体	横位L.R繩文		調査不明	地文境界部段	■
33-6	B-708	B-2	手	横一様上平	縦文	体	横位L.R繩文		調査不明	地文境界部段	■
33-7	B-711	B-5	手	横一様上平	縦文	体	横位L.R繩文		調査不明	地文境界部段	■
33-8	B-713	B-4	手	横一様上平	縦文	体	横位L.R繩文		調査不明	地文境界部段	■
33-9	B-703	A-3	手	横一様上平	縦文(横位+横置+アサリ)	体	土器:縦文(L.R繩文)		高い横位+ガル	■	
33-10	B-704	S-1	手	横一様上平	縦文	体	横位L.R繩文	(2面)	調査不明	■	
33-11	B-701	B-4	手	横一様上平	縦文	体	横位L.R繩文	(2面)	調査不明	■	
33-12	B-727	C-7	手	横一様上平	縦文	体	横位L.R繩文	(2面)	調査不明	■	
33-13	B-720	A-1	手	横一様上平	縦文	体	横位L.R繩文	(2面)	調査不明	■	
33-14	B-721	B-7	手	横一様上平	縦文	体	横位L.R繩文		調査不明	■	
33-15	B-725	A-2	手	分	縦位R繩文				調査不明	■	
33-16	B-726	B-2	手	分	縦位R繩文				調査不明	■	
33-17	B-724	A-1	手	分	縦位R繩文				調査不明	■	
33-18	B-732	D-4	手	分	横位L.R-2K(第一種)	付加条繩文			調査不明	■	
33-19	B-727	A-3	手	分	横位L.R-R(第二種)	付加条繩文			調査不明	■	
33-20	B-730	A-7	手	分	横位L.R-2K(第三種)	付加条繩文			調査不明	■	
33-21	B-740	A-7	手	分	横位L.R-2K(第四種)	付加条繩文			調査不明	■	
33-22	B-721	D-4	手	分	横位L.R-2K(第五種)	付加条繩文			調査不明	■	
33-23	B-720	B-2	手	分	横位L.R				調査不明	■	
33-24	B-752	B-2	手	分	横位L.R繩文				調査不明	■	
33-25	B-752	A-2	手	分	横位L.R繩文				調査不明	■	
33-26	B-751	A-3	手	分	横位L.R繩文				調査不明	■	
33-27	B-756	C-2	手	分	横位L.R繩文				調査不明	■	
33-28	B-757	A-6	手	分	横位L.R繩文				調査不明	■	
33-29	B-755	B-3	手	分	横位L.R繩文				調査不明	■	
33-30	B-746	B-3	手	分	横位+横位L.R繩文				調査不明	■	
33-31	B-750	A-1	手	分	横位+横位L.R繩文				調査不明	■	
33-32	B-747	A-4	手	分	横位+横位L.R繩文				調査不明	■	
33-33	B-751	A-7	手	分	横位+横位L.R繩文				調査不明	■	

口縁部資料（第32図）

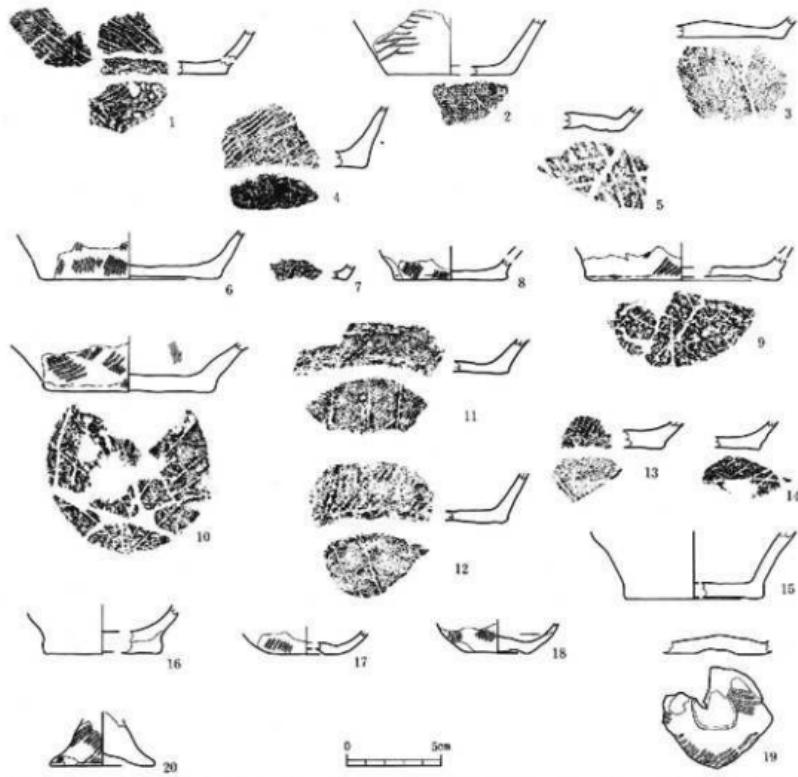
8層からは38点、それ以外からは16点出土している。これらの多くは単純口縁の甕と考えられるが、上半資料中には第Ⅱ群土器の口縁部資料を含む可能性もある。

器形には外反するものと、内湾するものが認められる。この内、内湾するものは少ない。外反するものの多くは、外面に地文をもつもので、これらは甕と考えられる（1～5）。これらには、口縁部から体部まで連続して地文が施されるものと、頸部に無文帯をもつもの（4・5）がある。その他には、外面が無文で内面に斜行繩文を施文するもの（6）もある。地文には斜行繩文の他、僅かに付加条繩文のもの（1）が認められる。

体部資料（第33図）

頸部を含む資料で、8層より4,352点、それ以外より1,194点出土している。この内、地文のみのものは8層では1403点、それ以外では374点である。地文には斜行繩文、付加条繩文、燃糸文がある。8層出土の地文の種類が明確な資料371点では、斜行繩文が91%、付加条繩文が8%、燃糸文が1%で、斜行繩文が主体的な地文を占めている。

斜行繩文は殆どが単節のL.Rのものであるが、R.L（13・14）や無節のR（15）・L（16）



番号	登録番号	出土地名	類別	器種	状況	寸	文 備 一 般 素			著者	分類	因縁番号
							厚	幅	内面			
1	H-820	C-1	e-a	体下平~延	(7.6)	6.6	平底	無	無	調査不明	重	—
2	H-821	B-4	磚砂	体下平~延	(6.6)	6.6	中厚	無	無	無	重	34-13
3	H-821	A-7	e-b	体下平~延	(6.2)	6.2	中厚	無	無	調査不明	重	—
4	H-821	C-6	e-c	体下平~延	(7.9)	7.9	中厚	無	無	調査不明	重	—
5	H-817	B-3	e-e	体下平~延	(9.5)	9.5	中厚	無	無	調査不明	重	—
6	H-802	C-4	e-c	体下平~延	9.6	9.6	中厚	無	無	調査不明	重	—
7	H-813	A-7	e-a	体下平~延	(2.5)	2.5	中厚	無	無	調査不明	重	—
8	B-861	B-4	e-b	体下平~延	6.1	6.1	突り出し	平底	無	調査不明	重	—
9	B-860	B-4	e-c	体下平~延	(10.2)	10.2	側刃出し	中厚	無	調査不明	重	—
10	B-860	C-1	e-c	体下平~延	6.8	6.8	側刃出し	中厚	無	調査不明	重	—
11	B-818	A-3	e-a	体下平~延	(7.4)	7.4	側刃出し	中厚	無	調査不明	重	—
12	B-814	B-1	e-b	体下平~延	(9.8)	9.8	側刃出し	中厚	無	調査不明	重	—
13	B-815	A-5	e-b	体下平~延	(6.7)	6.7	側刃出し	中厚	無	調査不明	重	—
14	B-819	A-6	e-b	体下平~延	(6.6)	6.6	側刃出し	中厚	無	調査不明	重	—
15	B-865	D-1	e-c	体下平~延	8.1	8.1	側刃	中厚	無	調査不明	重	—
16	B-808	B-5	e-b	体下平~延	6.2	6.2	側刃	中厚	無	調査不明	重	—
17	B-819	A-2	e-b	体下平~延	(3.8)	3.8	上延	無	無	調査不明	重	34-14
18	B-811	A-2	e-b	体下平~延	3.2	3.2	上延	無	無	調査不明	重	34-16
19	B-823	B-3	e-a	体	(4.5)	—	上延	無	無	調査不明	重	34-15
20	B-901	A-3	e-c	体	(5.5)	—	側刃	中厚	無	調査不明	重	34-17

第34図 第III群土器3

のものも僅かに認められる。また、単節のものには、綾格文を施文の上端や施文中に1条あるいは2条以上巡らすもの（7～11）や燃りに0段多条のもの（12）、前段の燃り戻しのものがみられる。付加条縄文は全て第一種のもので、LR+R（18）とLR+2R（17・19・20）のものが認められる。燃糸文は全てR（21～23）である。

これらの地文の内、斜行縄文と付加条縄文の条は横位回転による斜走のものが主であるが、縦位回転による斜走のもの（24～26）、斜位回転による横走のもの（27～29）のほか、一定方向の条にならないもの（30～33）もある。ただし、縦走のみのものや、一定幅で条方向を変えたものは認められなかった。燃糸文の条には、斜走・縦走・横走の各種のものがみられる。

底部資料（第34図1～19）

8層からは142点、それ以外からは31点出土している。底部の器形は平底あるいはやや上げ底状になるもの（1～16）と外面中央が窪む強い上げ底のもの（17～19）がある。体部末端の器形には外側にやや張り出すもの（8～14）や、やや膨らむもの（15・16）もみられる。底部外面は無文か木葉痕のものが多いが、布目痕（2）、斜行縄文（3・19）や燃糸文（1）施文のものが僅かながら認められる。

脚部資料（第34図20）

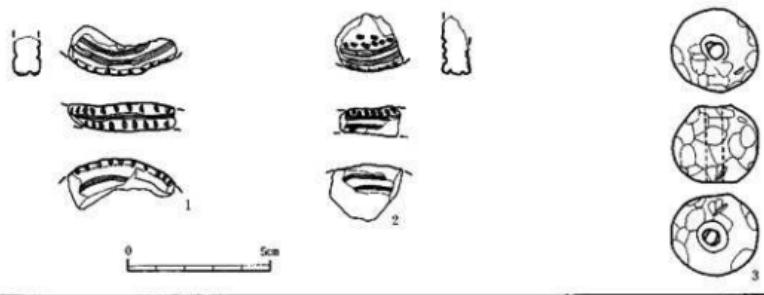
8層から1点出土したのみである。小形のもので、裾部はやや外反するが、大きく広がらないものである。外面には、横位LR縄文が粗く施文されている。蓋の摘部の可能性もある。

ii 土製品（第35図、図版34）

8層より2点、それ以外より1点の合計3点出土したのみである。内訳は紡錘車が2点に土玉が1点である。紡錘車（1・2）はともに小破片資料で、中央孔部分は欠失している。いずれも外径5cm前後、厚さ1cm程度の偏平なものと考えられる。1・2ともほんの同様な文様が加えられており、上下面の外側には2条の同心円状の沈線文を巡らし、その内側には刺突文（2）、側面には中央に1条（1）あるいは2条（2）の沈線文を巡らし、その外側の縁辺に刻目を加えている。土玉（3）はほぼ完形のものである。径3cm程度の球形のもので、中央には径5mmの貫通孔が加えられている。なお、土玉は8a層上部からの出土で、上層からの混入も考えられ、他の時代に属する可能性もある。

iii. 石器（第36～38図、図版35・36）

接合後の資料数は、8層より202点、それ以外より56点の合計258点である。この内、チップ



第35図 土製品

を含めた剥片は135点で、ほぼ半数を占める。

石材には、石英安山岩、頁岩、黒曜石、鉄石英、安山岩などがあり、剥片石器では、石英安山岩が60%以上を占める。器種には、石鎌、尖頭器、石錐、不定形石器、二次加工のある剥片、微細剥離痕を有する剥片、石核、磨石がある（表10）。

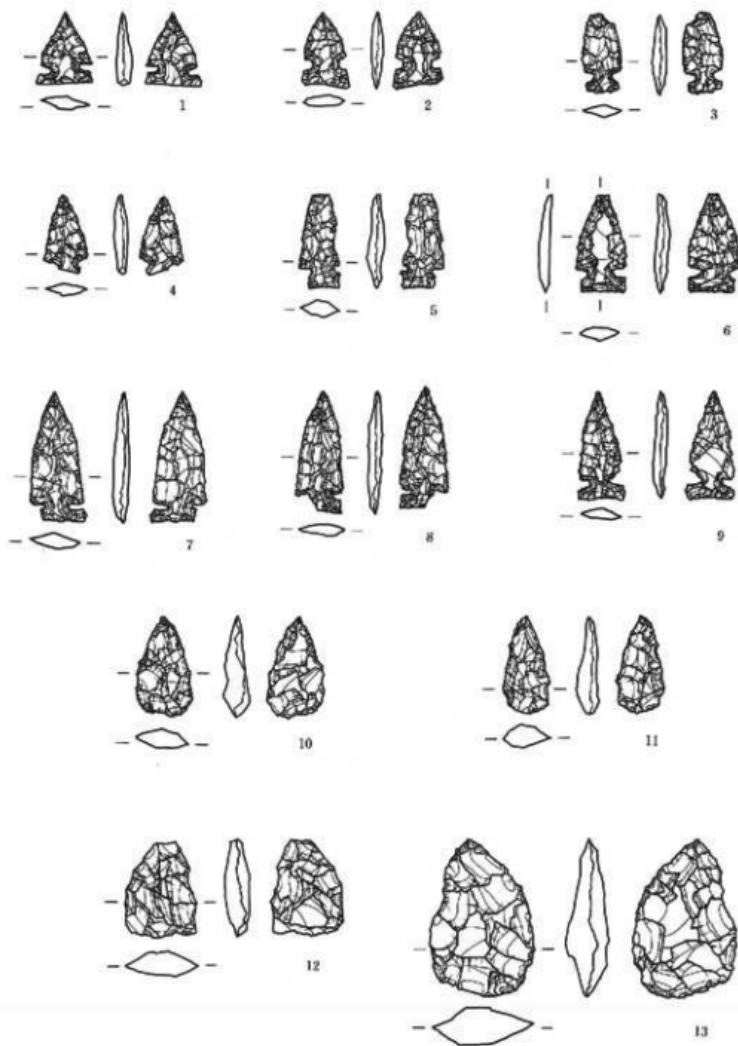
石鎌には、アメリカ式石鎌のものと（第36図1～9）、基部が平坦なもの（第36図10～12）や円状のものなどがある。石錐には、基部を有するものと（第37図1・3）、基部を有しないもの（第37図2）がある。不定形石器は5点出土したが、これらは全て「側面観がジグザクな刃部を有するもの」（第37図4～6）である。石核には縫素材のもの（第37図7）と剥片素材のものが各1点出土している。磨石には、円盤を使用したやや大形のものと（第38図2）と小形のもの（第38図3）などがある。

註1：石英安山岩として分類したものには、シリカ含有量72%以上と判断される流紋岩や石英安山岩質凝灰岩も含まれる。

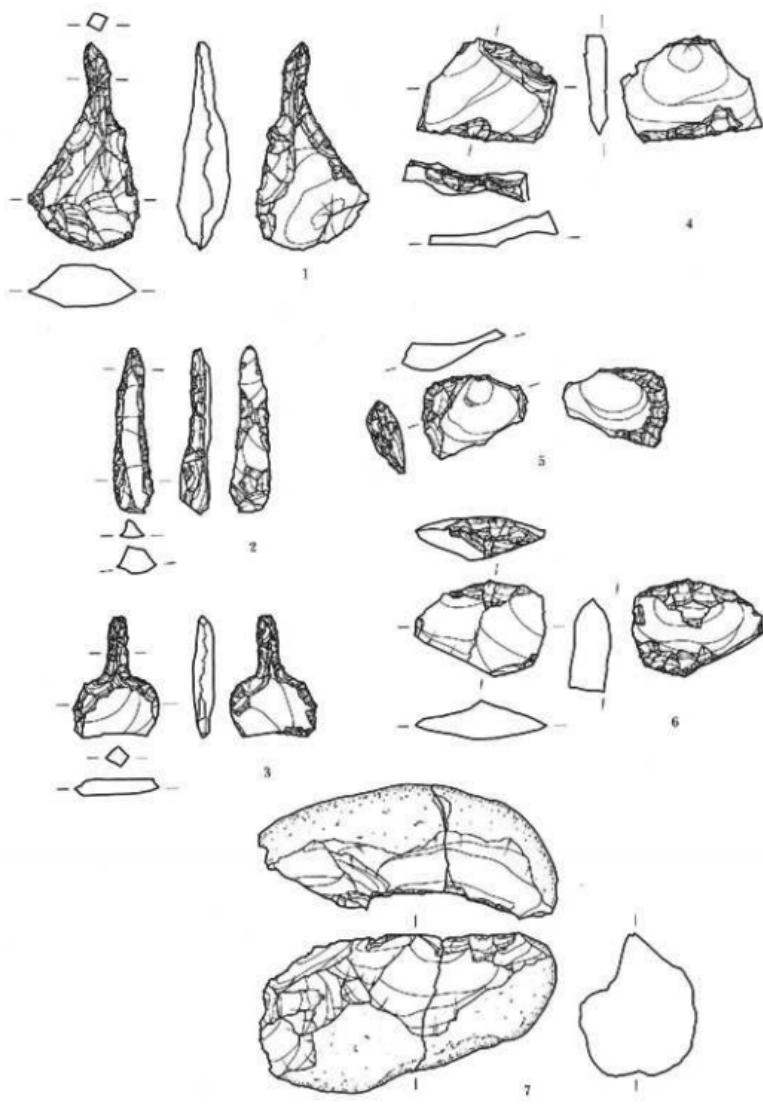
註2：不定形石器の分類基準に関しては、「聖山」（阿丁島香：1979）を使用した。

表10 弥生時代に属する石器の器種と石材点数

石種	石 鎌		火 灰 岩	石 锥	不 定 形 石 器	二 次 加 工	表 目 判 断 表 を有する割合	規 格	石 核			合 计
	アメリカ式	その他の										
石英安山岩	9	19	6	5	3	36	10	87	2			162
頁 岩	1	2	1	2	20	6	7					39
黒 曜 石		1			1	2	3					9
鉄 石 英					3	1	0					16
安 山 岩									2			2
そ の 他				1	5	2	36		1			25
合 计	10	22	7	6	5	47	21	129	2	2		246

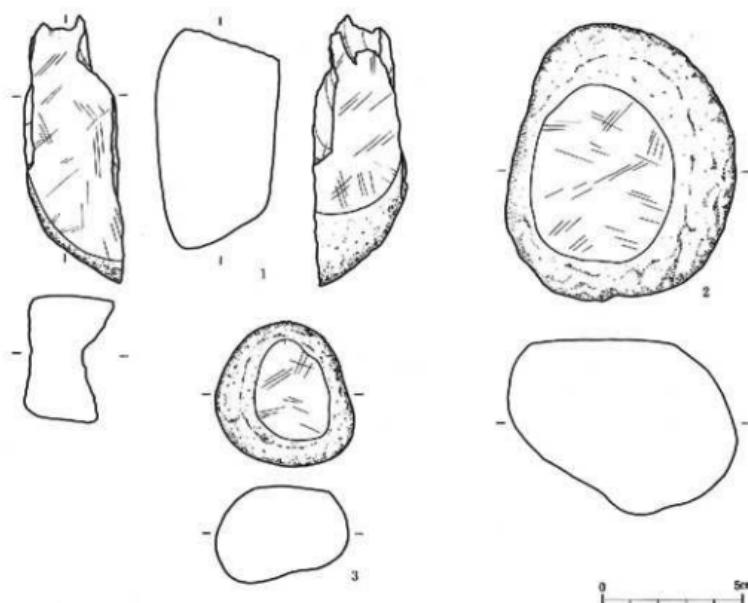


第36図 石器1



0 1cm

第37図 石器2



工具番号	整理番号	出土地名	部位	特徴	最大部厚	最大部幅	厚さ	重さ	石材	特徴	備考	工具番号
36-1	K-1	B-4	7b	アメカ式石器	1.95	1.5	0.4	0.7	石英安山岩	左側斜欠損		35-1
36-2	K-2	A-5	8c	アメカ式石器	2.1	1.3	0.35	0.7	石英安山岩			35-2
36-3	K-3	A-2	5b	アメカ式石器	2.1	1.95	0.4	0.7	石英安山岩	先端欠損		35-3
36-4	K-4	B-2	8b	アメカ式石器	2.1	1.35	0.35	0.6	石英	基部欠損		35-4
36-5	K-5	B-3	8a	アメカ式石器	2.5	1.1	0.5	0.9	石英安山岩	先端・基部・側縁欠損		35-5
36-6	K-6	A-3	8b	アメカ式石器	2.6	1.4	0.45	1.1	石英安山岩	先端欠損		35-6
36-7	K-7	A-1	8c	アメカ式石器	3.5	1.5	0.5	1.7	石英安山岩	基部欠損		35-7
36-8	K-8	D-3	8a	アメカ式石器	3.25	1.25	0.4	1.1	石英安山岩	基部欠損		35-8
36-9	K-9	B-2	8b	アメカ式石器	2.9	1.3	0.4	0.9	石英安山岩	右側斜欠損		35-9
36-10	K-10	S-11	種2	G縫	2.7	1.5	0.7	2.0	黒曜石			35-10
36-11	K-11	D-7	6c	G縫	2.45	1.3	0.6	1.6	石英安山岩			35-11
36-12	K-12	B-6	8c	G縫	2.6	9.0	0.7	3.0	石英安山岩	先端欠損		35-12
36-13	K-13	A-6	8c	尖端磨	4.2	2.8	1.2	8.9	石英安山岩			35-13
37-1	K-14	A-4	8a	G縫	5.5	9.0	1.8	12.4	黒曜			35-14
37-2	K-15	S-11	麻痺	石座	4.4	1.1	0.8	3.1	石英安山岩			35-15
37-3	K-16	A-2	8a	G縫	3.2	3.3	0.6	3.0	石英安山岩	基部欠損		35-16
37-4	K-17	B-1	8b	不定形石器	3.9	3.15	1.0	6.9	石英	交叉彫削痕の左部をもつ		35-17
37-5	K-18	A-4	7b	不定形石器	3.9	2.7	0.8	5.4	石英安山岩	交叉彫削痕の左部をもつ		35-18
37-6	K-19	B-4	8b	不定形石器	3.3	2.35	1.2	8.3	石英安山岩	交叉彫削痕の右部をもつ		35-19
37-7	K-20	A-1	8b	石核	8.1	4.5	3.1	10.8	石英安山岩	横刃材。3つに割れた状態で出土		36-1
38-1	K-20	C-2	8b	石核	9.5	3.5	4.3	180.0	ルルンゴルス	縦面2面で擦痕方向は平行		36-2
38-2	K-21	C-2	8b	石核	9.9	8.15	6.5	240.0	安山岩	縦面2面で擦痕方向は平行		36-3
38-3	K-22	B-2	8c	石核	5.5	4.95	3.4	120.0	安山岩	縦面2面で擦痕方向は平行		36-4

第38図 石器3

(3) 8層の性格

i. 遺物について

8層出土遺物中、土器は全て弥生時代に属し、他の時代のものを含まないことより、その他の遺物も全て弥生時代に属するものと考える。土器の内、所属型式が明らかなのは第Ⅰ群とした中期後葉の十三塚式土器と第Ⅱ群とした後期の天王山式土器である。両者の出土量では、8層全体及びその各細分層ともども、第Ⅱ群土器が圧倒的に多数を占めており、第Ⅰ群土器総数は第Ⅰ・Ⅱ群土器総数の僅か6%である（8層以外を加えた全体では5%）。また、両群土器には分布の偏りも認められない。従って、8層出土遺物は弥生時代後期の天王山式期の遺物を主体とするものであり、十三塚式期の遺物は微量な混入遺物と考えられる。

8層は分層されたが、第Ⅲ群土器の内、分類が可能であった口縁部の類別資料を8層細分層でみると、層位間の差はほとんど認められない（表8）。また、余り数量は多くないが、a・c層の出土遺物に接合関係がみられることより、細分層は土器形式内に於ける時間差を反映したものではないと考えられる。

ii. 成因について

8層出土遺物は、そのほとんどが弥生時代後期の天王山式期に属するものと考えられるが、出土遺物には以下のような特徴が上げられる。

- ・土器は、摩滅し、一括資料がなく、すべて小破片。
- ・土器と石器の分布域は同一で混在し、接合資料が極端に少ない。
- ・土器の接合資料の半数以上が2.5m以上離れ、中には、25mも離れたものもあり、同一個体がかなり広い範囲に分散している。
- ・遺物出土量は調査区の北西側が多く南東側に行くに従い少なくなる傾向が見られ、これらは地形的傾き（北西側が高い）とほぼ一致している。

以上より8層は、遺物が調査区外の北西側に位置するであろう標高の高い部分より流れて堆積した、二次堆積による天王山式期の遺物包含層と考えられる。また、8層は分層可能であったが、出土遺物との関係では時間差を抽出することができなかった。これは、同一地点の遺物が何回かに別れて運ばれ8層が形成された結果とも考えられる。

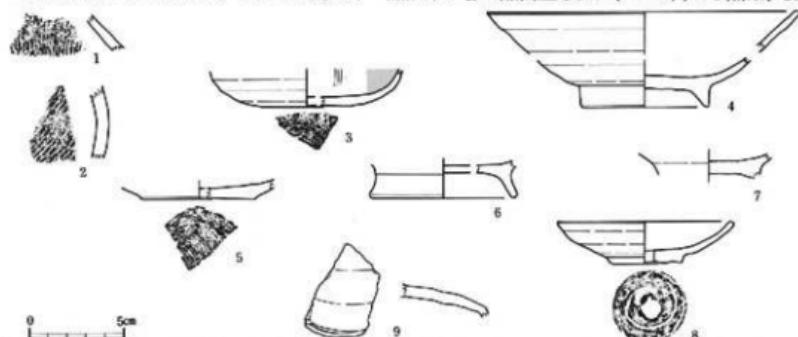
第Ⅲ章 その他の出土遺物

各造構と基本層8層以外の基本層1～6b・7a・7b・12a・12b・13b・14・15層及び噴砂からも遺物が出土している(表11)。これらのはほとんどが細かい破片資料である。この内、基本層8層からの巻き上げられたと考えられる遺物を除くと、出土量は基本層5a・5b層が90点前後、他の各基本層で50点以下と全体的に出土量は少ない。出土遺物には、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・赤焼土器・瓦・陶器・磁器・土製品・石器・鉄製品がある。陶器・磁器は、基本層1層からの出土で、基本層2層以下からは出土していない。ロクロ使用の土師器と赤焼土器は基本層6b層から上層の出土で、特に、基本層5b層から上層では両者とも激増している。両者は基本層5a・5b層ではほぼ同様な出土量を示すが、上層の基本層4層では、ロクロ使用の土師器に比べ赤焼土器の出土量が多くなる傾向が認められる。なお、ロクロ使用の土師器・赤焼土器とも、出土量が僅かであった基本層6b層出土のものは、上層からの混入の可能性がある。ロクロ不使用の土師器は基本層7b層から上層の出土で、7b層からの出土量が最も多い。基本層12a層以下になると縄文時代の土器・土製品・石器のみで他の時代のものを含まない。

1. 基本層1～7層

(1) 基本層1～4層(図版37)

図化し得たものはない。1層では陶器片・磁器片が各2点出土したが、この内の1点は、18



図版番号	登録番号	出土地区	層位	種類	特徴	形	直径	高さ	法	量	外	内	物語・備考	図版番号
1	C-6	I区	5a	土師器	変	杯	破片	—	ハケメ	—	外側有凹凸等 内側有凹凸等	—	37-6	
2	C-8	I区	5b	土師器	変	杯	破片	—	ハケメ	—	外側有凹凸等 内側有凹凸等	—	37-8	
3	C-21	I区	5b	土師器	変	杯	約1/4	底径(6.0)	ハケメ	—	外側有凹凸等 内側有凹凸等	—	—	
4	D-2	E区	5a	赤焼土器	高台付	口-瓶	約1/3	口径(6.0)、高台径(6.2)	ロクロメ	—	外側有凹凸等 内側有凹凸等	—	37-14	
5	D-5	D-7	5a	赤焼土器	高台付	口-瓶	約1/3	口径(6.7)	ロクロメ	—	外側有凹凸等 内側有凹凸等	—	—	
6	D-4	E区	5a	赤焼土器	高台付	口-瓶	約1/3	口径(7.3)	ロクロメ	—	外側有凹凸等 内側有凹凸等	—	—	
7	D-2	E区	5a	赤焼土器	高台付	口-瓶	約4/5	口径(7.3)	ロクロメ	—	外側有凹凸等 内側有凹凸等	—	37-13	
8	D-1	D-6	5b	赤焼土器	小瓶	口-瓶	口径(5.2)、底径(3.8)	高(5.3)	ロクロメ	—	外側有凹凸等 内側有凹凸等	—	37-13	
9	E-3	A-T	5b	美術器	變	杯	破片	—	ロクロメ	—	外側有凹凸等 内側有凹凸等	—	37-16	

第39図 基本層5層出土遺物

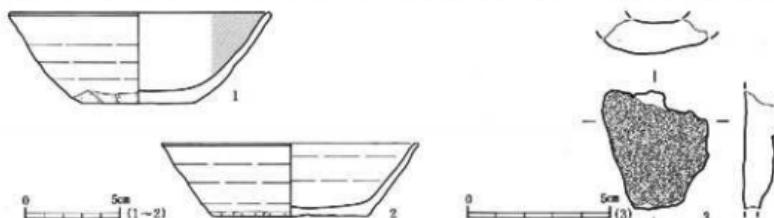
C頃の肥前産の染付碗（図版37-17）である。他は明治以降のものと考えられる。2層からは、焼成瓦の小破片が1点出土している。近世頃のものと思われる。3層は、部分的な分布で、しかも層厚が薄かったために出土遺物は少なく、僅かに土師器片が3点出土したのみであった。4層からは、赤焼土器片が25点出土している。これは、弥生土器を除いた総出土数の中では60%以上となり、主体を占めている。

(2) 基本層5層（第39図、図版37）

5a・5b層ともロクロ使用の土師器・赤焼土器の出土量が多く、5b層ではこれに加えて須恵器も多いが、その大半は細片で、一括性のある資料は少ない。ロクロ使用の土師器で図化し得たのは、5b層出土の杯1点（3）のみである。3は体部下半以下の小破片資料で、内面はヘラミガキの後、黒色処理が施されている。底部の切り離し技法は回転糸切りで、無調整である。赤焼土器は6点（4～8）が図化し得た。5a層出土のものは4～7の杯で、全て破片資料である。5～7は体部下半以下の資料で、僅かに4が口縁部まで続くものであるが、この資料にしても図上接合である。底部には高台が付くもの（4・6・7）と付かないもの（5）の両者が認められる。5b層出土のものは8の小皿1点のみである。この小皿はほぼ完形のもので、SD4の堆積土上の5b層より出土している。小皿底面には焼成前の穿孔が1孔認められる。須恵器では、図化し得たものは5b層出土の蓋の小破片資料1点（9）のみであった。なお、この他に5b層からは、鉄製品が1点出土しているが、腐食のため何であるのか不明である。

(3) 基本層6層（第40図、図版37）

6a層では比較的一括性のある土師器と須恵器の資料が各1点出土しているが、6b層のものは全て細片であった。1・2はとともにSD4堆積土上の6a層から出土している。1はロクロ使用の土師器の杯で、ほぼ1/3を欠失する。内面の調整は、ヘラミガキと考えられるが、摩



図版番号	立管番号	出土地区	層位	種類	状態	部 分	遺存度	出 土 cm	外 形	内 面	特徴・病害	回収重り
1	C-29	D-7	6a	土師器	赤	口～底	約1/3	口径14.8cm。底径5.5cm 底面に穿孔1孔。内面ヘラミガキ	ヘラミガキ 赤色処理	内面底部 内面底部	37.11	
2	E-1	C-7	6a	須恵器	赤	口～底	約1/2	口径13.4cm。底径3.1cm 底面に穿孔1孔。内面ヘラミガキ	ヘラミガキ 内面に大穴	27.15		
3	P-4	C-7	6a	土師器	赤	底	約1/2	底面に粘土付着			回収重り	

第40図 基本層6層出土遺物

減のため不明である。黒色処理が施されている。底部の切り離し技法は回転糸切りで、その後外面体部下端と底部全面に手持ちヘラケズリによる再調整が施されている。2は須恵器の杯ではほぼ1/2を失する。底部の切り離し技法は、回転ヘラ切りで、その後外面体部下端に手持ちヘラケズリによる再調整が施されている。底部にも再調整が施されているが、調整具については不明である。なお、内面には火拂が認められる。6a層からはこの他に土製品と鉄製品が各1点出土している。3は羽口の一部で、細片のため外径は不明であるが、外面全面に鉄滓が付着している。鉄製品は5b層出土のものと同様に、腐食のため識別不能であった。

(4) 基本層 7層 (第41図、図版37)

7a層からの弥生時代以外の遺物は希薄で、ロクロ不使用の土師器の細片が僅かに2点出土したのみであった。

7 b層からは、土師器片が45点出土したが、これらは全てロクロ不使用のものである。図示した1~9の土師器資料の内、1と4は部分的ではあるが器形を復元できた。1は甕で、内外面とも細かいハケメが施されている。4は壺であるが、調整は摩滅のため不明である。他のもの



図面番号	監修者番号	西日本5県 地図										内 容	件名・略名	国土地番号	
		北緯度	東経度	高さ	地図	測定度	表示	cm	方	面					
1	C-2	C-4	2 b	土居原	東	1.0倍	約14	14倍(12.4)	1:10万	アマガツナ、ハタケ、林(ハタケ)	1:10万	西日本の開拓	32-1		
2	C-10	C-3	2 b	土居原	東	1.0倍	約14	14倍(12.4)	1:10万	ハタケ	ハタケ	西日本の開拓	32-4		
3	C-12	C-3	2 b	土居原	東	1.0倍	約14	14倍(12.4)	1:10万	ヨコナガ(ハタケ)	ヨコナガ	西日本の開拓	32-3		
4	C-14	A-6	2 b	土居原	東	1.0倍	約14	14倍(12.4)	1:10万	不明	不明	西日本の開拓	32-2		
5	C-1	C-5	2 b	土居原	東	1.0倍	約14	14倍(12.4)	1:10万	ハタケ(ハタケ)、谷筋	ハタケ	西日本の開拓	32-7		
6	C-3	C-1	2 b	土居原	東	1.0倍	約14	14倍(12.4)	1:10万	ハタケ	ハタケ	西日本の開拓	32-5		
7	C-13	B-5	2 b	土居原	東	1.0倍	約14	14倍(12.4)	1:10万	ハタケ	ハタケ	西日本の開拓	32-8		
8	C-1	C-2	2 b	土居原	東	1.0倍	約14	14倍(12.4)	1:10万	ハタケ	ハタケ	西日本の開拓	32-16		
9	C-4	A-3	2 b	土居原	東	1.0倍	約14	14倍(12.4)	1:10万	ハタケ	ハタケ	西日本の開拓	32-16		
図面番号		北緯度 緯度 単位 度 分 秒 東 西 高さ 地図 測定度 表示 cm 方 面										備考		国土地番号	
10	E-20	A-6	2 b	斎場原	東	1.0倍	3.1	3.1倍(12.4)	1:10万	開拓図にあり手筋の位置を示す	1:10万	西日本の開拓	32-19		

第41圖 基本層 7 層出土遺物

のは全て小破片資料であるが、外面にはハケメが施されている。この内、5は壺か甕の体部資料であるが、外面は緻密なハケメ調整の後、丁寧なミガキが加えられている。7 b層出土土師器中には上層からの混入遺物が少量含まれる可能性もあるが、大半は1・4・5のような塗釜式期のものと考えられる。10は土製品に分類したが、破損部分が何かから剥がれたような状態を示しており、土製品以外の可能性もある。また、弥生土器と同様に8層中から巻き上げられた可能性も否定できない。

2. 基本層12~15層

(1) 基本層12層（第42図、図版25）

12 a層からは、縄文土器片2点と土製円盤1点が出土している。縄文土器は2点とも小破片上、摩滅し遺存状態が悪いが、内1点の外面には、僅かに撲糸文Rの地文が認められる。他の1点の地文等は不明である。11は、土器の体部資料を利用した土製円盤である。外面には撲糸文Rの地文が施されている。

12 b層からは、縄文土器13点と二次加工のある剥片が1点（図版25-12）出土している。縄文土器は全て小破片資料で、個体数としては7個体分である。1は深鉢の口縁部から体部上半の資料で、口縁部は波状となる。外面は沈線文が施され、文様の交点には円形の粘土留が貼付されている。内外面ともよく磨かれている。2も深鉢で、口縁部から体部上半の資料である。外面には沈線文による擦消縄文が施されている。3は浅鉢の体部上半資料で、外面は無文である。内面の口縁部付近には、太い横位沈線を4条巡らし、1つ置きの沈線間を斜位の細い沈線でうめている。内外面ともよく磨かれている。4は粗製の深鉢の口縁部から体部上半の資料である。口縁部は波状となる可能性がある。外面の地文には、横位羽状縄文が施されている。この他に体部資料が4点出土したが、地文のみのものが3点（L縄文、LR縄文、撲糸文R）、無文のものが1点であった。なお、1は後期後葉の金剛寺式、また、3は後期中葉の宝ヶ峯式に比定される。

(2) 基本層13層（第42図、図版25）

13 b層からは縄文土器3点と剥片が1点出土している。縄文土器は全て小破片で、この内1点は細片のため、部位・文様の有無については不明である。5は粗製の深鉢の口縁部から体部上半の資料で、口縁部は波状となる。外面は口縁部が無文で、以下地文の横位RL縄文となるが、その間にRL縄文原体側面圧痕文が加えられている。6は体部資料で、外面には撲糸文Lの地文が施されている。

(3) 基本層14層 (第42・43図、図版25・26)

14層からは縄文土器が6点、石核が1点、剥片が2点、礫石器が1点出土している。縄文土器は全て小破片資料である。第42図7は深鉢の体部資料である。外面にはL R縄文の地文の上に、多条の沈線で円と直線による文様が描かれている。第42図8・9はともに体部資料で、外面地文のみのもので、8は撚糸文R、9はL R縄文が施されている。第42図10は体部下端から底部の資料で、外面は無文である。他に2点出土しているがいずれも細片の上、摩滅しており文様等は不明である。なお、7は後期前葉の南境式に比定される。第43図1は小形の石核である。剥片を素材とするものであるが、一部自然面を残す。第43図2は磨石である。部分的な磨面をもつものであるが、磨面が認められた面全体が使用されていた可能性もある。

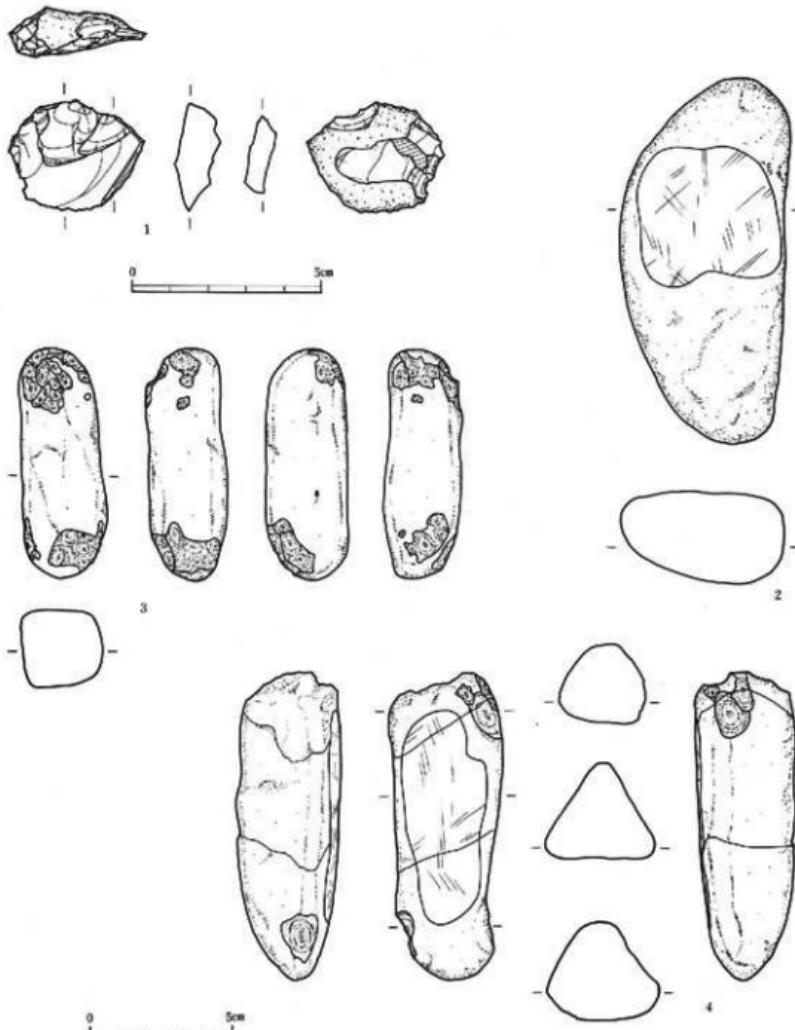
(4) 基本層15層 (第43図、図版26)

15層からは剥片1点と礫石器が2点出土している。礫石器はいずれも棒状のものである。この内、3は断面方形形状の敲石で、両端部のやや内側の部分に多数の敲打痕が認められる。4は



図版番号	出土地点	層位	地	名	特徴	式	位	遺物	cm	外	内	回数
1	A-10	B-2	泥	縄文土器	深鉢	口～底上	—	波紋文(側作底縁+側+側内斜面)→粘膜+1.5cm	—	縄文：ガラ	—	
2	A-11	B-3	12b	縄文土器	深鉢	口～底上	—	波紋L R縄文→深鉢文(横内斜面, 6cm)→1.5cm	—	縄ナブ	25-1	
3	A-9	C-3	12b	縄文土器	深鉢	底上	—	—	—	波紋文: 横内斜面(斜位屈曲)→1.5cm	25-2	
4	A-21	C-3	12b	縄文土器	深鉢	口～底上	—	波紋L RとL R(平行)：縄文	—	縄文：ガラ	25-3	
5	A-7	C-2	13b	縄文土器	深鉢	口～底上	—	波紋文と横文+底L R縫合部近縁文+1.5cm	—	1.5cm?	25-4	
6	A-8	B-2	13b	縄文土器	深鉢	口～底上	—	波紋文	—	カナ?	25-5	
7	A-1	C-2	14	縄文土器	深鉢	口	—	波紋文と横文+多孔性縫合(斜位内縫+門)	—	網目：ガラ	25-6	
8	A-2	B-2	14	縄文土器	深鉢	口	—	波紋文と横文	—	網目：ガラ	25-7	
9	A-3	B-2	14	縄文土器	深鉢	口	—	波紋文と横文	—	網目：ガラ	25-8	
10	A-4	C-2	14	縄文土器	深鉢	口下～底	—	波紋L R縫合(15.0)：縫：屈位+側位+ガラ：縫：縄文	—	側位：ガラ	—	
11	P-6	B-2	12a	土器部品	土器部品	口下部	0.1	1.0	—	—	—	25-9

第42図 基本層12-15層出土遺物



第43図 基本層12~15層出土遺物2

回収番号	発見場所	地層	名 称	最大長mm	最大幅mm	厚 mm	重 量g	存 在	特 訴・備 考	回収番号
1 K-31	C-2	14	石核	3.35	3.60	1.20	12.6	有鉋穿孔	剥離痕有。	25-11
2 K-33	B-2	14	磨石	15.00	3.40	3.40	370	塊状	磨削1面。磨削方向不明。	26-1
3 K-35	C-2	12	磨石	5.15	3.00	2.80	183	ハシケ付	上下の施錠部に敲打痕。	26-2
4 K-34	C-2	15	磨石-鉢石	19.90	4.00	3.90	280	鉢形	裏面は1面で磨削方向は不明。鉢形底は上下の施錠部のみ。	26-3

断面三角形状のもので3つに割れた状態で出土している。1面に磨面、両端部のやや内側の部分に敲打痕をもつものである。磨面と敲打痕は同一面には位置せず、しかも、敲打痕は対角線上の端部の一方にしか認められない。

表11 出土遺物総数量表

年 本 箱	萬文十郎	角生十郎	角生上郎	土 壁 砂			木板上算	木 板	瓦 瓦	鐵 鉄	錫 + 銅 基	石 片	鉛 鉛 品	合 計		
				金	銀	銅										
- 未 指																
1	1			2	3	2	1	2		2	2			15		
2		12	1			5	3	5	5	1			1	25		
3						2	1							3		
4	6					7	6	25	2					46		
5 a	6	1	3	37	13		32	5						97		
5 b	28			6	25	15	22	26				2	1	126		
S D 2	7						1					2		10		
6 a	114	27	17	6	12	2	4			1	5		1	199		
6 b	260	47	17	2	3	2	4				7			301		
6 c 屋敷用	267	41	21		26		3				6			400		
S T 1	345	49	54	1							19	2		365		
S D 3	17		1							1	1			21		
7 a	22	13	2							1				30		
7 b	228	27	45							1	22			425		
7 c	1,328									1	91			1,329		
8 b	2,344									1	85	2		2,402		
8 c	1,388									71	1			1,660		
12 a	2									1				2		
12 b	13													14		
13 b	3										1			4		
14	5									2	1			10		
15										1	2			3		
總計	28			1										27		
合 計	24	6,649	236	169	87	88	91	51	1	2	2	6	265	9	2	7,589

第IV章 分析

1. 下ノ内浦遺跡の花粉分析

守田 益宗

分析試料について

下ノ内浦遺跡では基本層 6 c 層から、その構造から畠跡と考えられる遺構が検出された。本報告は、この遺構がはたして畠であるのか、また、もしうなれば作られていた作物が何であったのかを明かにすることを目的として実施された花粉分析の結果を述べたものである。

試料は、下ノ内浦遺跡の調査区西端部から 3 地点、同中央部付近から 2 地点を選び、それぞれの地点の畠の土壤（6 c 層）と畠と畠との間のやや低くなった部分の土壤（6 c 層）の最上部、および、これらを覆う土層（6 b 層）の最下部より各 1 試料を採取した。すなわち、計 5 地点 15 試料である。試料の採取地点とその層位は第 11 図、表 12 のとおりである。

試料は KOH-ZnCl₂-Acetolysis 法を用いて処理したが、花粉・胞子を僅かしか分離できなかったので、再度 KOH-HF Acetolysis 法で処理を行なった。イネ科花粉の区別は、中村（1974）に基づいて位相差顕微鏡の観察によって行なった。

結果および考察

各試料について検出された花粉・胞子は表 13 に示したように、高木花粉 6 種類、低木花粉 5 種類、草本花粉 9 種類、シダ胞子 3 種類である。また、日本では古い時代に絶滅した植物であるスマミズキ属も検出されたが、これは明かに一度堆積した花粉化石がもっと新しい時代の堆積物に再度堆積したもの（二次堆積花粉）である。

いずれの試料も腐植が多いにもかかわらず、花粉・胞子の含量が著しく少ないうえに、検出した花粉・胞子のはほとんどは破損したものであった。筆者のこれまでの経験でも、このようなことは黒ボク土、考古学分野でしばしば使用されるところの特殊泥炭と呼ばれているある種の腐植土、および、いわゆる畠跡とよばれている遺構の土壤だけである。今回はこのうちの最後の場合にあてはまる。

Faegri & Iversen (1975) によると堆積物中の花粉・胞子含量の少ない原因是、① 元素、付近の植生の花粉生産量が少なかった。② 何らかの原因によって堆積した花粉・胞子が分解した。③ 花粉の供給量に比べ堆積物の堆積速度が大であった場合が考えられるという。我が国のような森林が発達する国土では、花粉生産量の少ない植生は考えにくい。花粉が分解された場

合、相対的に分解されにくいシダ胞子の比率が増加する傾向があるが、本分析結果ではシダ胞子はヨモギ属に次いで多い傾向が認められることから、今回の分析結果は上記②の場合にあてはまるとしてよいであろう。

また、位相差顕微鏡によるイネ科花粉の区別は、微細な植物質および珪酸質の破片が多く含まれていたため顕微鏡の視野全体がこれらによって輝き、花粉表面の微細構造が観察できず区別不能であった。

なお、ソバ属が1粒検出されている。しかし、ソバ栽培のためにわざわざ畝を作ったとも考え難く、また、1粒だけであることから、このソバ属は遺跡付近のどこかで栽培していたものから飛来したか、あるいは、裏作としてソバを栽培していたことによるものかは、判断できない。

引用文献

Faegri, K. & Iversen, J. (1975) Textbook of pollen analysis. (3rd ed.)

Munksgaard, Copenhagen.

中村純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*)を中心として、第四紀研究. 13: 187-193.

表12 花粉分析試料採取地点と試料番号

採取地点	試料番号	層 位	地 区	備 考
第1地点	No101	6 b 層	B - 5 Grid	畠の上
	No102	6 c 層	B - 5 Grid	畠
	No103	6 c 層	B - 5 Grid	畠間
第2地点	No104	6 b 層	C - 5 Grid	畠の上
	No105	6 c 層	C - 5 Grid	畠
	No106	6 c 層	C - 5 Grid	畠間
第3地点	No107	6 b 層	D - 1 Grid	畠の上
	No108	6 c 層	D - 1 Grid	畠
	No109	6 c 層	D - 1 Grid	畠間
第4地点	No110	6 b 層	C - 1 Grid	畠間の上
	No111	6 c 層	D - 1 Grid	畠
	No112	6 c 層	C - 1 Grid	畠間
第5地点	No113	6 b 層	C - 1 Grid	畠間の上
	No114	6 c 層	C - 1 Grid	畠
	No115	6 c 層	C - 1 Grid	畠間

表13 下ノ内港遺跡花粉分析結果

学名	和名	試料10	102	103	104	105	106	107	108	109	110	111	112	113	114	115
<i>Pinus</i>	マツ属	2	1							1				1	1	
<i>Cyprionera</i>	スギ属															
<i>Juglans</i>	クルミ属							1	1							
<i>Betula</i>	シラカシ属															
<i>Fagus</i>	ゾウ属							1	2						2	1
<i>Quercus</i>	コナラ属			3					2					1		
<i>Corylus</i>	ハシヅメ科属							1								
<i>Aulus</i>	ハシヅメ科属	8	2		2				3		1	1	3		1	
<i>Hed</i>	モクノキ属						1									
<i>Vitis</i>	ブドウ属															
<i>Syndios</i>	ハイノキ属									1		1				
<i>Gramineae</i>	イネ科															
<i>Moraceae</i>	タリ科									2		2			2	
<i>Rutaceae</i>	ソバ科															
<i>Perisaria</i>	サツエキテ属									1						
<i>Thalictrum</i>	カラマツソ属														2	
<i>Cruciferae</i>	アブラナ科									1						
<i>Umbelliferae</i>	ゼリ科										1					
<i>Artemisia</i>	アセビ属 他のキク科属	12	47	1	3	2	1	15	11	6	17	2	7	14	1	6
other Caryophyllaceae										1	1		2		2	
1 late type FS	单条型シダ孢子	7	4	1	2	3	13	7	9	3	10	6	12	9	9	5
3 late type FS	「条带型」シダ孢子						2		1		1	1	2		2	1
Ophioglossaceae	ハチヌク科									1						
Trees	高木類															
Shrubs	低木類															
Herbs	草本花粉															
Ferns	シダ孢子															
Unknown	不明	6	4	1						1	2	1	3	2	6	2
Nysta	ヌツカ属												1	1		

2. 仙台市、下ノ内浦遺跡（第4次調査）におけるプラント・オパール分析

古環境研究所

1. はじめに

下ノ内浦遺跡第4次調査では、発掘調査において水田層と見られる土層や畠跡と見られる畠状構造が検出されていた。この調査は、プラント・オパール分析を用いて、これらの遺構におけるイネ科栽培植物の検討とその他の層における種作跡の探査を行ったものである。

2. 試料

試料は、遺跡の調査担当者によって採取され、当研究所に送付されたものである。なお、採取にあたっては容量50cm³の採土管が用いられた。第3図に、分析試料の採取箇所を示す。

3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）」をもとに、次の手順で行った。

- (1) 試料上の絶乾（105°C・24時間）、仮比重測定
- (2) 試料上約1gを秤量、ガラスピース添加（直径約40μm、約0.02g）
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- (3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- (4) 超音波による分散（300W・42KHz・10分間）
- (5) 沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥
- (6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
- (7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピース個数が300以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピース個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピース個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： 10^{-5} g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、タケア科はゴキダケの値を用いた。その値は、それぞれ2.94（種

実重は1.03)、6.31、0.48である(杉山・藤原、1987)。

4. 分析結果

プラント・オバール分析の結果を表14および第44・45・46図に示す。なお、農耕跡の検証および探査が主目的であるため、同定および定量は、イネ、ヨシ属、タケア科、ウンクサ族、キビ族の主要な5分類群に限定した。図版38・39に各分類群の顕微鏡写真を示す。

5. 考察

プラント・オバール分析で同定される分類群のうち、栽培植物が含まれるものには、イネをはじめ、キビ族(ヒエやアワ、キビなどが含まれる)やジュズダマ属(ハトムギが含まれる)などがある。このうち、本遺跡の試料からはイネが検出された。

通常、稻作跡の検証や探査を行う場合、イネのプラント・オバールが試料1gあたりおよそ5,000個以上と多量に検出された場合に、そこで稻作が行われていた可能性が高いと判断している。ただし、仙台市内の遺跡では、これまでの調査の結果、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出されていることから、ここでは判断の基準となる値を3,000個/gとした。なお、当該層にプラント・オバール密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考え難くなり、その層で稻作が行われていた可能性はより確実なものとなる。この判断基準にもとづいて検討を行い、稻作の可能性を3段階に区分して表15に示した。

水田の可能性が考えられていた5b層では、No.1地点の試料について分析を行った。その結果、イネのプラント・オバールが5,200個/gと高い密度で検出された。したがって、同層で稻作が行われていた可能性は高いと考えられる。

畝状遺構が検出されていた6c層では、No.1～No.4地点の試料について分析を行った。その結果、No.1、No.2、No.4の各地点からイネのプラント・オバールが検出されたが、密度は600～1,400個/gと低い値である。したがって、同層で稻作が行われていた可能性は考えられるものの、上層や他所からの混入の危険性も否定できない。

7b層では、No.1地点とNo.2地点の試料について分析を行った。その結果、両地点においてイネのプラント・オバールが検出された。このうち、No.2地点では密度が4,800個/gと高い値であり、明瞭なピークが認められた。また、No.1地点でも密度は2,200個/gと比較的高い値であり、明瞭なピークが認められた。したがって、同層で稻作が行われていた可能性は高いと考えられる。

弥生時代後期とされる8a層と8b層では、No.1地点とNo.2地点の試料について分析を行った。その結果、すべての試料からイネのプラント・オバールが検出された。このうち、No.1地

表14 プラント・オバール分析結果

仙台市、下ノ内郷線跡 4 次

No.1 地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イ キ 個/g	(初期量) t / 10 a	ヨシ属 個/g	タケ属科 個/g	ウシクサ属 個/g	キビ属 個/g
5 b	26	19	1.08	5,200	5.77	1,700	17,400	0	0
6 a	36	6	1.07	2,100	1.36	0	6,400	0	0
6 b	42	8	0.99	1,500	1.15	2,300	12,200	0	0
6 c	50	14	0.92	1,400	1.73	700	18,400	0	0
7 a	64	4	0.92	0	0.00	2,500	10,800	0	0
7 b	68	3	0.88	2,200	0.59	700	14,400	0	0
8 a	71	6	0.91	2,800	1.55	700	12,800	0	0
8 b	77	7	0.91	1,600	1.01	1,600	14,500	800	0
8 c	84	7	0.92	0	0.00	4,800	8,000	0	0

No.2 地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イ キ 個/g	(初期量) t / 10 a	ヨシ属 個/g	タケ属科 個/g	ウシクサ属 個/g	キビ属 個/g
6 a	45	8	1.05	900	0.74	0	14,900	0	0
6 b	53	9	0.96	1,500	1.30	0	18,800	700	0
6 c	62	4	0.97	700	0.25	700	14,100	0	0
7 a	66	6	0.95	700	0.37	3,100	14,800	0	0
7 b	72	3	1.03	4,800	1.51	2,400	24,800	0	0
8 a	75	6	1.01	800	0.49	3,300	6,600	0	0
8 b	81	7	0.93	2,300	1.51	3,100	25,800	0	0
8 c	88	11	1.00	0	0.00	800	15,600	0	0
8 d	99	5	0.94	0	0.00	5,200	20,900	0	0
9	104	8	0.82	0	0.00	800	29,300	0	0
10 a	112	5	0.88	0	0.00	4,600	10,900	0	0

No.3 地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イ キ 個/g	(初期量) t / 10 a	ヨシ属 個/g	タケ属科 個/g	ウシクサ属 個/g	キビ属 個/g
6 a	27	8	1.02	1,600	1.32	800	20,800	0	0
6 b	35	5	1.02	800	0.41	1,700	29,500	1,700	0
6 c	40	7	0.91	0	0.00	800	17,500	0	0
7 a	47	12	0.89	0	0.00	1,700	17,200	0	0

No.4 地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イ キ 個/g	(初期量) t / 10 a	ヨシ属 個/g	タケ属科 個/g	ウシクサ属 個/g	キビ属 個/g
6 a	31	6	0.98	1,600	0.93	800	23,500	0	0
6 b	37	5	0.95	800	0.36	2,600	14,200	0	0
6 c	42	9	0.98	600	0.46	0	16,600	0	0
7 a	51	13	0.92	1,400	1.61	1,400	16,400	0	0

表15 各層におけるイネのプラント・オバール密度と稲作の可能性

<記号説明>

○印……3,000個／g以上（稲作の可能性大）

△印……3,000個／g未満（稲作の可能性有）

×印……検出されず

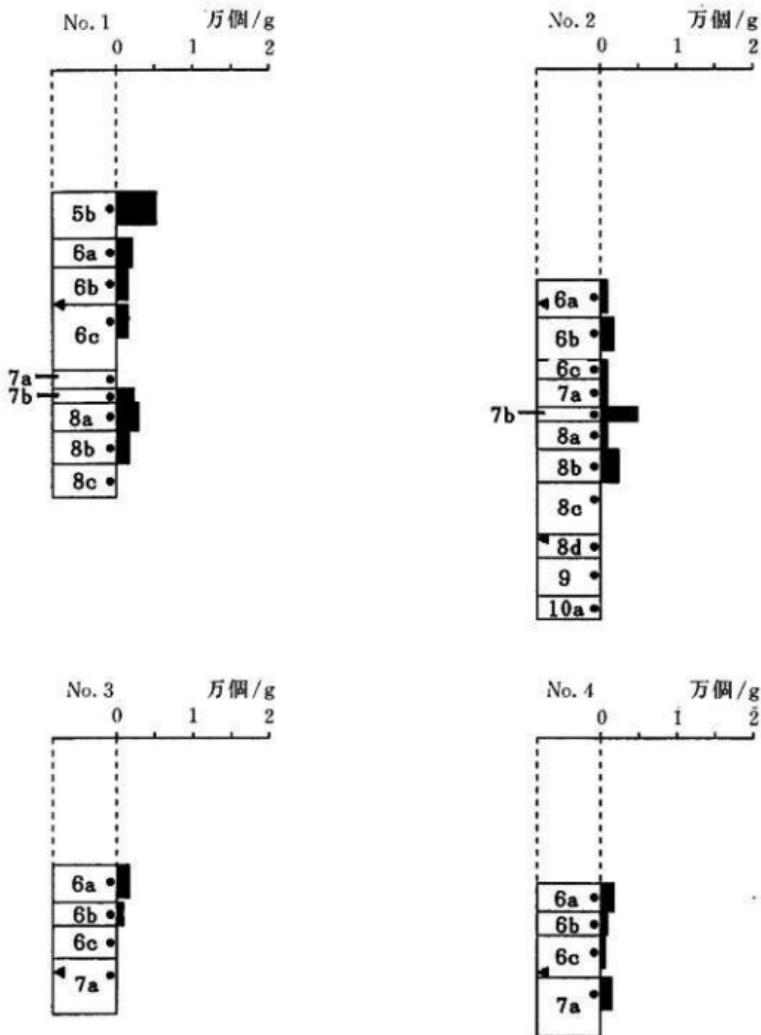
—印……試料なし

層名	No.1	No.2	No.3	No.4	備考
5 b	○	—	—	—	水田？
6 a	△	△	△	△	平安時代
6 b	△	△	△	△	
6 c	△	△	×	△	畝状遺構
7 a	×	△	×	△	古墳時代後期
7 b	△	○	—	—	
8 a	△	△	—	—	弥生時代後期
8 b	△	△	—	—	"
8 c	×	×	—	—	"
8 d	—	×	—	—	
9	—	×	—	—	
10 a	—	×	—	—	

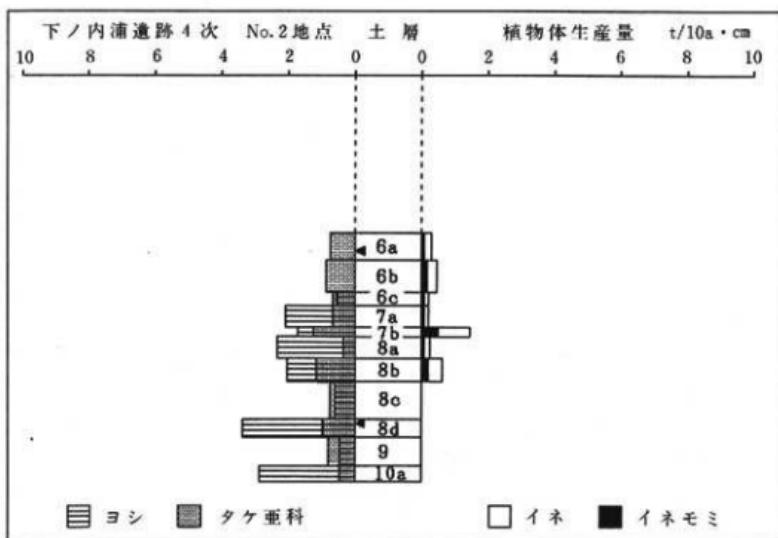
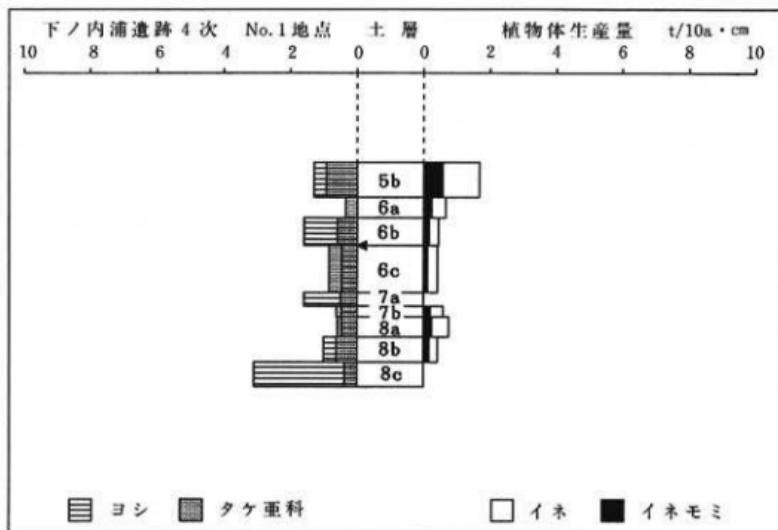
点の8 a層とNo.2点の8 b層では密度が2,800個／gおよび2,300個／gと比較的高い値であり、それぞれピークが認められた。したがって、これらの層で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。

上記以外では、平安時代とされるNo.1～No.4地点の6 a層と6 b層、古墳時代後期とされるNo.2地点とNo.4地点の7 a層などでイネのプラント・オバールが検出された。密度は700～2,100個／gといずれも低い値であることから、これらの層で稲作が行われていた可能性は考えられるものの、上層あるいは他所からの混入の危険性も否定できない。

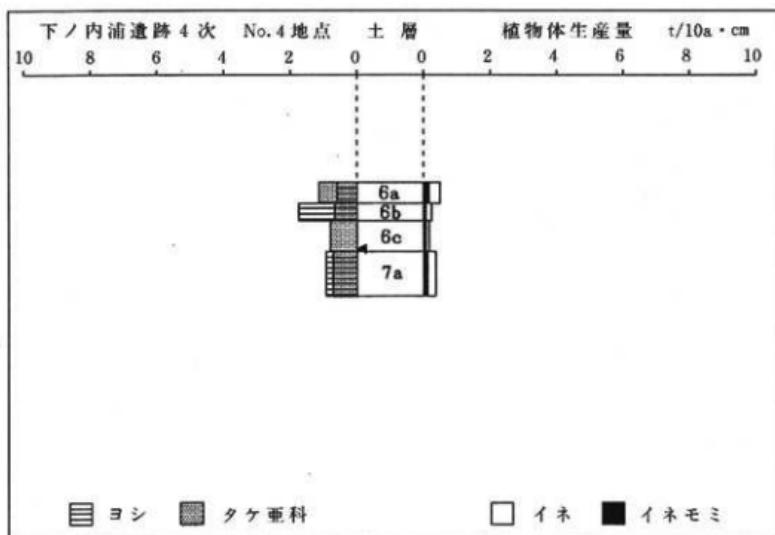
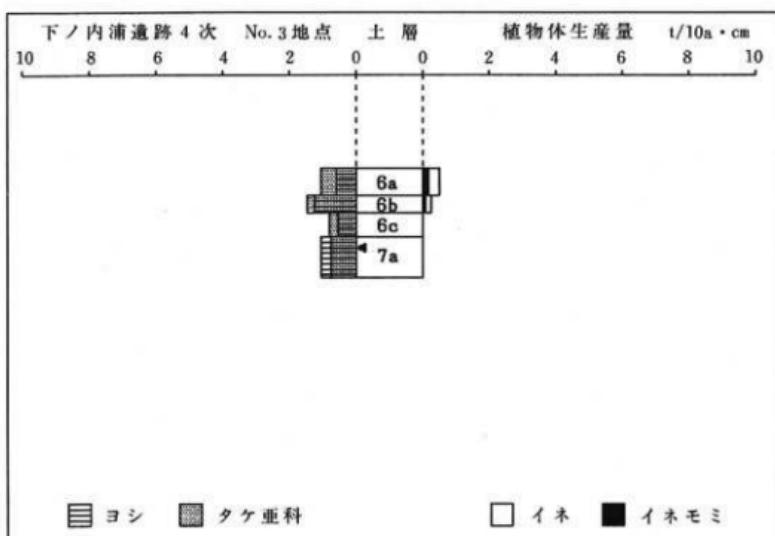
なお、8 c層より下層からはイネのプラント・オバールは検出されなかった。



第44図 イネのプラント・オバールの検出状況
(注) ◀印は50cmのスケール, ●印は分析試料の採取箇所



第45図 おもな植物の推定生産量と変遷 1
(注) ◀印は50cmのスケール



第46図 おもな植物の推定生産量と変遷 2
(注) ◀印は50cmのスケール

6.まとめ

以上のように、水田層の可能性が考えられていた5 b層では、イネのプラント・オパールが多量に検出され、同層で稻作が行われていた可能性が高いと判断された。また、弥生時代後期とされる8 a層、8 b層および7 b層でも、稻作が行われていた可能性が高いと判断された。さらに、畝状遺構が検出されていた6 c層、また6 a層、6 b層、7 a層でも稻作が行われていた可能性が認められた。なお、8 c層より下層ではイネのプラント・オパールは検出されなかった。

これらのことから、本遺跡では、弥生時代後期とされる8 b層の時期に稻作が開始され、その後も5 b層の時期までおむね継続して稻作が行われたものと推定される。なお、ヒエやアワ、キビなどの栽培種が含まれるキビ族は、いずれの試料からも検出されなかった。

【参考文献】

- 杉山真二・藤原宏志（1987）川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析、赤山一古環境編ー、川口市遺跡調査会報告、10：281-298.
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法ー、考古学と自然科学、9：15-29.
- 藤原宏志（1979）プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)－福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（*O. sativa L.*）生産総量の推定ー、考古学と自然科学、12：29-41.
- 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査ー、考古学と自然科学、17：73-85.

第V章 まとめ

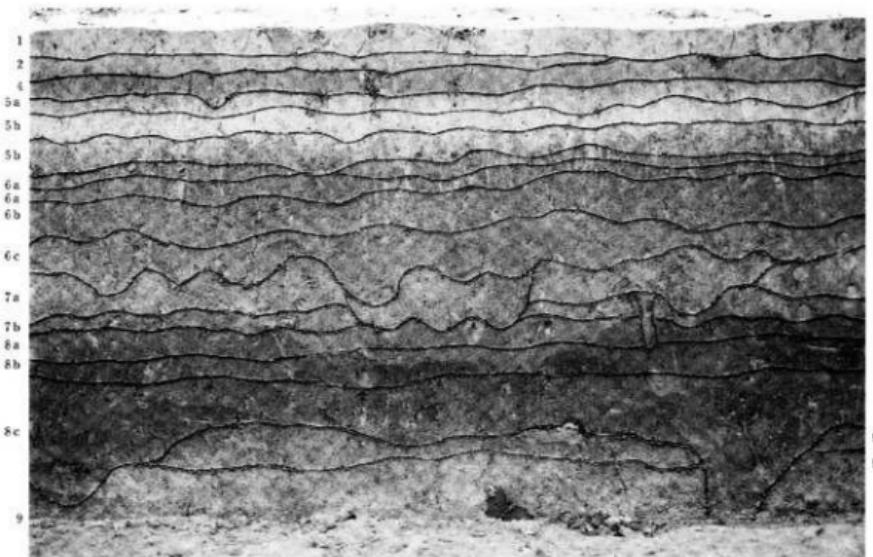
1. 検出遺構は、6a層上面で土坑3基（SK1～3）と溝跡3条（SD1～3）と小溝状遺構群が、6c層上面で6c層畠跡と溝跡1条（SD4）が、7a層上面で6c層畠跡に伴う耕作痕と住居跡1棟（SI1）と溝跡1条が検出された。さらに、遺構は検出されなかったが、8層では、弥生時代の遺物が多量に出土している。
2. 9層以下の下層調査区の調査では、12～15層からは縄文時代後期の遺物を僅かに出土するのみで、遺構は検出されなかった。なお、これより約1.5m下の20層中まで調査を実施したが、16層以下は無遺物層であった。
3. 6a層上面検出遺構の所属年代は、平安時代（灰白色火山灰降下前）と考えられる。この内、土坑と溝跡はその堆積土の類似性より同時存在の可能性がある。土坑・溝跡の性格は不明であるが、2号土坑（SK2）と3号土坑（SK3）は、底面から實際に火を焚いた痕跡が明瞭に残り、形状もほぼ同様なことより同一の性格のものと判断される。また、3号溝跡（SD3）はその方向性・堆積土より、2号溝跡（SD2）より分歧したものと考えられる。小溝状遺構群は、他の遺構と異なる時期のものであるが、その新旧関係は不明である。畠に伴う耕作痕の可能性がある。
4. 6c層畠跡の所属年代は、古墳時代後期以降、奈良時代以前と考えられる。区画溝の可能性がある4号溝跡（SD4）を伴っており、耕作土底面下の7a層上面では耕作痕が検出されている。耕作土及び耕作痕は調査区全面に認められたが、畠跡上面の畠が検出されたのは、4号溝跡の西側のみで、これらは幾つかの単位に分けられた。当畠跡では、畠と耕作痕とは、方向・間隔が異なっており、畠の形状と耕作痕とは直接的な関係をもっていないことが判った。なお、4号溝跡は、耕作痕を切っており、耕作痕が入れられた後に取り付けられている。
5. 7a層上面検出遺構の内、1号住居跡（SI1）は古墳時代後期栗団式期に属する。また、5号溝跡（SD5）は、時期決定資料には欠けるが、配置・方向性に1号住居跡と関連性が認められることより同一時期のものと考えられる。なお、1号住居跡のカマドは一方の袖を拡張しており、その際、カマド脇の貯蔵穴と考えられるピットを人為的に埋め戻し、新たに土器を埋設している。
6. 7b層の所属年代は、その直上・直下層の検出遺構、出土遺物及び7b層出土遺物の年代より古墳時代のいづれかの時期と考えられる。当層の下面には起伏が認められ、直下層のブロックを含み、イネのプラント・オバル分析では高い値を示していることより、水田上塙の可能性がある。今回の調査では、畦畔は検出されず、水田跡の有無を問うことはできなかつたが、今後の調査の検討課題としておきたい。

7. 8層は遺物出土状況及び遺物遺存状況より、調査区外の北西側に位置するであろう標高の高い部分より流れで堆積した、二次堆積による弥生時代後期天王山式期の遺物包含層と考えられる。8層はa～d層の4つの細分層に別れたが、d層を除く遺物出土層に時間差を反映するような遺物の変化は認められなかった。

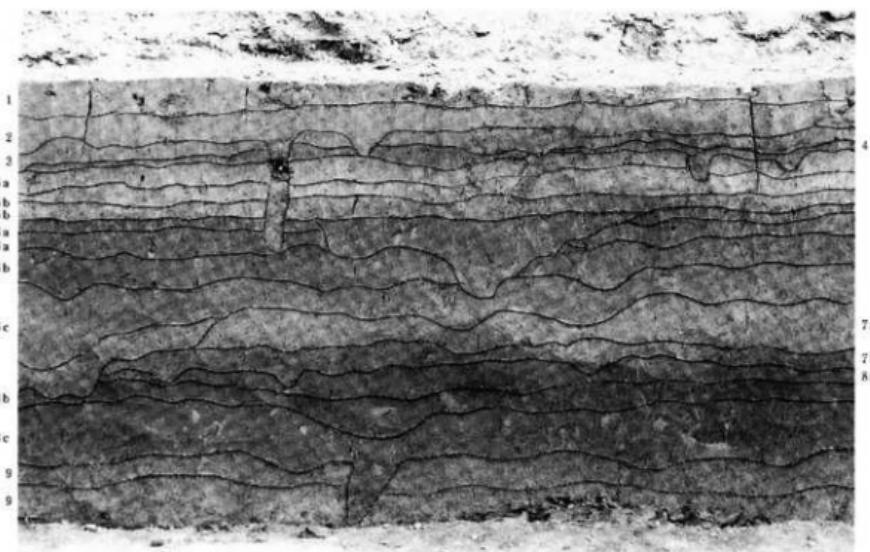
引用・参考文献

- 阿子島香 1979「第五章Ⅱ 不定形石器」『聖山－考古学資料別冊2－』東北大学文学部考古学研究会
- 大越道正他 1990「第1編 能登遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告10』福島県文化財調査報告24号
㈱福島県文化財センター
- 太田昭夫 1988「V.1. 弥生土器について」『富沢遺跡 第24次 富沢中学校地区発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第113集 仙台市教育委員会
- 太田昭夫 1991「第2章 遺跡の位置と環境」『富沢遺跡－第30次発掘調査報告書第1分冊－縄文～近世編』仙台市文化財調査報告書第149集 仙台市教育委員会
- 兼田秀安 1988『宮城県仙台市下／内浦遺跡』埋蔵文化財発掘調査研究所第10集 埋蔵文化財調査研究所
- 森野裕彦 1986「V. 富沢水田遺跡鳥居原地区33層の火山灰について」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報V』仙台市文化財調査報告書第89集 仙台市教育委員会
- 吉野裕彦 1987「第2章第2節 富沢遺跡とその周辺の歴史的環境」『富沢遺跡・富沢遺跡第15次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第98集 仙台市教育委員会
- 佐藤甲二 1984「II.3. 弥生時代の造構と遺物 土器」『山口遺跡II』仙台市文化財調査報告書第61集 仙台市教育委員会
- 庄子貞雄・山田一郎 1980「宮城県北部に分布する灰白色火山灰について」『多賀城跡－昭和54年度発掘調査概報－』宮城県多賀城跡研究所
- 白島良一 1980「多賀城跡出土土器の変遷」『宮城県多賀城跡調査研究所研究紀要』宮城県多賀城跡研究
- 坪井清足 1953「福島県天王山遺跡の弥生式土器－東日本弥生式文化の性格－」『史林』3-1
- 豊島正幸 1987「第2章第1節 富沢遺跡周辺の地形と土地条件の変遷」『富沢遺跡・富沢遺跡第15次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第98集 仙台市教育委員会
- 成瀬 茂・吉岡恭平 1984「V. 下ノ内浦遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報III』仙台市文化財調査報告書第69集 仙台市教育委員会
- 柳沢みどり・金森安孝 1983「下ノ内浦遺跡」仙台市文化財調査報告書第59集 仙台市教育委員会
- 弥生時代研究会 1989「天王山式期をめぐって」の検討会資料
- 吉岡恭平 1985「V. 下ノ内浦遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報V』仙台市文化財調査報告書第82集 仙台市教育委員会
- 渡部 紀 1988「下ノ内浦遺跡～みやぎ生活協同組合店舗建設に伴う発掘調査報告書－」仙台市文化財調査報告書第115集 仙台市教育委員会

写 真 図 版

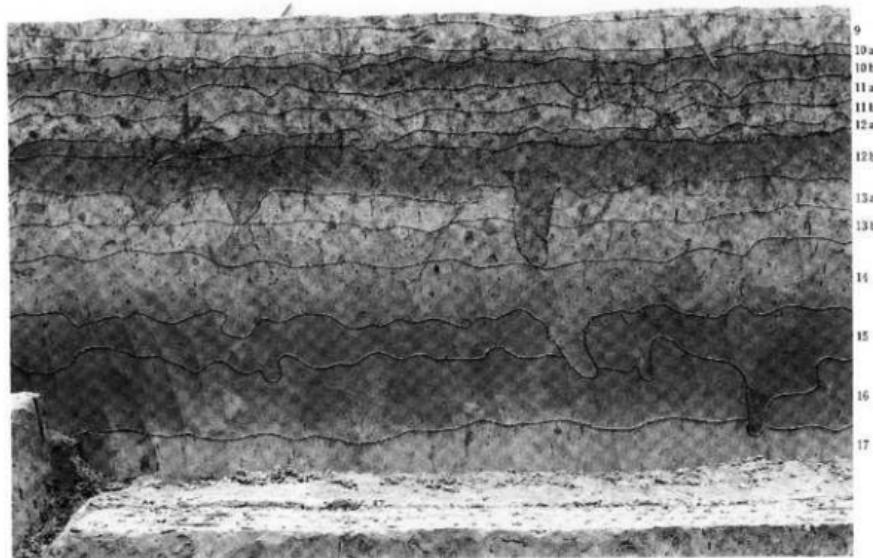


1. I区調査区南壁 (E05ライン付近)

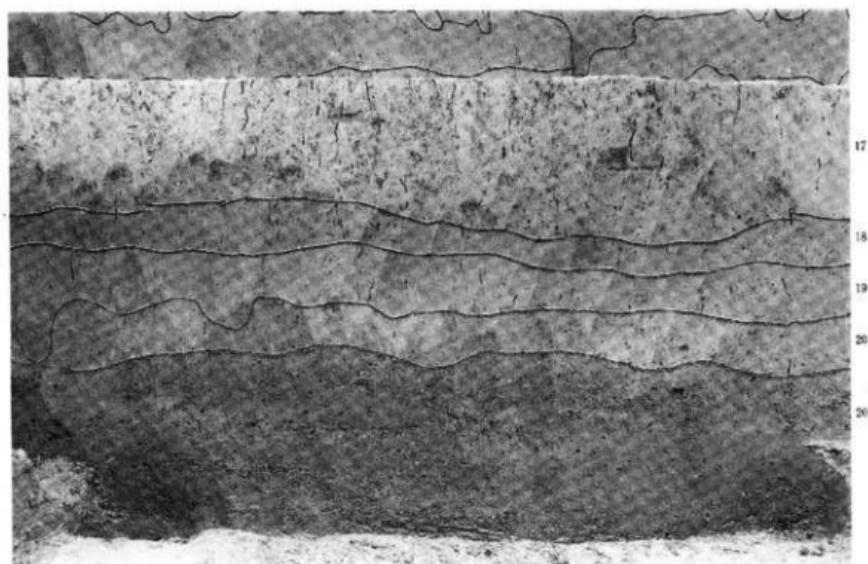


2. I区調査区南壁 (E15ライン付近)

図版1 基本層序

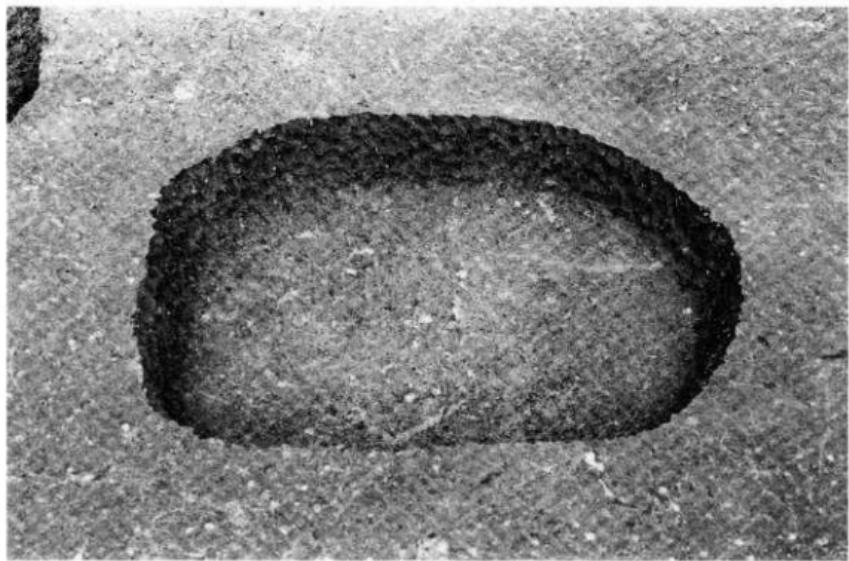


1. 西壁上層 (S09ライン付近)

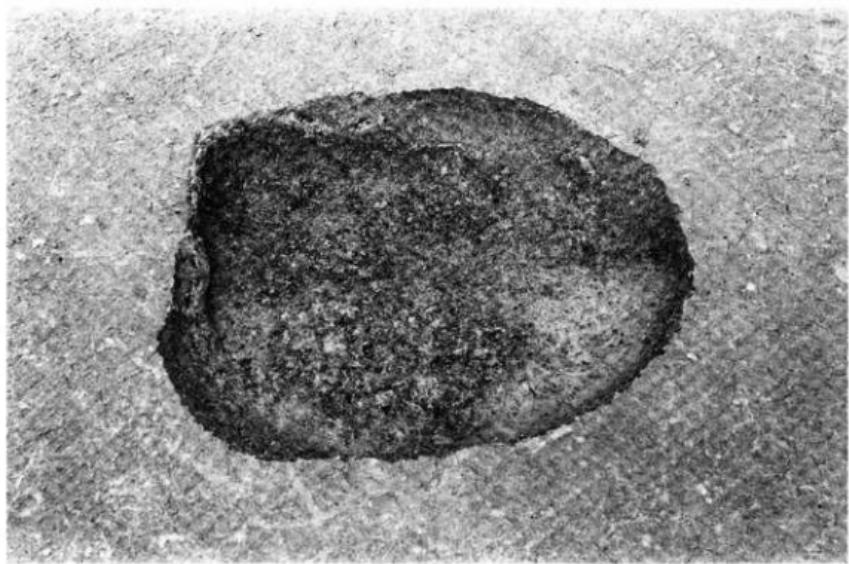


2. 西壁下層 (S09ライン付近)

図版2 下層調査区基本層序

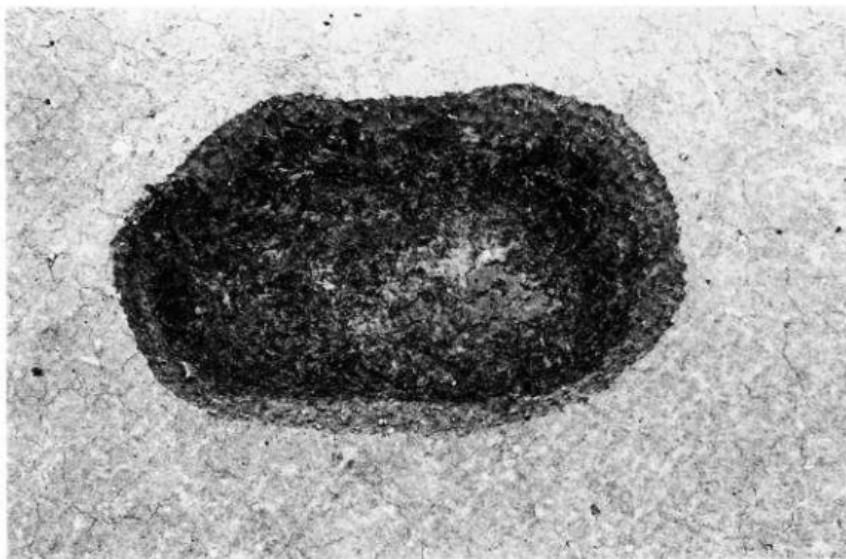


1. SK 1 完整状況（南より）



2. SK 2 完整状況（南より）

図版3 6a層上面検出遺構1（I区）

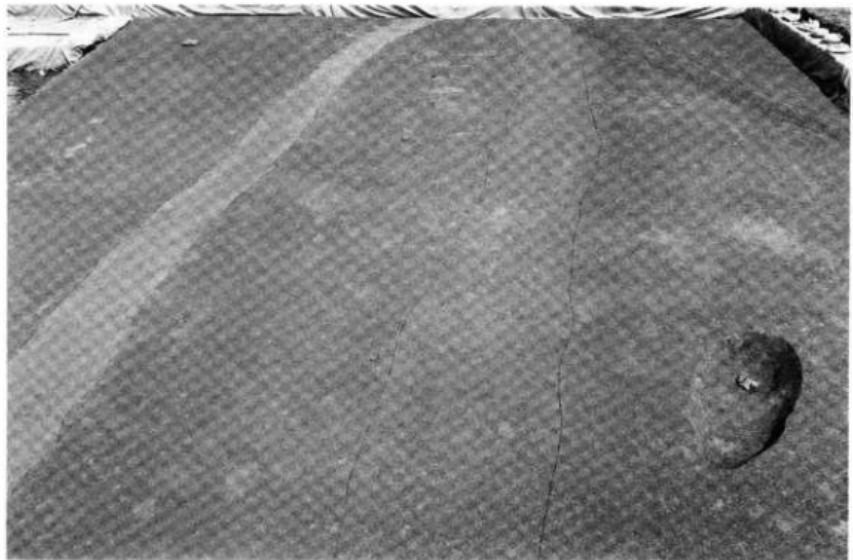


1. SK 3 完掘状況（南より）

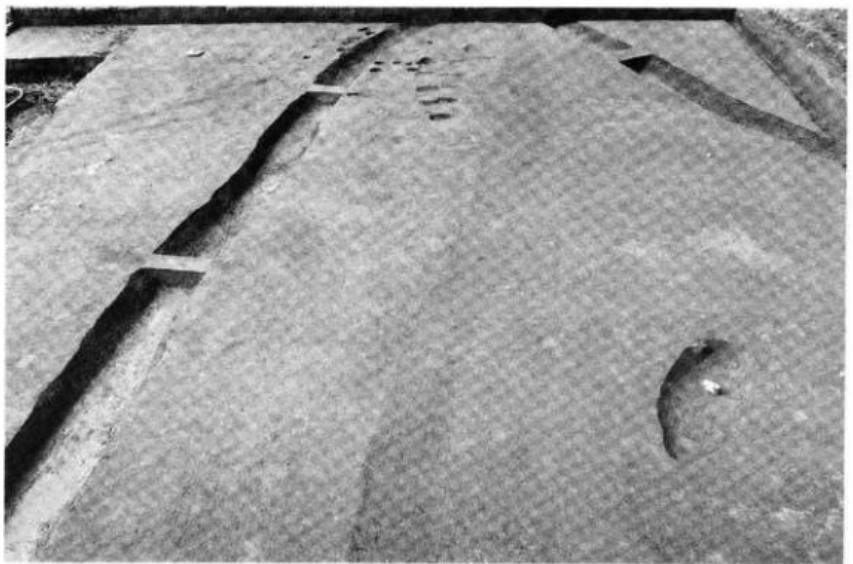


2. SD 1 完掘状況（南より）

図版4 6a層上面検出遺構2（I区）

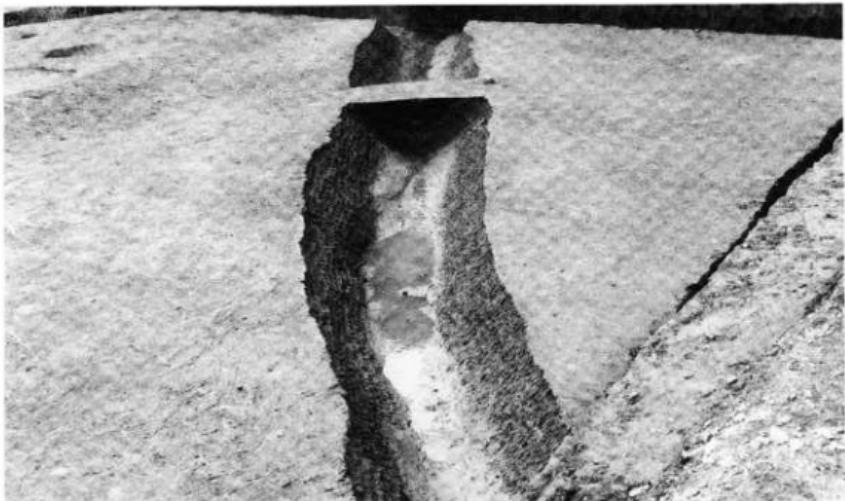


1. 検出状況（南より）

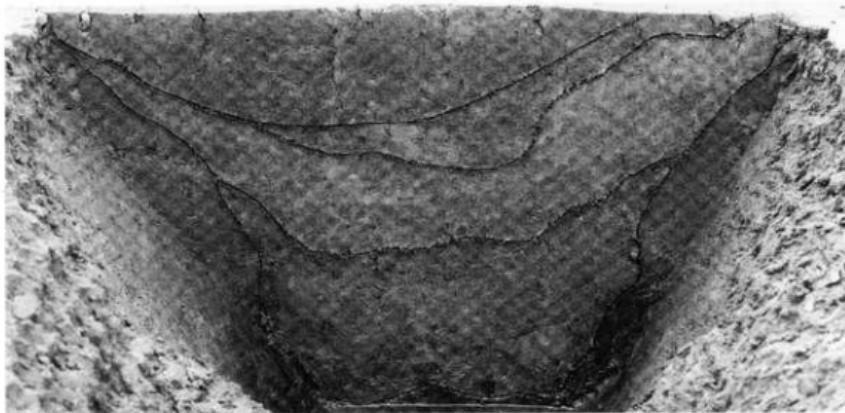


2. 完掘状況（南より）

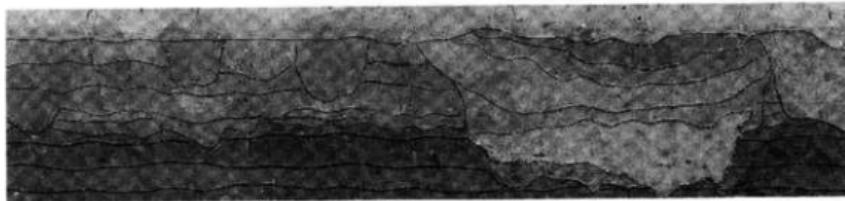
図版5 6a層上面検出遺構3（Ⅱ区）



1. SD 2 完掘状況 (南東より)

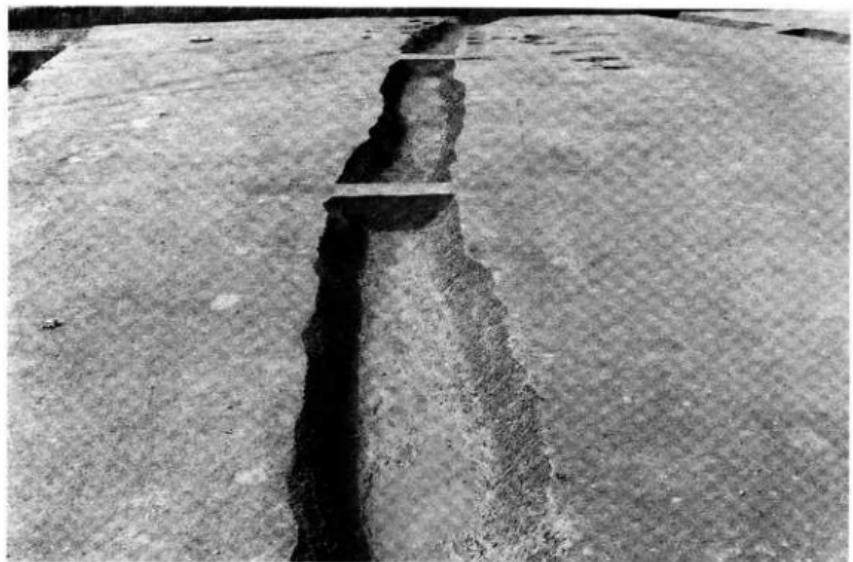


2. SD 2 セクション (SP. A-A')

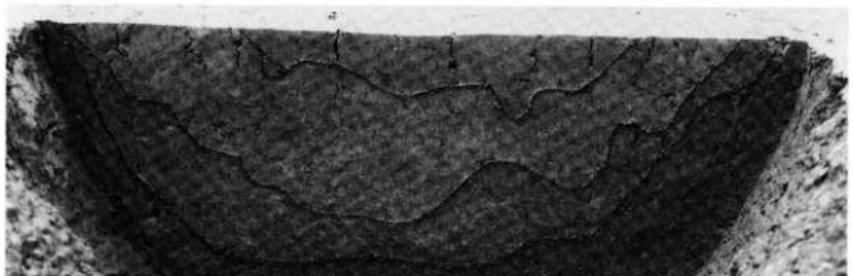


3. SD 2 セクション (調査区東壁)

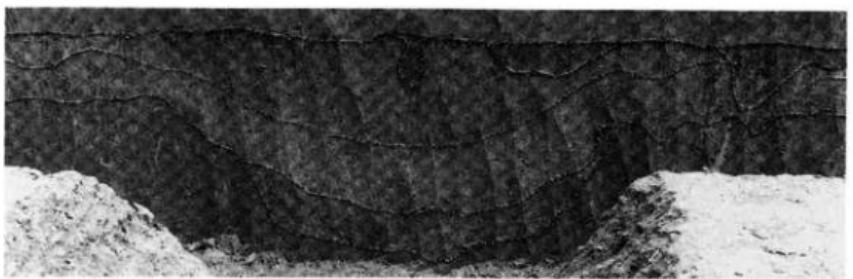
図版 6 6 a 層上面検出構造 4 (II 区)



1. SD 3 完掘状況

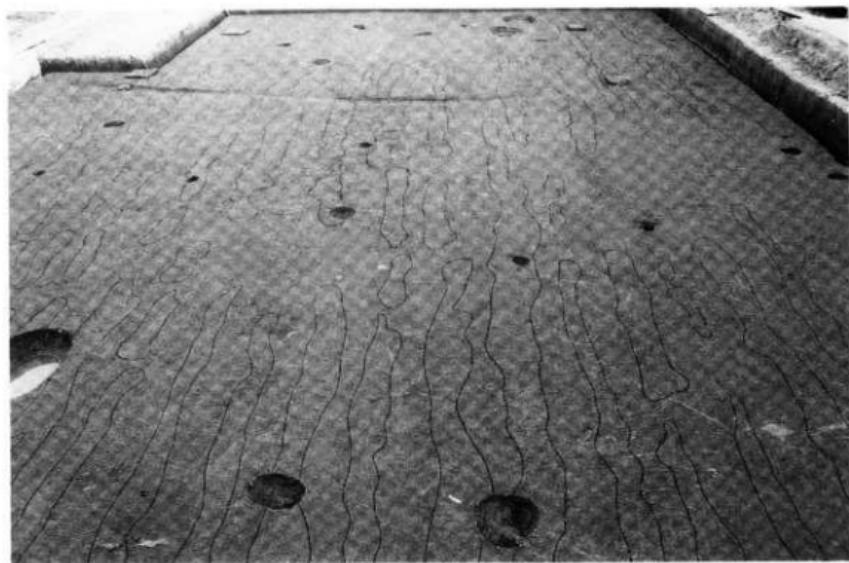


2. SD 3 セクション (SP. B-B')



3. SD 3 セクション (調査区南壁)

図版7 6a層上面検出遺構5(Ⅱ区)



1. 検出状況（西より）

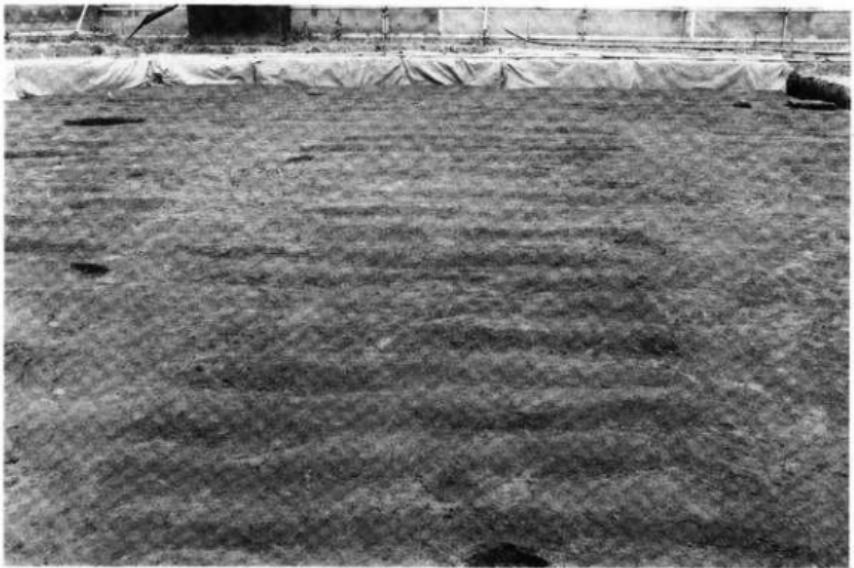


2. 完掘作業風景（北東より）

図版8 6c層島跡1 (I区)

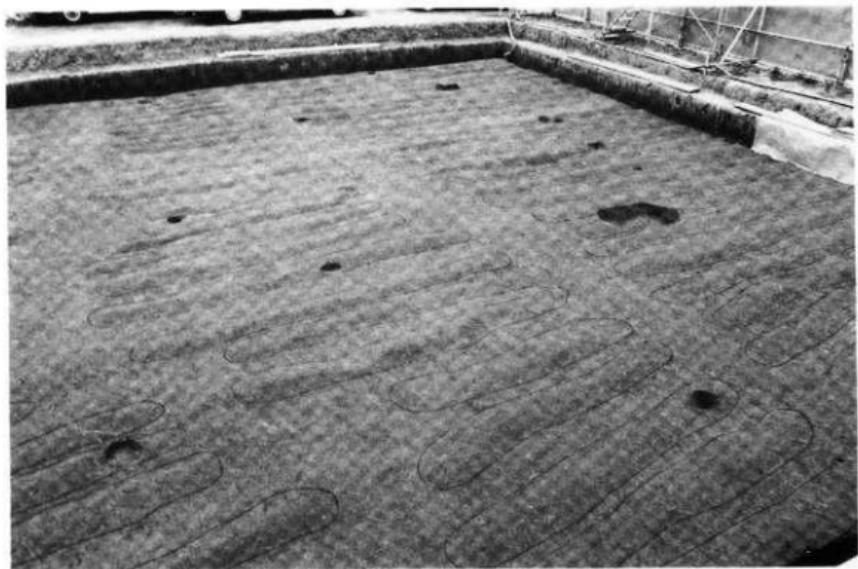


1. 完掘状況（南西より）

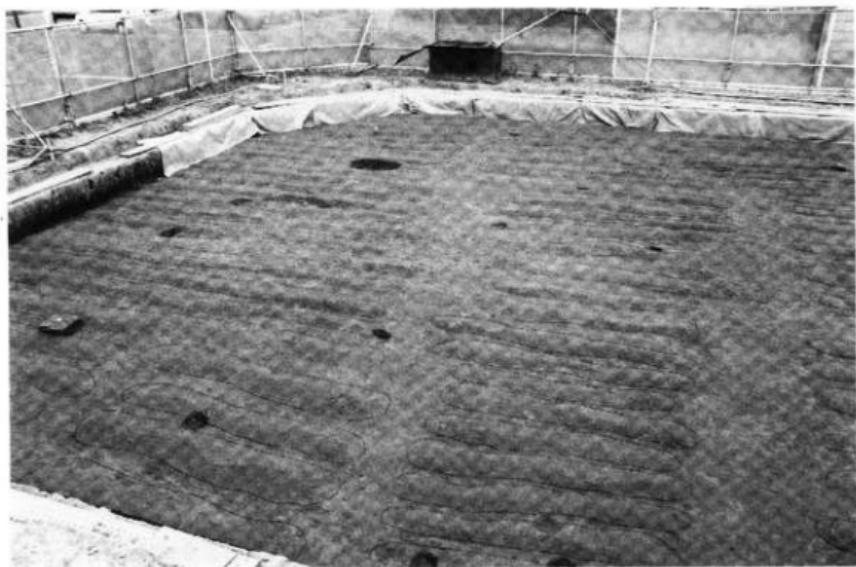


2. 完掘状況（南より）

図版9 6c層島跡2 (I区)



1. 完掘状況（北東より）



2. 完掘状況（南東より）

図版10 6c層崩跡3(1区)



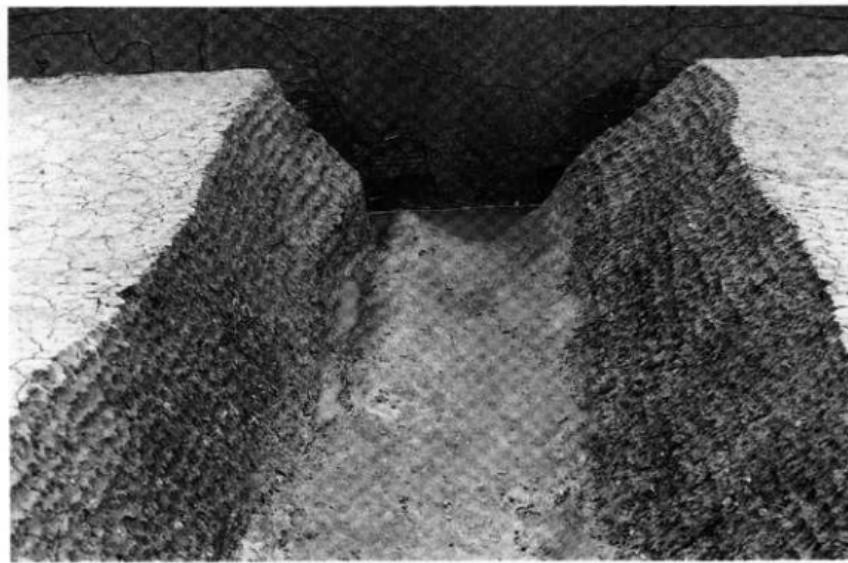
1. 検出状況（南東より）



2. 完掘状況（南より）
図版II 6c層畠跡4（II区）

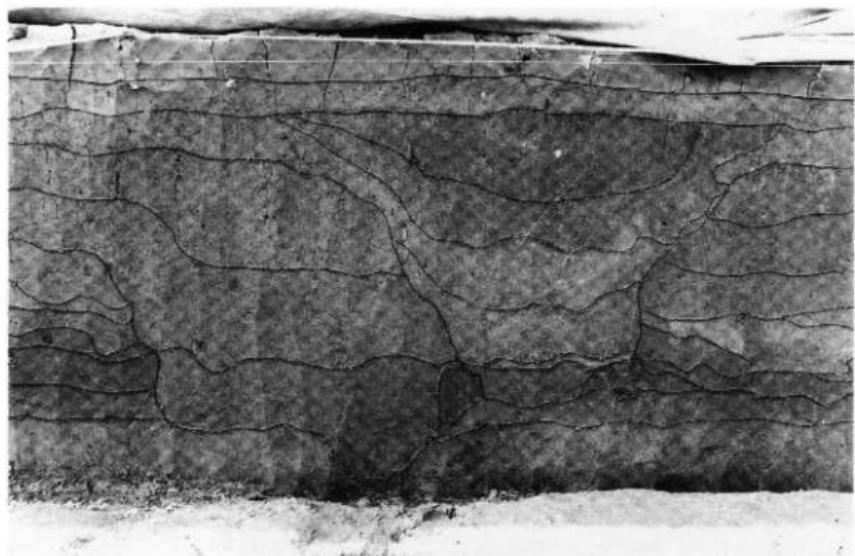


1. SD 4 完掘状況（南より）

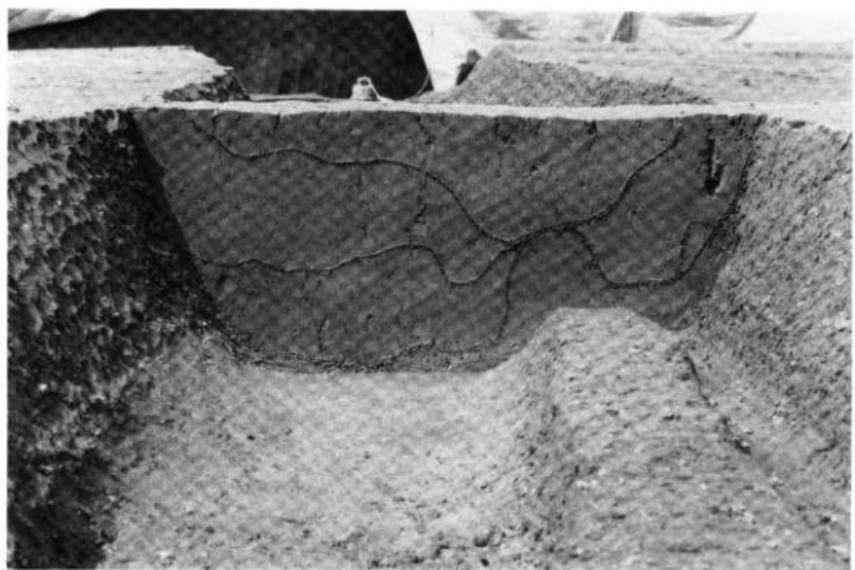


2. SD 4 完掘状況（北より）

図版12 6c層墓跡5（Ⅱ区）

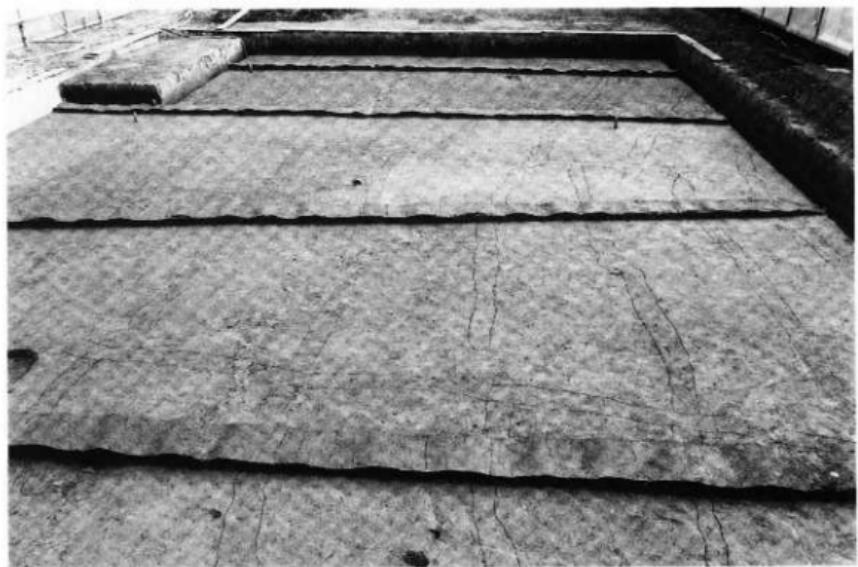


1. SD4 セクション (調査区北壁)



2. SD4 セクション (SP. A-A')

図版13 6c層帯跡6 (Ⅱ区)



1. 耕作痕検出状況（西より）

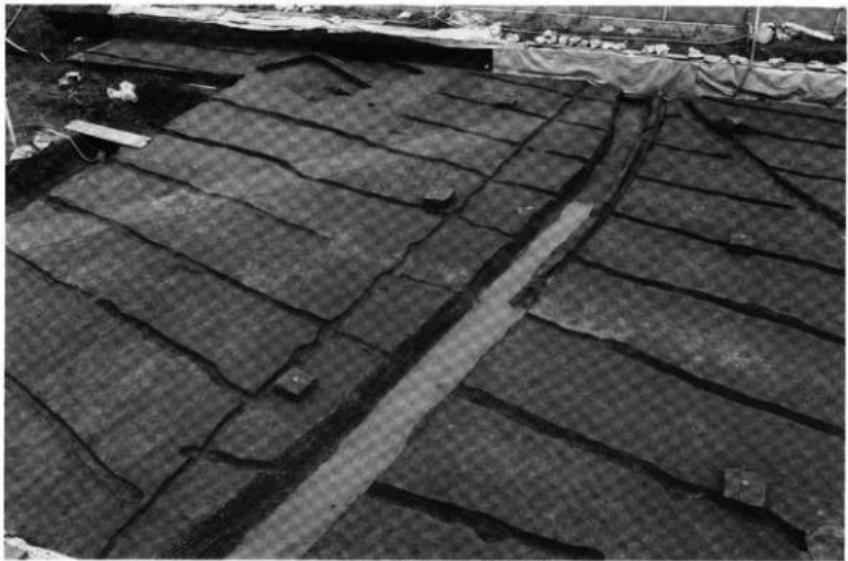


2. 耕作痕完掘作業風景（西より）

図版14 6c 層晶跡 7 (I区)

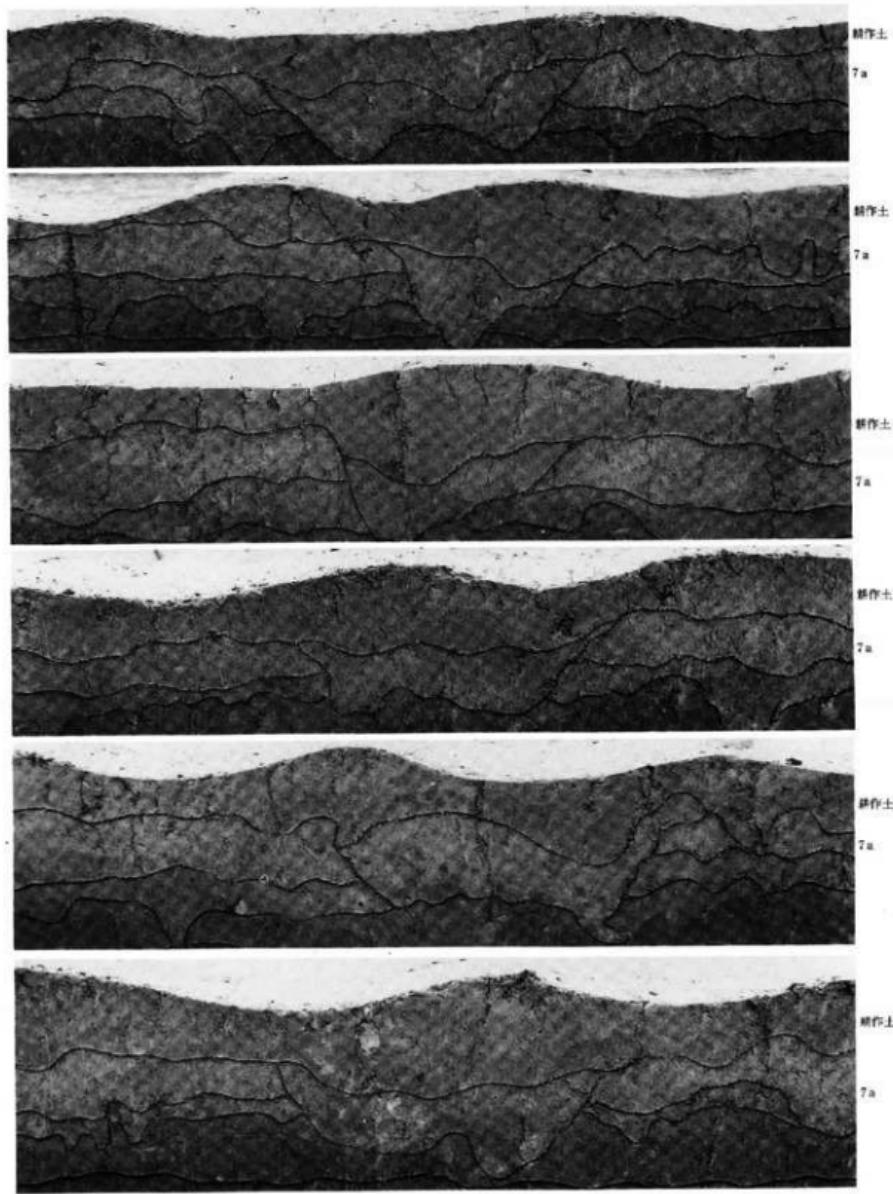


1. I区耕作痕完掘状況（南西より）

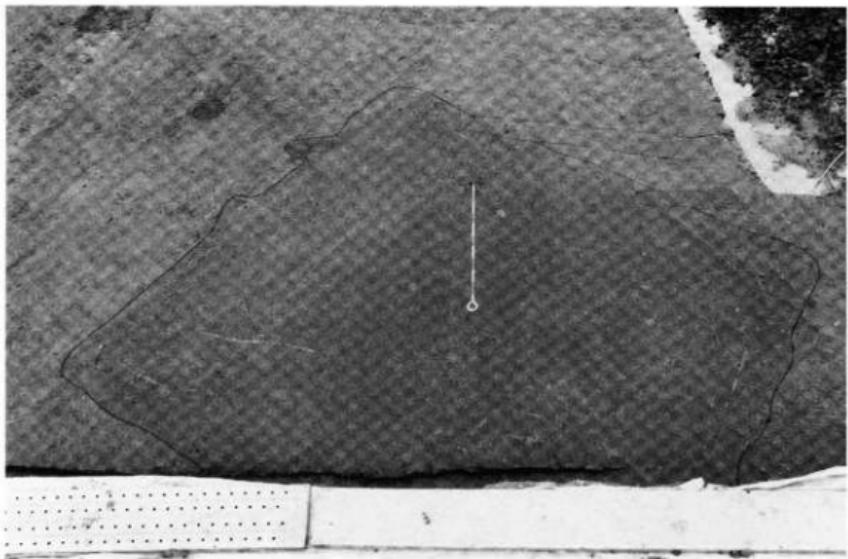


2. II区耕作痕完掘状況（南東より）

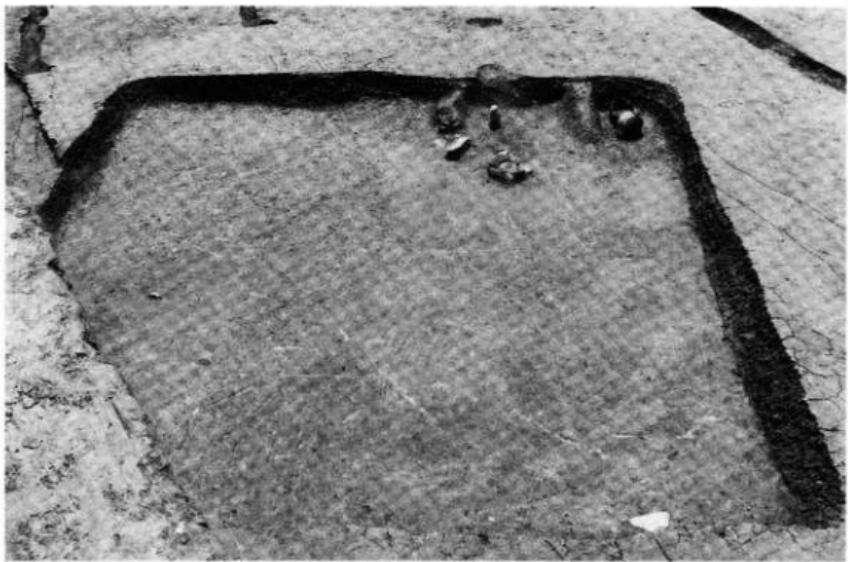
図版15 6c層畠跡8



図版16 6c層断面セクション



1. S I 1検出状況 (北より)

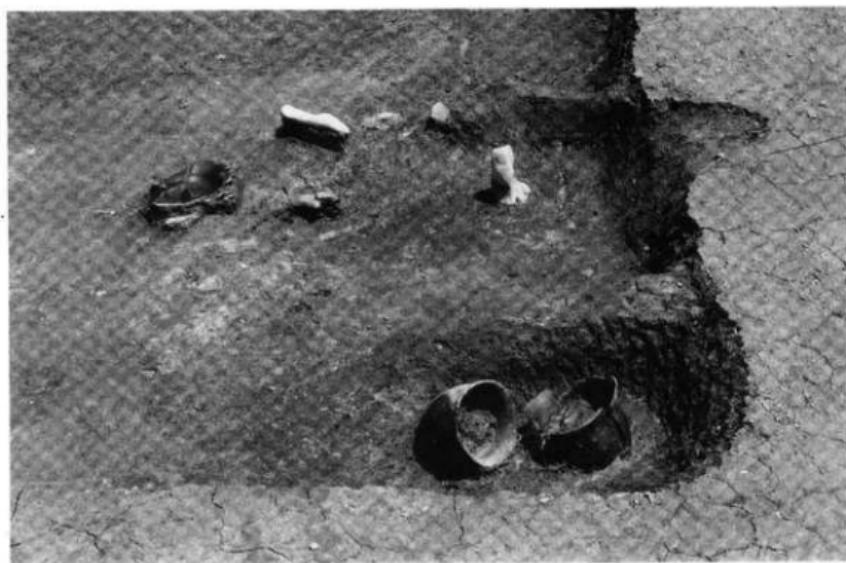


2. S I 1完掘状況 (北西より)

図版17 7a層上面検出遺構1 (II区)

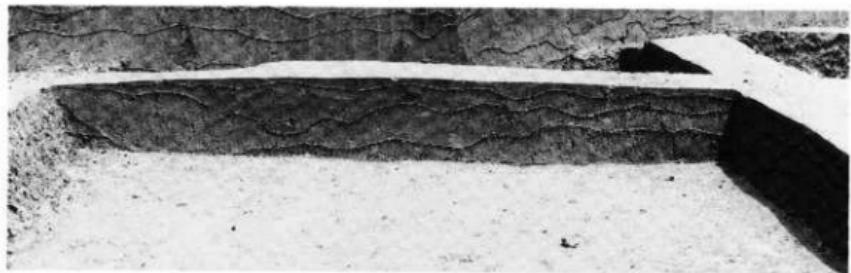


1. S I 1 カマド周辺遺物出土状況（北西より）

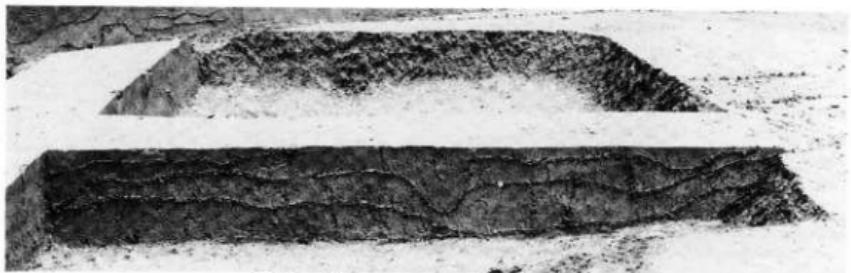


2. S I 1 カマド周辺遺物出土状況（南西より）

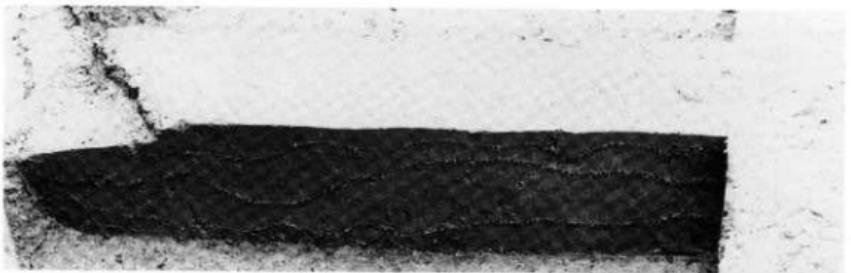
図版18 7 a層上面検出遺構2（Ⅱ区）



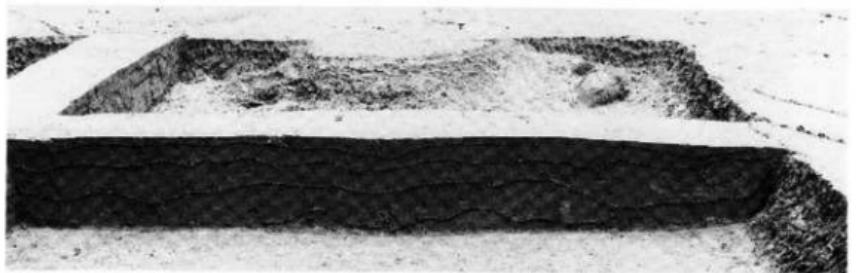
1. S I 1東西セクションベルト西側（南西より）



2. S I 1東西セクションベルト東側（南西より）

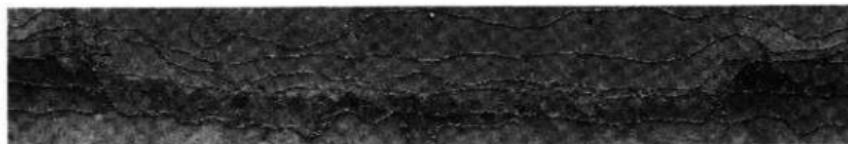


3. S I 1南北セクションベルト北側（北西より）



4. S I 1南北セクションベルト南側（北西より）

図版19 7 a層上面検出造構3 (II区)



1. SI 1セクション (調査区北壁SP. D-D')



2. SI 1カマド・1号ピットセクション (SP. E-E')



3. SI 1 2号ピットセクション (SP. F-F')

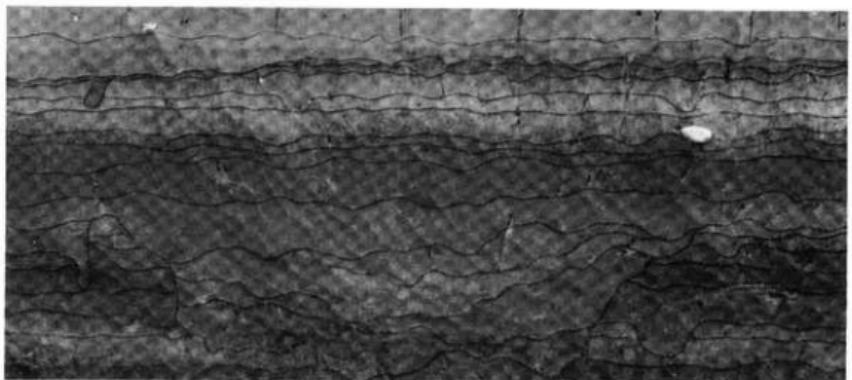


4. SI 1 3号ピットセクション (SP. G-G')

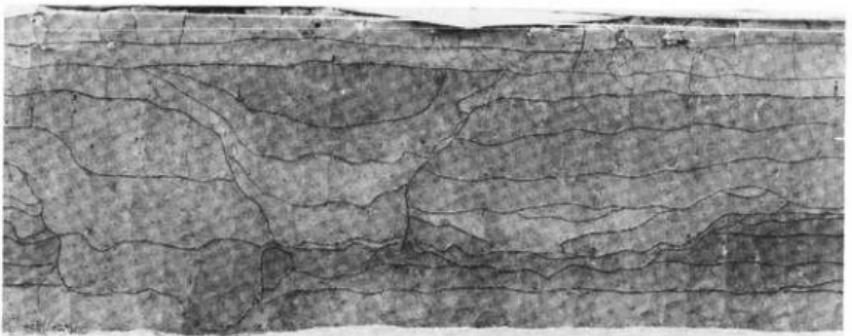
図版20 7a層上面検出遺構4 (II区)



1. II区SD5完掘状況(南西より)



2. SD5セクション(I区調査区南壁)

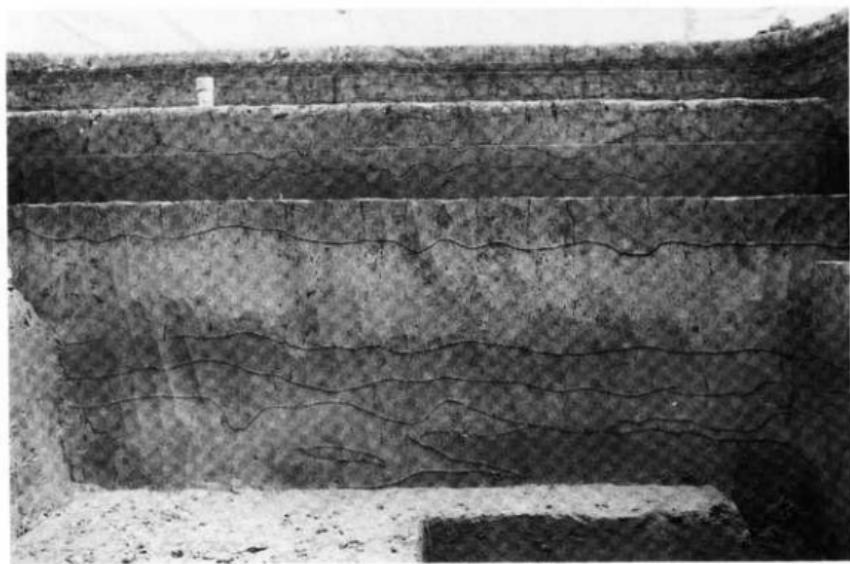


3. SD5セクション(II区調査区北壁)

図版21 7-a層上面換出遺構5

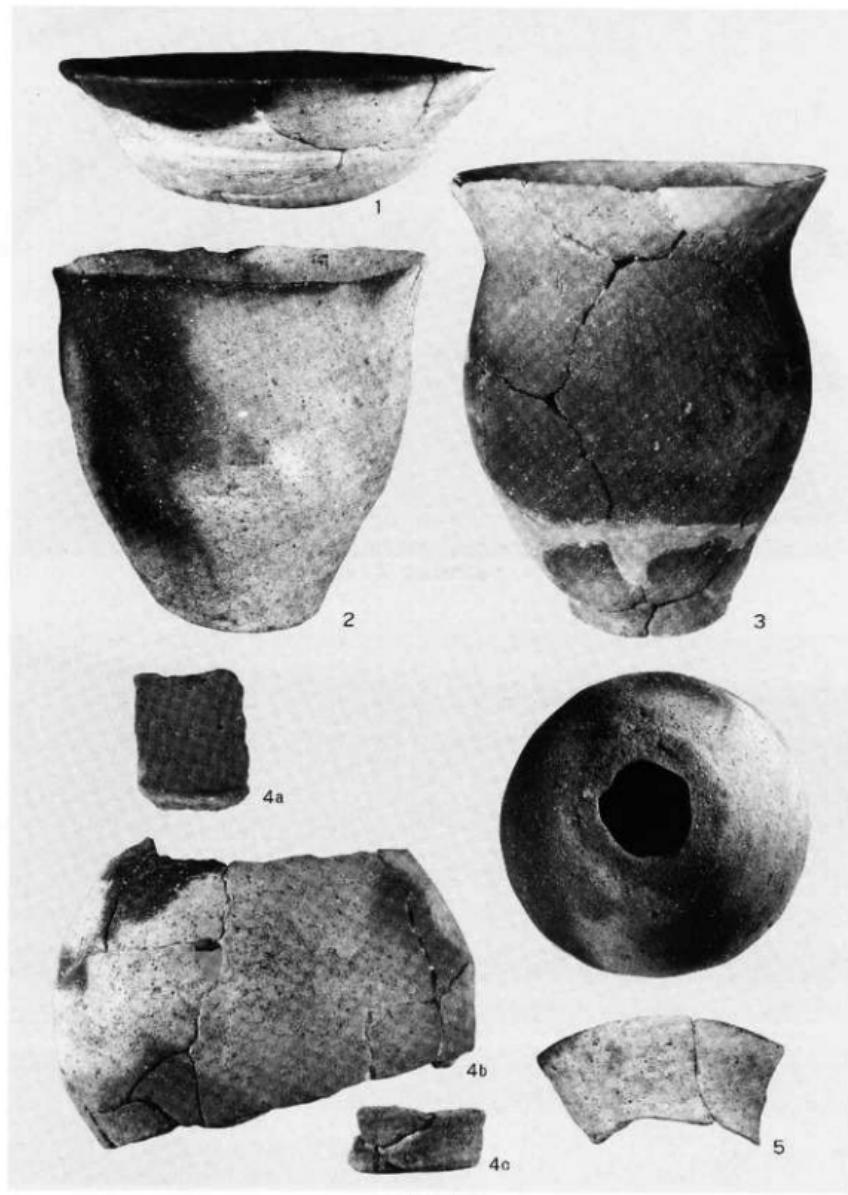


1. 下層調査区全景（南より）



2. 南壁セクション（E08ライン付近）

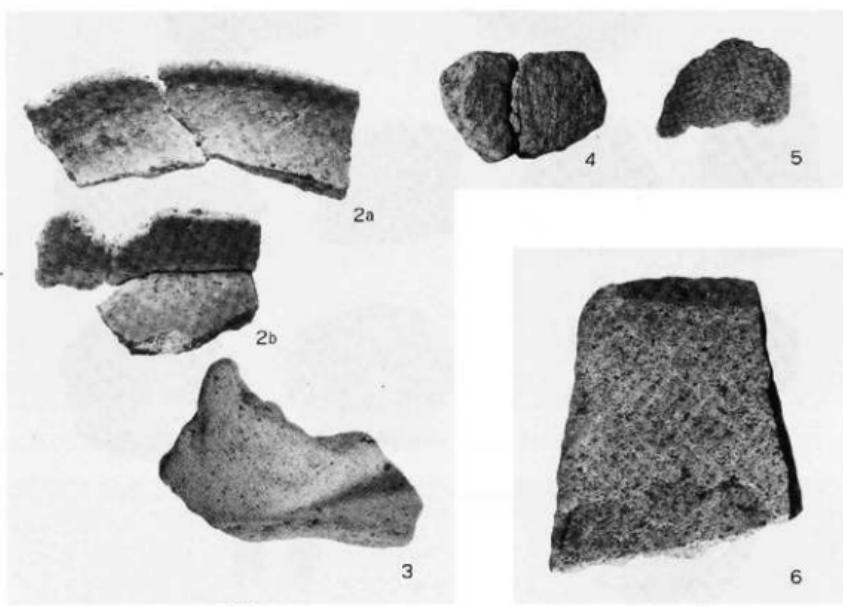
図版22 下層調査区



1～6：土器
図版23 S I 1 出土遺物



S I 1 出土

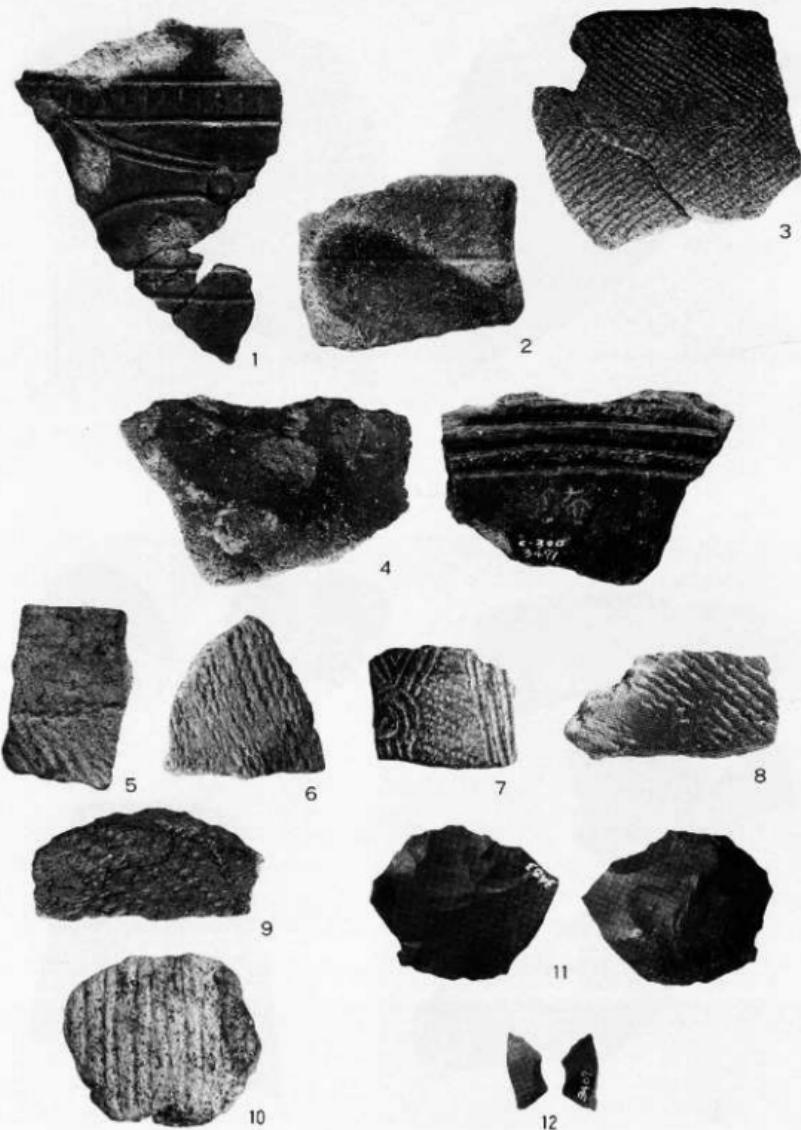


6 c 層出土

SD 5 出土

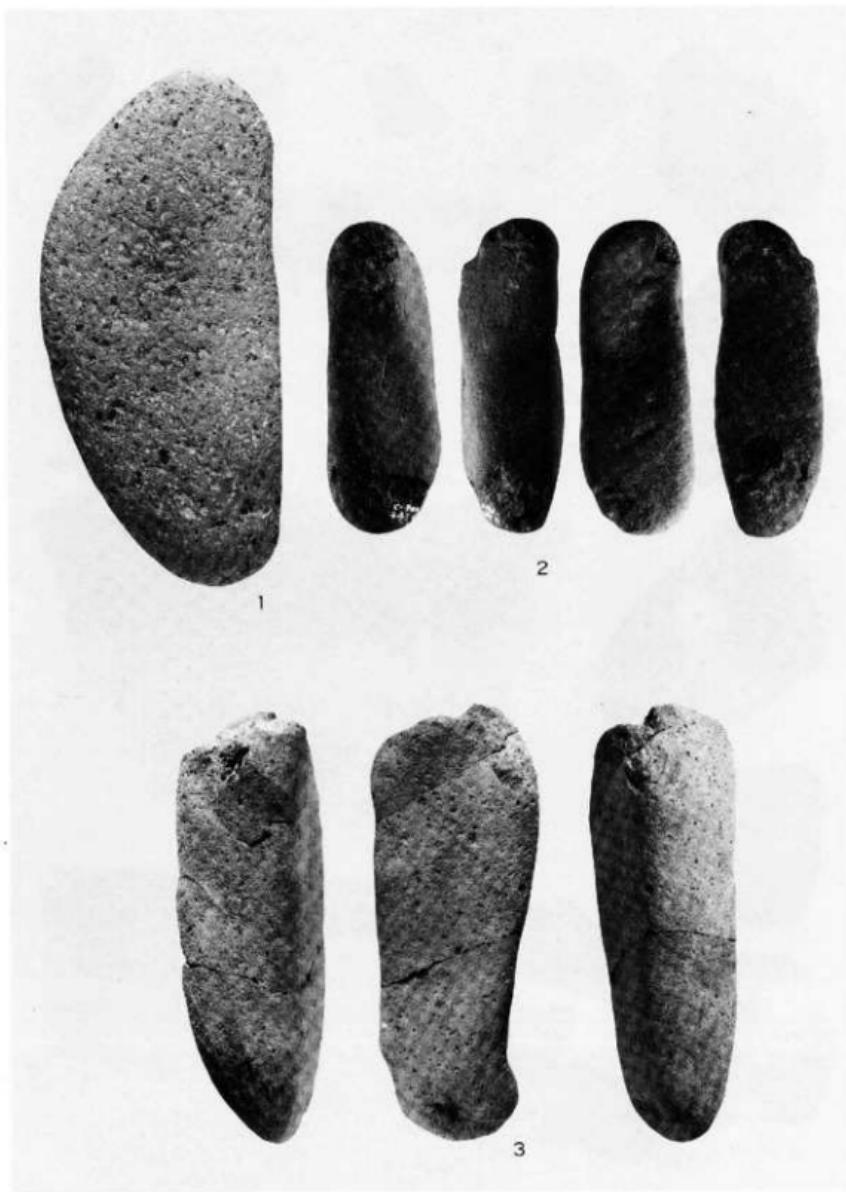
1・6 : 碳石器 2~5 : 土師器

図版24 遺構内出土遺物



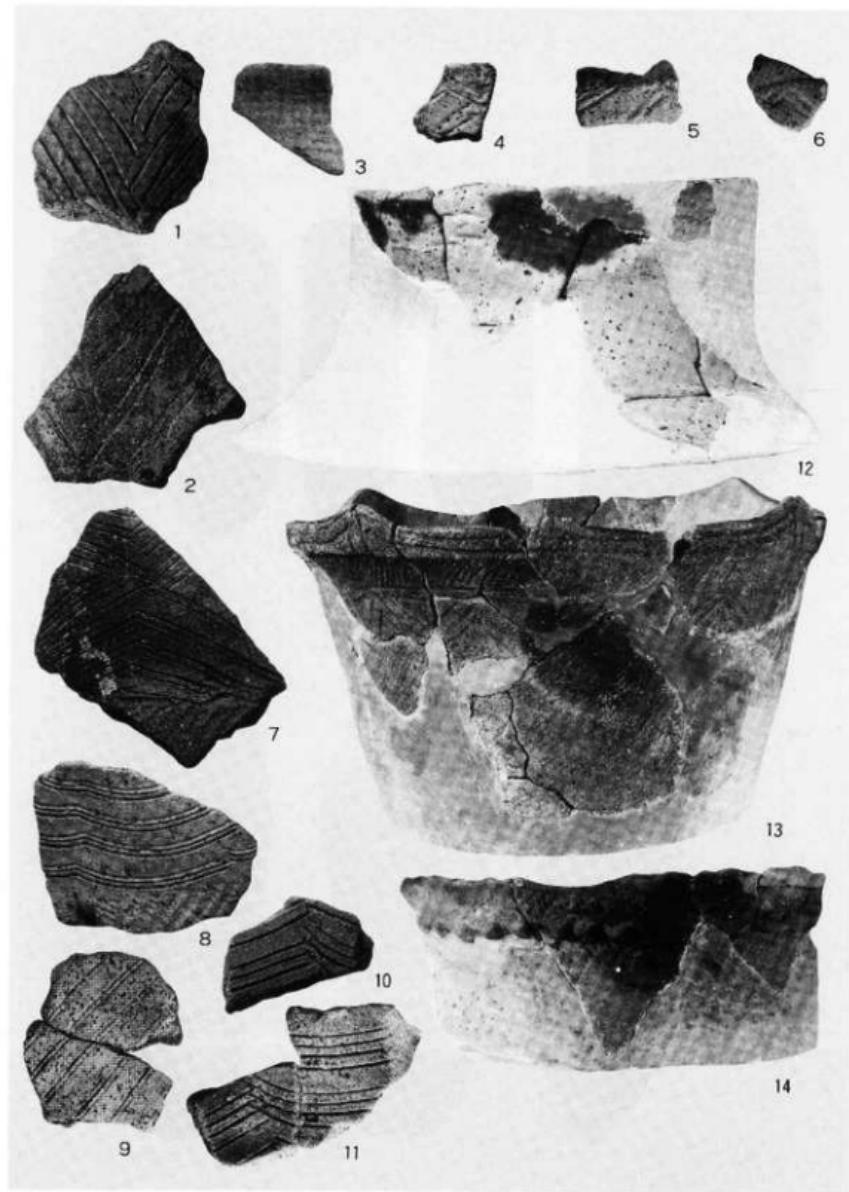
1～9：縄文土器 10：土製円盤 11：石核 12：二次加工のある剥片

図版25 縄文時代出土遺物1（土器・土製品・石器）

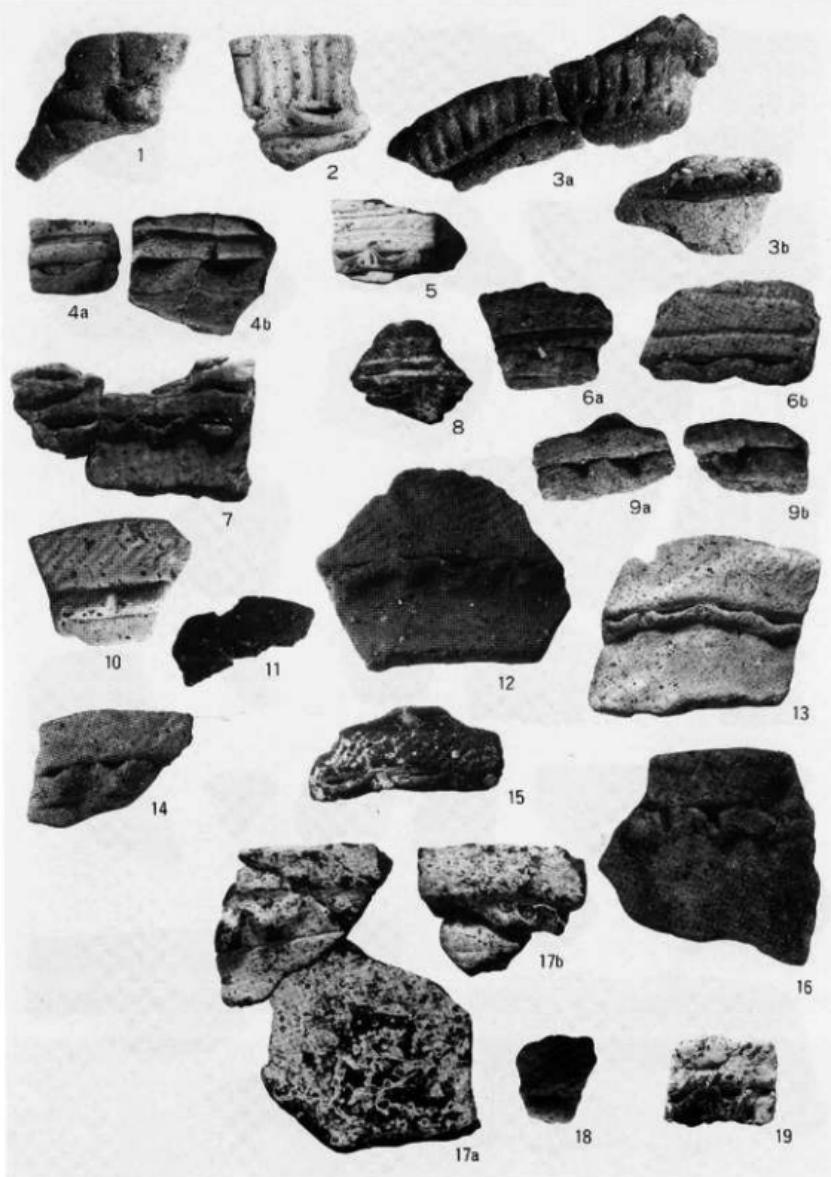


1~3: 磨石

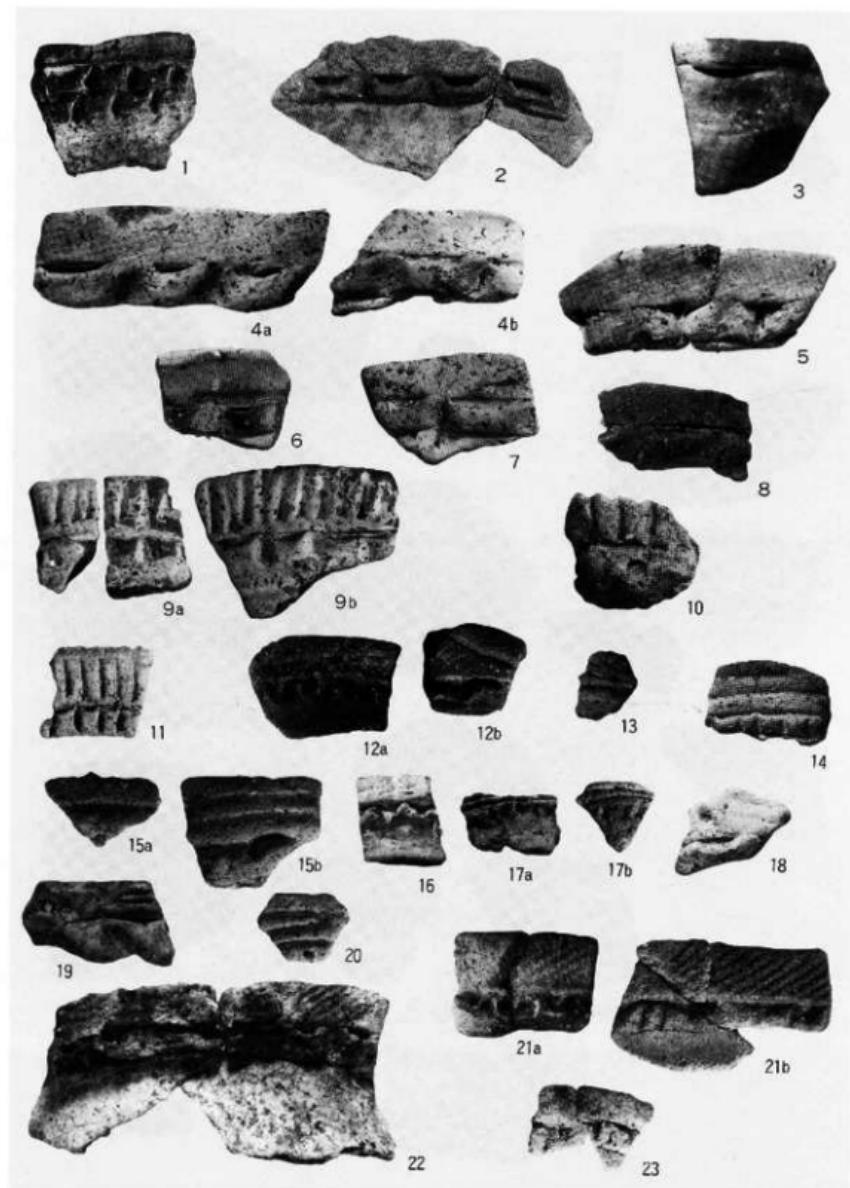
図版26 桧文時代出土遺物2(石器)



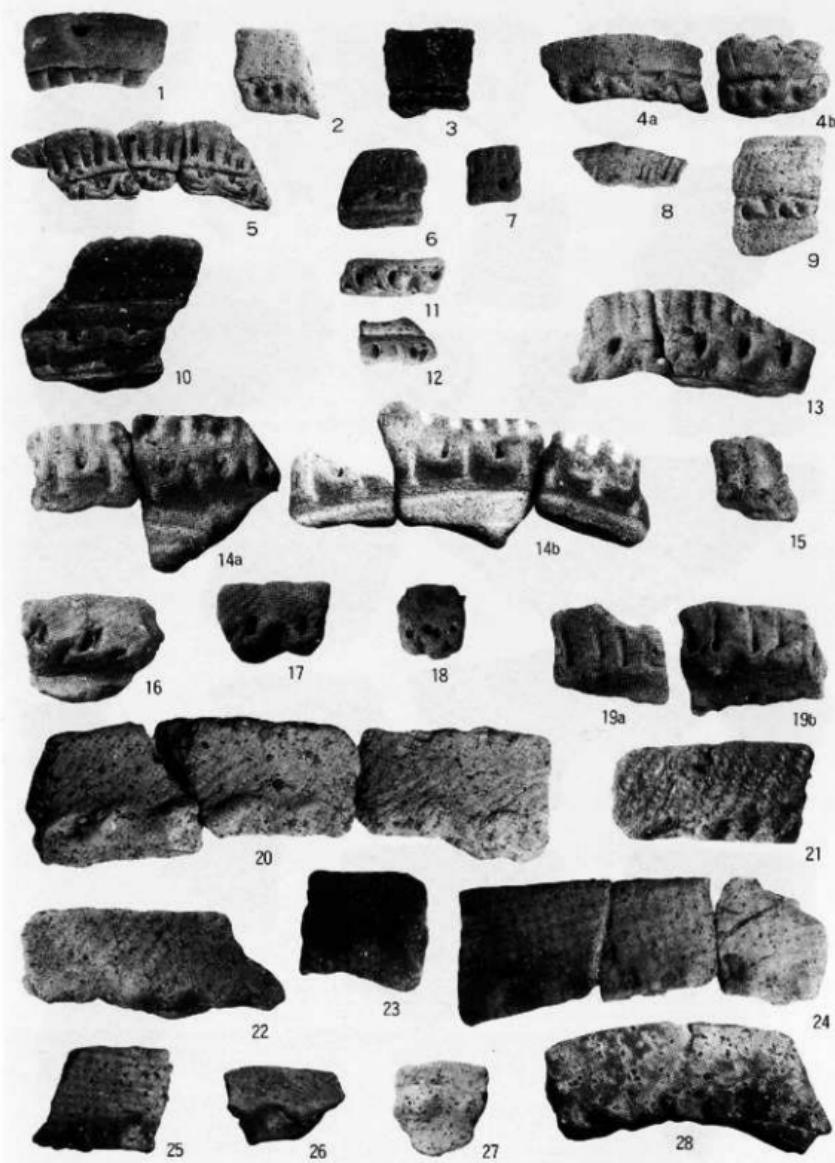
図版27 弥生時代出土遺物1（土器）



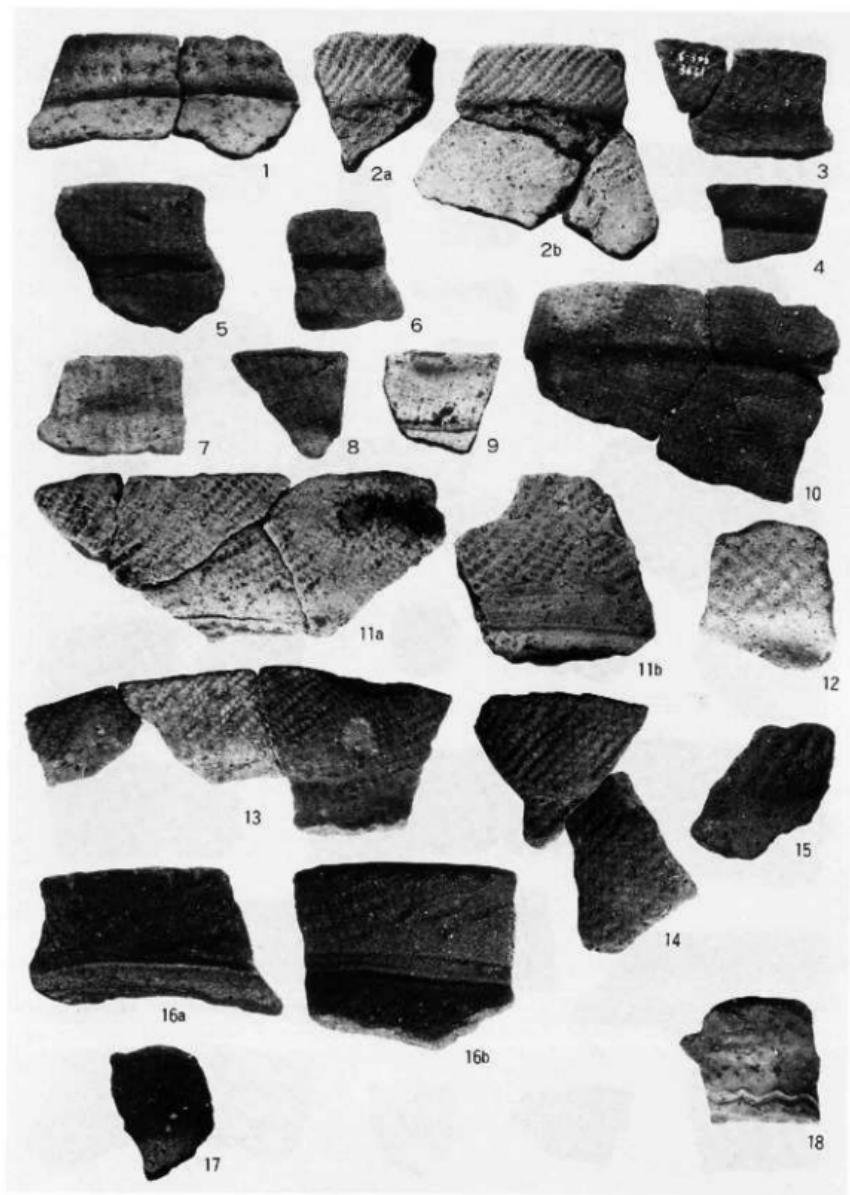
図版28 弥生時代出土遺物2（土器）



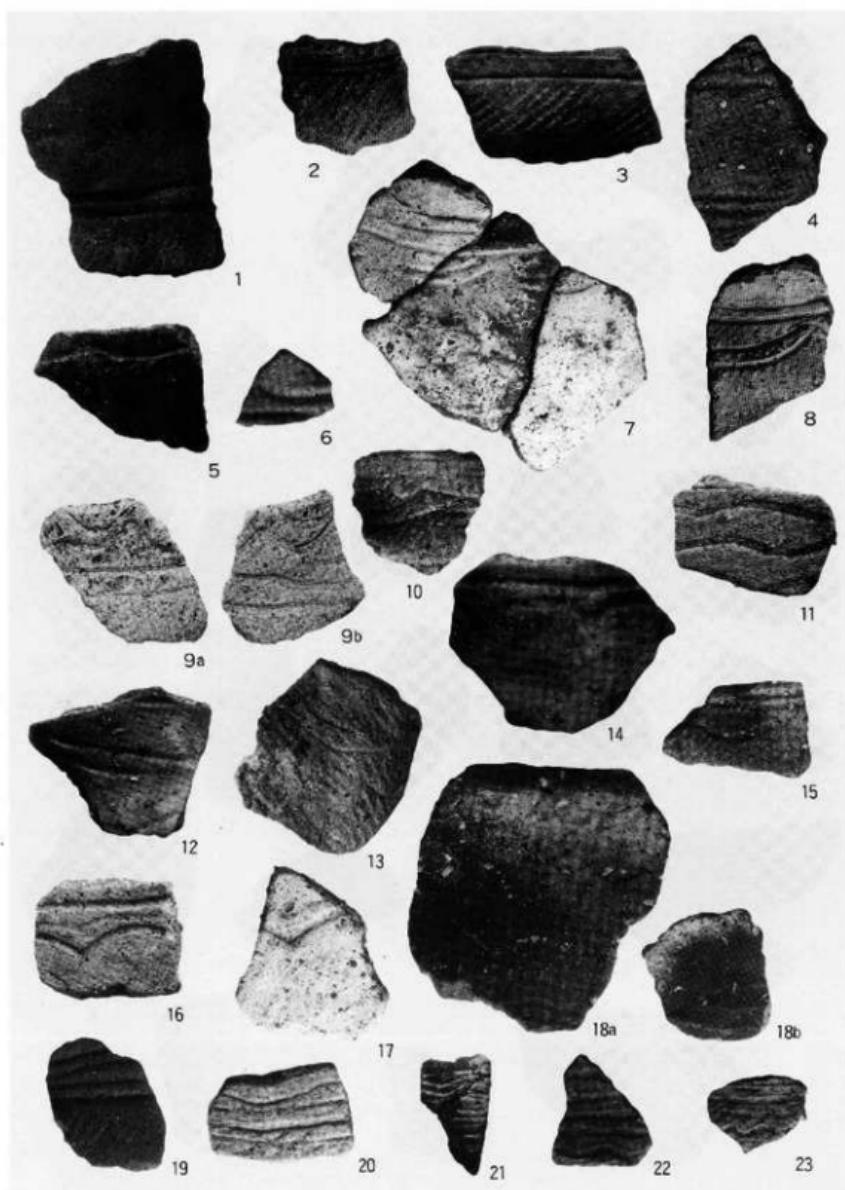
図版29 弥生時代出土遺物3（土器）



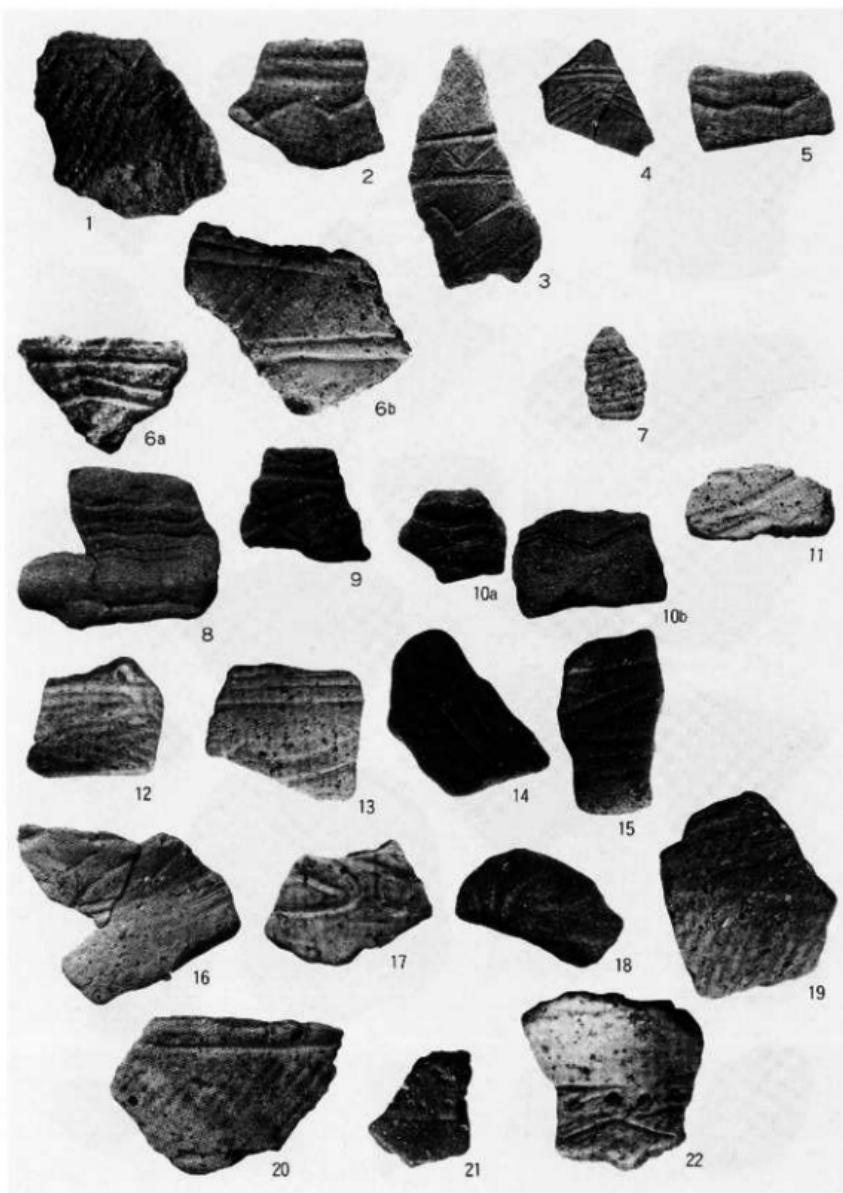
図版30 弥生時代出土遺物4（土器）



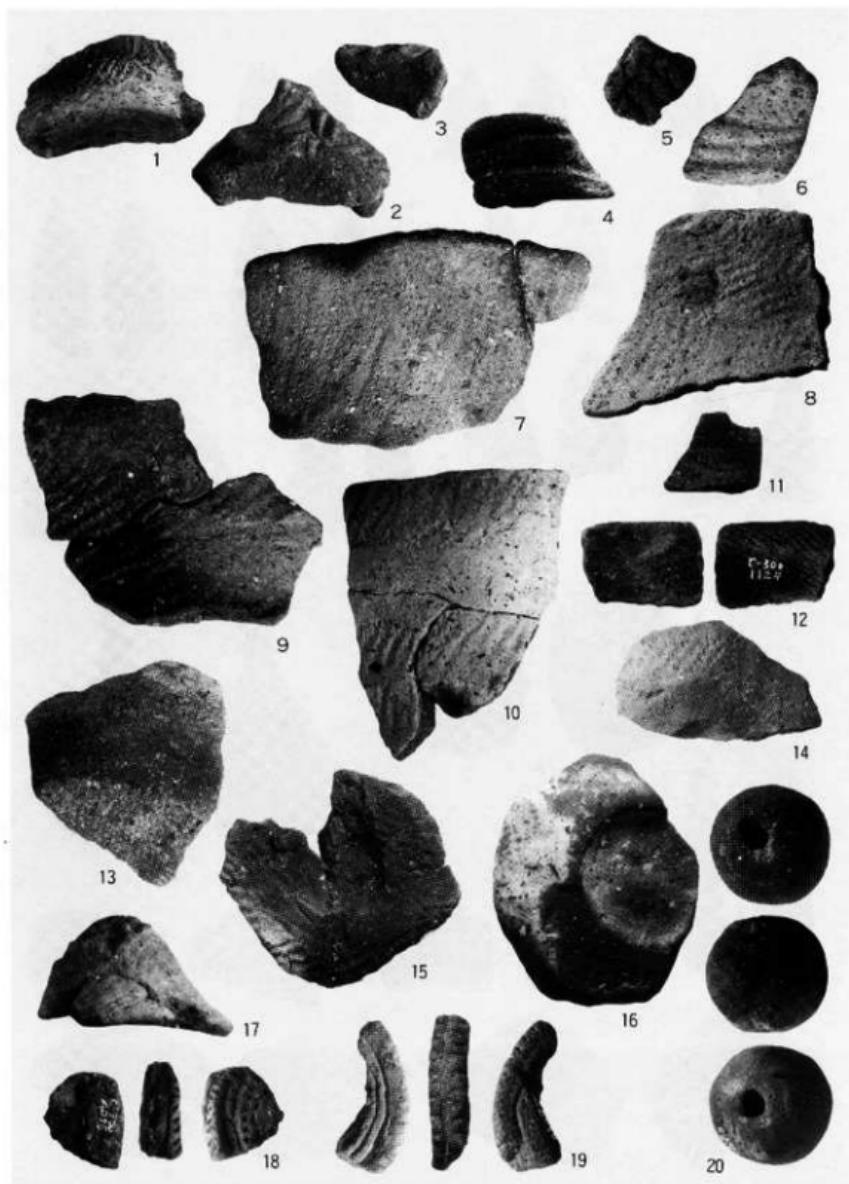
図版31 弥生時代出土遺物5（土器）



図版32 弥生時代出土遺物6（土器）

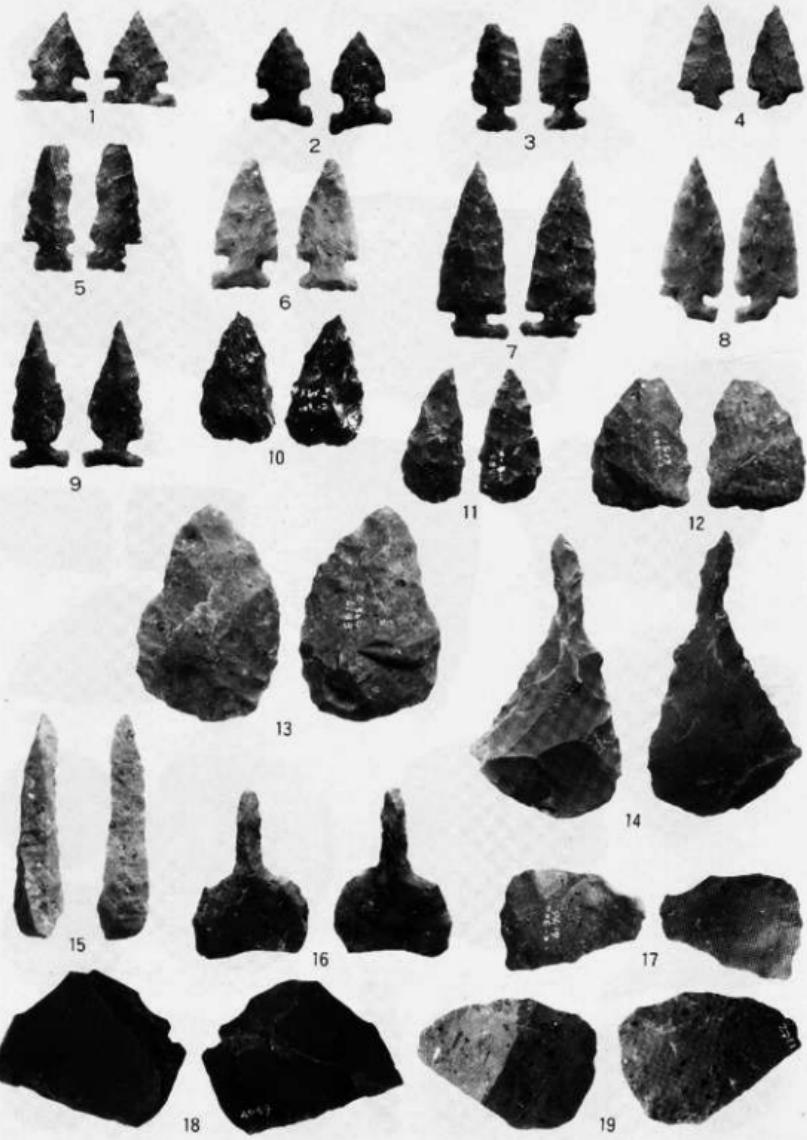


圖版33 弥生時代出土遺物7（土器）



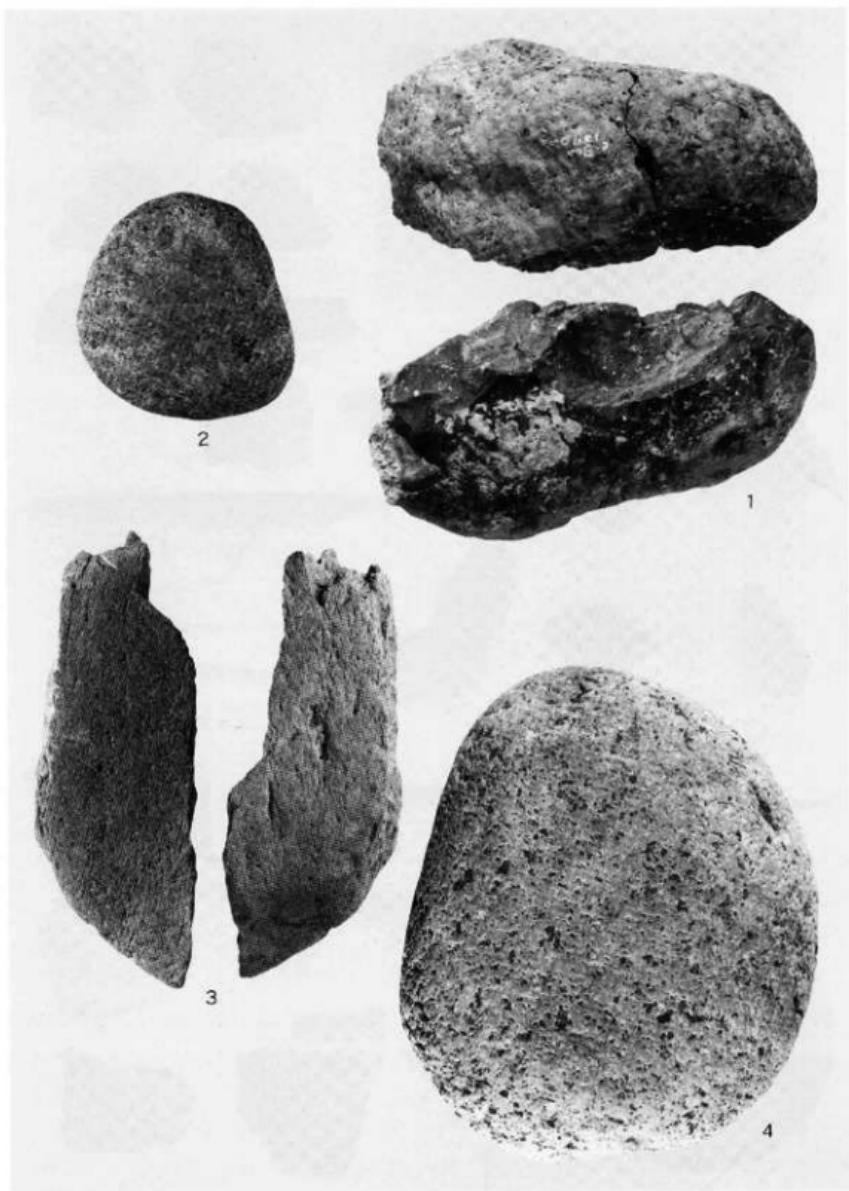
1~8: 土器 19・20: 織錐車 21: 土玉

図版34 弥生時代出土遺物8（土器・土製品）



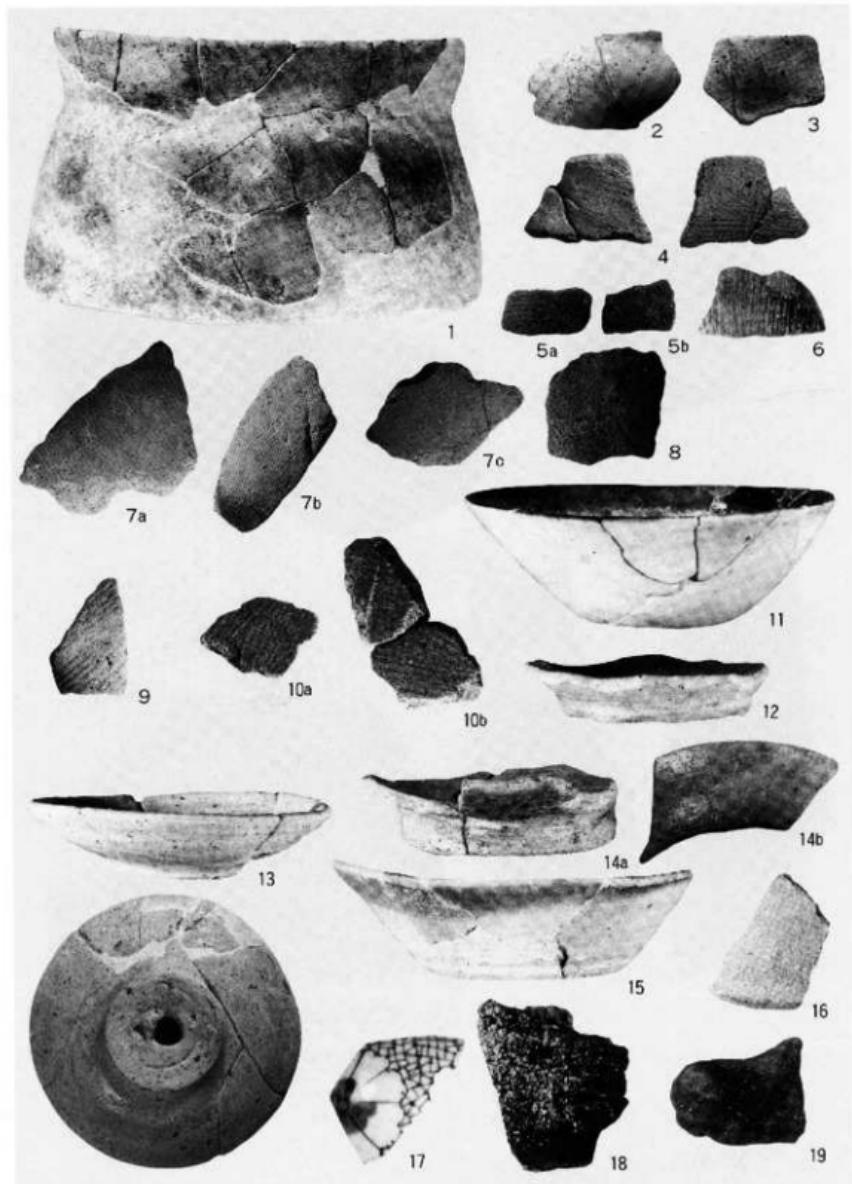
1~12: 石鏃 13: 尖頭器 14~16: 石錐 17~19: 不定形石器

図版35 弥生時代出土遺物9(石器)



1 : 石核 2 ~ 4 : 磨石

図版36 弥生時代出土遺物10 (石器)



1~15: 土師器 16~18: 赤燒土器 19・20: 積層器 21: 磁器 22: 羽口 23: 土製品?

圖版37 基本層1~7層出土遺物

×400



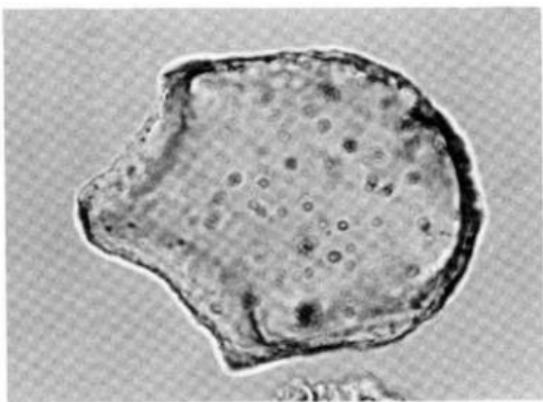
1. イネ №1地点 8a層



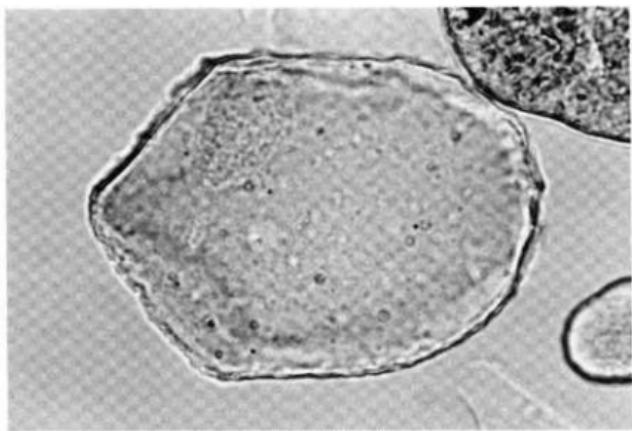
2. イネ №2地点 7b層



3. イネ №1地点 5b層



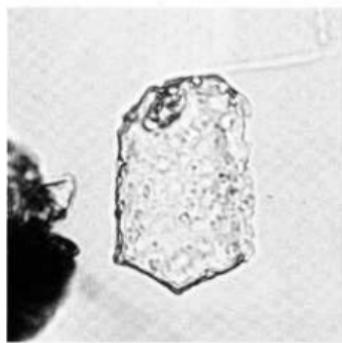
4. ヨシ属 №2地点 8b層



5. ヨシ属 №1地点 8a層

図版38 プラント・オパール顕微鏡写真1

×400



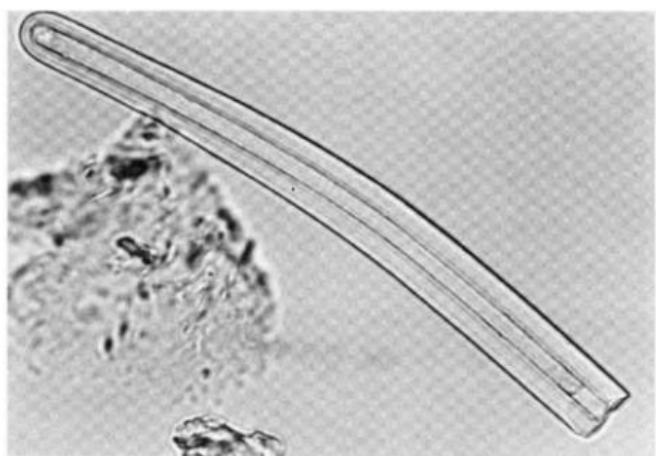
1. タケ亜科(クマザサ属) № 1地点 5 b層



2. タケ亜科 № 1地点 8 a層



3. タケ亜科 № 2地点 7 b層



4. 海綿骨針 № 2地点 8 b層

図版39 プラント・オパール顕微鏡写真 2

文化財課職員録

課長 白鳥良一

管理係

係長 菅原澄雄
主事 佐藤正幸
〃 高橋三也
〃 庄子厚
〃 佐藤寿江

調査第一係

係長 加藤正範
主任 結城慎一
〃 村上道子
教諭 佐藤好一
主任 篠原信彦
〃 木村浩二
〃 佐藤洋
主事 吉岡恭平
〃 金森安孝
教諭 小川淳一
主事 工藤哲司
〃 主浜光朗
〃 長島栄一
〃 工藤信一郎
教諭 神成浩志
〃 竹田幸司
〃 稲葉俊一
主事 佐藤淳
教諭 川名秀一

調査第二係

係長 田中則和
主事 佐藤甲二
〃 渡部弘美
〃 斎野裕彦
〃 荒井格
〃 中富洋
〃 平間亮輔
〃 五十嵐康洋
〃 菅原裕樹
主事 渡部紀
教諭 熊谷裕行

仙台市文化財調査報告書第173集

下ノ内浦遺跡

—第4次発掘調査報告書—

平成5年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町3-7-1
仙台市教育委員会文化財課

印刷 株式会社共新精版印刷

仙台市宮城野区日の出町2-4-2
TEL 236-7181

